

---

# 戦人の迷宮探索（改訂版）

乙黒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦人の迷宮探索（改訂版）

### 【Nコード】

N0765Y

### 【作者名】

乙黒

### 【あらすじ】

世界発の仮想現実の技術が使われたゲーム、“ダンジョン・セルボニス”がついに発売された。世界中のゲーマー達が待望したゲームをプレイし、ログアウトすると一転。――地獄の迷宮探索が始まった。主人公である青年は、この世界独特の強さである――レベルやスキルそれ等が最低ランクだった。ゆえに、この世界の元の住人や、新しく現れたゲームプレイヤーから嘗められる日々が続く。やがて大きな渦に巻き込まれた彼は、善につくのか、悪につくのか、その大きな選択を強いられるのだった。

この作品は、戦人の迷宮探索（仮題）の改訂版です。前回はあまりに稚拙な作品だったので、思い切って書き直すことにしました。読者様には多大な迷惑をおかけしますが、今後はこちらの作品のご応援をお願いします。

## 第零話 プロローグ（前書き）

まだ序盤ですが、できるだけ早く前まで追いつきたいと思っていますので、これからも応援お願いします。

## 第零話 プロローグ

太陽の光が閉ざされた深い闇の中で、壁に生えている白い花だけが明かりをくれる通路があった。天井は高く、右を見ても左を見ても壁。幅は狭く、幅は二メートル程。

そんな通路はただ長く、後も先も闇だけが広がっていた。

ここは、迷宮ダンジョンと呼ばれる場所だった。秘宝が、財宝が、金銀が、数多く眠り、荒稼ぎしたい者にはとっておきの場所である。

だが、そんなメリットばかりの迷宮ダンジョンだが、そこには危険もある。  
トラップ モンスター  
罠や、怪物が潜んでおり、時には命を失うこともあるのだ。

だが、それが苦とせず、迷宮ダンジョンを突き進むのが、“冒険者”という生業だった。

命を糧に金を求め、犠牲の果てに栄光がある。

冒険者とは、そんな職業であつた。

そんな場所にただ一人——灰色の青年は立っていた。

彼は、変わった青年であつた。

麻製の服の上を灰色のマントをで包み、顔は愉悦で染まっただけ、ただ歩みを進めるだけ。

云うならば、一般人の“格好”だった。これで町に出ても、なんらおかしくないだろう。間違つても、命を糧に金を求める——冒険者の格好ではない。

そんなここに不釣り合いな彼が、ここに居たのは理由があつた。それは生きるためだ。

急に独りになった彼は、現在金目の物を持っていなかった。生き

るためには金が必要だ。その金を稼ぐため、彼は冒険者になったのである。

今の彼は、そんな職業に就いて早一週間経っていた。

冒険者という職業に慣れない最初は戸惑いもあったが、今は“ある理由”からこの職業に悦びさえ覚えていたのである。

それは、彼が狭い通路をしばらくの間進んだ時のことであつた。そこでは目に強い光が現れ、光の中から音が聞こえたのだ。

「くつそお！ どうしてこんな低階級にこんな高レベル怪物モンスターがいるんだー！」

それは、不運を嘆く、哀れな者の声であつた。  
悲痛な声が聞こえる場所は、通路の終わりだ。だが、その続きは壁ではなく、大輪の白い花が天井を多い尽くすほどある広い空間がある。

そこは、剣呑な空気であつた。

中世の鎧を着た三人の“冒険者”と、人より二回りも大きい金属で覆われた二足歩行の人によく似た体の構造を持った怪物モンスターがいて、お互いがお互いを目で牽制しあっていた。

敵を睨みながらも、弱弱しく立っている冒険者の武器は、それぞれ槍と棍棒と弓だ。

この三人は既にこの戦闘の数分前、力量レベルが22の敵を十体倒して

おり、本来なら宿に帰って休みたいところだった。  
ゆえに体調が万全ではなく、呼吸も深呼吸である。

彼等とは反対に、堂々と立っていた怪物の姿は——異様だった。  
防具のような纏っている金属が赤色。体の前に逆さに置いた太く、  
分厚い大剣でさえも赤色である。

その姿は、血を喰らって生きる——まさしく“物の怪”だった。

イレギュラー  
「異常なんて……!!」

三人の“冒険者”内の、誰かが口にする。  
イレギュラー  
異常とは、本来存在する怪物の突然変異で、それは通常の物より  
強い。

今のままではイレギュラーに勝てない、それが三人の冒険者の心境だった。

それは彼らが、レベル スキル  
力量も技も足りなかったからだ。

レベル  
力量とはその者の強さを数字で表し、通常は高ければ高いほど強い。

レベル イレギュラー  
そんな力量で異常を表すと40程。

逆に三人をレベルで表すと、彼らはそれぞれ20位しかなかった。

それは、冒険者である彼らが、生贄という代償を用意しても、イレギュラー  
常十人集まってやっと一人生き残れる確率だった。

これだけでもその強さは明らかで、三人に勝ち目は無い。

ところで、スキル  
技とは武器の熟練度を上げることによって、それを一定以上貯めるとそれぞれに適した技が開放され、その者の体力に応じて何回か使えるようになる一定の現象のことだ。

その現象には色々あり、例えば剣から衝撃波を飛ばせたり、練習

もしてないのに槍を連続で突けるようになる。など、様々な種類があった。

「諦めるな！ 諦めなければ勝機は必ずあるはずだ！！」

また、三人の内の誰かが言った。

無駄だろう、と灰色の彼は思う。

何故なら彼らが向かう出口は、イレギュラー異常が塞いでおり、自分がいる方に逃げて外には出られず、むしろ迷宮の奥へと続く道なので、もしかしたら“より”強大な敵がいるかもしれない。

——だから、三人は“このまま”の状況では、イレギュラー異常に勝つ以外に、生き残る手段は無いのであった。

「仕方ねえ、ちょっと英雄になってくるか」

そんな絶望的な三人の光景を目の当たりにした彼は、わざとくさい台詞を吐きながら一歩踏み出した。

彼の歩みの矛先は、イレギュラー異常へと真っ直ぐ続く。

相手は難敵にも関わらず、淡々と、まるで家の中を歩くように、彼は足を進めるのであった。

「き、君、止めとけ」

三人の内の槍を持っていた一人が、彼を止めた。

彼の無謀な挑戦を止めさせようとしたのだ。

何故なら彼が、目ぼしい武器も、目ぼしい防具も持っていないからだ。

だからだろう。その一人は、防具どころか武器すら持ってない彼を、その見かけから弱いと判断したのだ。

「本当に……本当に……死ぬぞ!!」

いや、見かけだけではなかった。

彼は力量<sup>レベル</sup>すらも低かったのだ。それは三人の冒険者よりも、圧倒的に低かった。

「どけ。邪魔だ」

だが、口角が上がっている彼は、その止めた者の手を乱暴に払った。

先程、英雄になる、と大層に言っていた筈なのに、彼に三人を助ける意思是全然無く、むしろ彼には異常<sup>イレギュラー</sup>と戦いたい気持ちのほうが大きいのである。

どこまでも彼は——獣のような“餓えた”人間だった。

「——さあ、戦<sup>や</sup>ろうぜ」

五メートル先にいる彼の発言で、異常<sup>イレギュラー</sup>は剣を構えた。両手を突き出し、その太い腕で大剣を支える。

これで事実上、彼の宣戦布告を異常<sup>イレギュラー</sup>が受け取る形になった。

ダッ!

そして、先に仕掛けたのは、灰色の彼だ。

上体を前のめりにし、己が出せる最高スピードで、異常<sup>イレギュラー</sup>との距離を一気に詰める。

キリキリッ!

敵は彼が近づくのが分かると、独特の歯車が回る音を出しながら、大剣を驚異的な速さで振り落とした。

彼はそれを、右にかわす。が、完全には敵の大剣はかわせず、皮膚を浅く切った。

だが彼は怪我を気にもせず、イレギュラー異常の背後に回る。それは大剣をもう一度振らせる暇など与えないほどのスピードであった。

「——まっ、死ねや」

次に灰色の青年は背を駆け上がり、両手で大事そうに、顔らしき部分を持った。

そして、首を力強く——廻す。

瞬間、首元からは瞬間的に鈍い音がし、首は顎が上になるように折れる。

そして彼は背から下り、首を——限界まで下に引っ張る。

すると、どうだろう。

捻られ、引っ張られたコードは、それも首にある多種多様の色で覆われたコードは、あまりの“力”に耐え切れず、無残にも千切れる。まるでロボットの首が取れたかのように、彼は敵の首を——取ったのである。

「えっ………!!」

イレギュラー奇想天外な異常の斃し方に、三人は大きく目を見開き、驚愕した。やがて、彼の手首についた時計のような無機質な声が——鳴った。

——ピコーン、レベル力量が11になりました。

## 第一話 日常

「ほれ、避けんか！」

早朝、静かな山奥にしゃがれた声が響いた。それは眠気を邪魔するのには、最適な殺気だった声であった。

だからか、危険を察知した小鳥達が飛び立ち、木々がざわめく。

「うるせえ！ ジジイこそ孫相手に背中を狙うな！！」

次に森に響いたのは、低い青年の声。こちらもドスの効いた“怖い”声だ。

そんな二つの声の出所は、山の中腹にある小さな神社の裏手にある板間の道場だ。

中にいた者は——二人。

どちらも一流と云える武芸者であった。

片方の青年は汗で黒く汚れた道着と白い帯を着ており、背は170後半。腕や足などの体は遠くから見れば細く見えるが、実際に近くで見ると常人の“それ”より太く、細かな傷もついており一般人の腕とはまるで違っていた。

そんな青年と対峙していたのは、白髪の老人。

青年と同じような道着だったが帯の色だけは黒で、それだけでも強いと錯覚する。そして、その老人の最大の特徴は青年より細い体躯で、筋肉も然程しかない肉体だ。しかし、無駄な贅肉もついていまさしく、 unnecessary 肉を全て削ぎ落とした体だった。

そんな風貌の二人は、殴り合っていた手を止め、一旦距離をとっ

た。即座に二人は睨み合い、——同時に踏み込む。

青年は拳で、老人は足で、それぞれを狙い、やがて拳と足が激突した。

一般的に手と足では足のほうが三倍強いと云われるが、この二人の威力は同等だった。

若い故の青年の優れた瞬発力が勝ったのか、やはり老いた老人の肉体が負けたのかは分らない。

だが、どんな結果であろうと、威力が同じだった“事”に違いはない。

なので、二人はその結果に大した動揺は見せず、すぐに次の行動へと移る。

最初に仕掛けたのは青年だ。

ぶつかった右手をすぐに引つ込め、右手で老人の胸倉を掴む。老人は蹴りだった為、次の動きへと移るのは遅れたが、それでも負けてはいなかった。

老獺とまで云われる、永い年月をかけた技術のみで青年の胸倉を掴んだ腕を、左で持ち、肘を右手で逆方向に——極める。

「糞がつ！」

しかし、青年もすぐに反撃した。

関節が極められていない逆の二本の指で、咄嗟に老人の目を狙う。

「うわっ！ 危ないのう。いたいけな祖父を殺すつもりか？」

老人はこれに対して急いで両手を離し、後ろに上体を倒す。ようするにスウェーであった。

「いや、老人思いの俺が、そんな事するわけないだろ。それより、ジジイも折るつもりだったのか？ 俺の右腕」

「いや、孫思いのわしが、そんな虐待のような事するわけないじやろ」

似たような答えを返す二人。

青年は口では笑っているが、目が笑っていないかった。勿論、老人も口では笑っていたが、目は笑っていない。

「ははっ……」

「ほほっ……」

両者とも分かっていた。

乾いた笑いをしながら、お互いがお互いに本気だったのを。しかし、表面上では冗談のように振舞っている。

とんだ茶番だ。

本当を知っているのに、あえて知らない振りをする。

だが、そんな偽りは長くは持たない。込み上げる激情は、そう我慢できるものではないのだ。

「死ねやっ！！」

「くたばれっ！！」

やがて、似たもの同士の二人の堪忍袋の緒が同時に切れ、——またぶつかり合った。

「はあ……」

こんな朝が、あの二人には毎日のように訪れていた。メビウスの輪のように、昔から永遠と続いていたのだ。

だからか、この光景を、もう千を超えるほど見たこの光景を、道場の外から見ていた女性がそつと嘆息する。

「氷雨<sup>ひやめ</sup>もお祖父ちゃんも止めなさいっ！！」

そして、大声で二人を止める。

二人は何度も交わりながら戦いあつたのが、目に見えるほど汗をかいている。これを見た女性は、また洗い物が増えた、と溜息を吐いた。

先程の一瞬は、この二人にとっては、ほんの短い時間なのだった。彼女の声が耳に届くと、そんな二人も動きを止める。

両者とも相手に対するぎらつく目を押さえ、エプロン姿の彼女に目を向けるのだ。

「ほう、もう朝食か。小僧、命が助かったな」

「そついえば腹が減ったな。ジジイこそ死期が早まらなくてよかったな」

戦いが終わった後の、こんな言い合いも日常のように行われていた。

そんな祖父と弟には、同族嫌悪の言葉がよく似合う。

性格も、戦い方も、遺伝子でさえも似ている二人。  
だから、まるで自分を見ているようで苛立つ。

何故、自分も同じような遺伝子なのにこうはならないんだろうと、  
彼女は不思議に思った。

（そういうわけね。性別が違うからか）

勝手に彼女はそう納得する。

もとより、こんな疑問などどうでもいいこと。  
なので、適当に理由づけるのであった。

それは、これまたいつもどおりの静かな朝食の風景だった。畳に  
置かれた長いテーブルに姉弟そろって座り、その向かいに祖父が座  
る。

それぞれの目の前には焼き魚と味噌汁とご飯が置かれ、テーブル  
の真ん中には白菜の漬物が置かれていた。

「姉ちゃん、たしか今日が発売日だよな」

先程戦っていた青年が、味噌汁を啜りながら尋ねる。

今は道着ではなく黒い学ランを着ている彼は、エプロン姿の彼女  
の弟で、あの老人の孫だ。

名は、南雲氷雨。  
なぐもひる

高校二年生の彼は、一般的に見れば地味であった。

今は春先なので長袖。だから服の上からでは筋肉は見えず、細

かい傷痕も見えない。

勉強の成績は平凡的で、理数系が少し苦手な程度。

体育は少し得意だが、それも部活に所属している者には負ける。専門職の人間には、いくら彼でも敵わないのだ。

顔つきは目が少々鋭いだけで、ほかに目立つようなことはない。

髪は染めてもなく普通の黒色である。

友達も多くもないし少なくともない。クラスの皆と喋るが、いつもは4、5人ぐらいのグループにいる。

これまた地味だ。

当然ながら、そんな彼に目立った噂はなく、今後も生まれる予定がなかった。一つあるとすれば、姉の話題ぐらいだろう。

クラスの女子には、「ああそんな人いた」としか認識されてない。さらにクラスの全員が、彼が山奥に住んでいるので祖父から武術を嗜んでいる事など、友達も知らない。

ゆえに学校の皆には、氷雨は一般人としか認識されていなかった。

「ええ、そうよ。ちゃんと氷雨の分のゲームも、予約していたから安心していいわよ」

「ふう、良かった。もしも俺の分が無かったらどうしよう……」と思っただころだな」

お茶を一杯口につけた彼女が氷雨の問いに答える。

彼と彼女が言っているゲームは、本日発売の世界初VRMMORPG、“ダンジョン・セルボニス”だ。

これは実際に体験できる“バーチャルリアリティ”という最新のバーチャル技術を使ったゲームで、“リアル・カモフラージュ”という機械を使うことによってそのゲームに応じた仮想現実へと行け

るのだ。

その画期的なシステムが使われた第一陣のゲームが“ダンジョン・セルボニス”で、彼も彼女も楽しみにしていたのだ。

「それも見てみたいわね」

「……勘弁してくれよ」

優しげに氷雨に微笑む彼女の名は、南雲雪<sup>ゆき</sup>。

少しの乱れもない真っ直ぐな黒髪は長く、肌は真珠やシルクのよう  
に白い。目はぱっちり<sup>二重</sup>で、セーラー服からは体の細さが伺える。

正座をしながら朝食を食べている彼女は、誰が見ても日本人形のように美しいと思うだろう。

学校で勉強の成績がよかったり、運動が出来たりと、彼女は優等生扱いされていた。さらに美人だが誰とでも分け隔てなく接し、優しいと、校内でも男女問わず人気の高い女性だ。

地味な氷雨の話題がクラスで挙がるとしたら、殆どが彼女の弟だということでもあった。

「にしても、姉ちゃんがゲーオタだって学校の皆知ったら、どんな顔をするんだろうな?」

「驚くんじゃないの?」

「なあ、冗談で姉ちゃんがゲーオタって、言ってもいいか?」

「——殺すわよ?」

「だ、だよな……」

雪は氷雨の質問に、箸をばちんとテーブルに叩きつけて答える。  
まさしく雪のような冷たい殺気が、彼女からなだれ出た。

誰もが羨むような完璧さを持つ彼女にも、やはり隠しているとある“秘密”があったのだ。

それは生粋のゲームオタクだという事。

携帯ゲームからテレビゲーム。それまたネットゲームまで、RPGなら大体手を出している。ほかに<sup>シューティングゲームカラスターバースン・シューティングゲーム</sup>STGやFPSなど、種類は様々だ。

だが、彼女はそれが回りに知られると、自分の周囲の評判を落とすことをよく分かっており、それをひたむきに家族以外には黙っていたのだ。

「ふん、氷雨に一言釘を刺しておくがな。いくら、ばーちやるりありていーでも、武術の腕はまったく上がらんぞ！」

朝食の途中、ゲームの話題があがる度、祖父は氷雨にことある度にしつかりと言い聞かせていた。

いくら仮想現実でも本当の現実とはまるで違う、ということだ。  
祖父は薄々だが、氷雨が誰かと戦いたがっていることに気づいていた。

交通事故によって親を亡くした孫を引き取ると、二人を甘やかしてはいけないと心を鬼にしながら己が嗜んでいた武術の稽古をつけた。

その方向性を氷雨だけちょっと間違えたな、と思う。  
雪は別だ。

彼女はいい姉として、いい女性として、素晴らしく成長した。  
だが、氷雨は違う。

彼の組み手相手は、幼少の頃から実の姉と祖父だけだった。

——故か、氷雨は血に餓えている。

「けっ、だからなんだ。ジジイには関係ないだろ」

食べ終わっていた氷雨は、祖父に悪態付きながら、学校の準備に自分の部屋へと戻った。

「おじいちゃん、じゃあ私も行くね」

「お、おう。氷雨を宜しく頼むな」

「うん、分かってる」

と、彼のすぐ後、雪も部屋へと戻る。朝食の食器は全自動の食器洗い機に入れば済むので、それは祖父の仕事だ。雪に迷惑をかけるため、祖父が自ら提案したのであった。

そして、その数分後、姉弟の二人は学校へと出かけた。

「はあ……」

そして、二人が学校に向かった後、こうして縁側で神主の格好をしながら、祖父は一人考えに耽った。

——修羅道へと堕ちれば、二度と人へは戻れない。

祖父は知っている、堕ちた者の人生を。

祖父は知っている、堕ちた者の結末を。  
しかし、いい案が出ない。

「さてどうしたものかー」

だから白髪の老人は、そう溜息を吐くのであった。

## 第二話 学校

別段大きくもなく、小さくもないどこにでもありそうな校舎。

校舎の中からは吹奏楽部だと思える楽器の音に、そのすぐ隣にあるグラウンドでは野球部やサッカー部などによる練習が行われていた。

そんな学校の門を、氷雨と雪はくぐる。

二人が通っている学校は、周りにある学校より平均的に学力は少し低く、しかし他県まで有名な部活動はない。

要するにどこにでもありそうな高等学校だった。

「それにしても、疲れたな……」

「私も……眠たいわね」

そんな普遍的な学校を、彼らを選んだのに理由があった。

——近いからである。

彼らが住んでいる山の神社から一番近いこの学校でも、徒歩で最低二時間はかかる。この学校は自転車通学が出来るのだが、それを使うとより時間がかかるので、二人は徒歩で近道として柵を越えたり、道なき道を越えたりしていた。

二人はそんな苦労をしながらこの学校に通っている。

なので、一緒に通学するような友はいなく、一人で通っても暇なので、二人で喋りながらいつもこの学校の行き来をしているのだった。

「じゃ、氷雨また帰りね」

「ああ、またな」

そして、玄関で上履きに履き替え、そこで姉弟は別れた。  
弟である氷雨は、そのまま三階にある二年生の自分の教室の扉を開けた。

「よ」

「おはよう！」

「よっ！」

そんな軽い挨拶を氷雨は低テンションで交わしながら、教室の中にある自分の机に座った。隣の引っ掛けに斜めがけのカバンをかける。

「それにしても、いいよなあ。南雲はあんな綺麗な姉がいて、毎日一緒に登校できて。オレならきつと禁断の感情が生まれてるぜ」

「オレもオレも。いや、オレなら襲ってるな。そして……ぐふふ。  
はあ、本当にいいよなあ、南雲は」

氷雨が席に着くと、すぐさま彼とこのクラスで仲がいい二人の男子が寄ってきた。

だが、まだ朝に必ず行われるSHRには二十分程度の時間があり、いつも氷雨がいるグループにいるメンバーには足りない。

もう一人は、いつも朝のSHRギリギリに学校に来るのである。

「おいおい、お前らは俺と会うといつもそれだな。それ以外に言う

ことはねえのかよ？」

氷雨はまたか、と低く二人に返した。

これは、彼の友達である彼らの雪に対する賞賛は挨拶のようなものだ。

毎日飽きることなくやっており、だが二人にも氷雨の友達として“常識”はある。だから、“礼儀知らずの氷雨達の先輩”とは違い、脅迫じみた姉への紹介の催促はしないのだ。

「無い……かな？　だって南雲って、大体の話題は軽く流すじゃないか！　ほかにどんな話題に食いついてくれるんだよ？」

「うんうん、氷雨って名前どおりに、冷たいじゃねえか。お前は、よ」

「だよな。オレもそう思うよ」

二人は、氷雨にわざわざ目を伏せながら話した。気分はさながらハリウッドスターである。

「そうか？　そりゃあ、悪かったな。今度からは、もうちょっと付き合っよ」

氷雨はまんまと騙されて、目を丸くする。

そんないつもとは一風変わった戸惑うような氷雨を見て、二人の同級生は大きく笑った。彼はまんまと騙された、と舌打ちをしたのだった。

「あー笑った笑った」

「お前ら……いつか殺してやる」

「うわっ！ 怖えよ、南雲！ そう怒るなって……」

「そうそう、確か今日が“あの”発売日だよな」

そんな笑い声も終わると、話題は変わった。

それは、今テレビのニュースでも話題のVRMMORPGの“ダ  
ンジョン・セルボニス”である。ゲーム好きでなくとも、一度はや  
つてみたいゲームナンバーワンと有名で、この話題性は未だ尽きて  
いない。

「あのゲームかあ、欲しかったが金……がなあ……」

このゲームの発売価格は、世界初の体験できるゲームとして様々  
な最新技術を使っているとの理由で、ソフトとハードのセットで十  
万円とされている。

「いや、金があっても無理だろ。だって限定5000セットだぜ。  
オレ達にはコネがない限り無理だな」

そして、このゲームのもう一つのネックが、その入手経路。これ  
は日本の企業が作ったので、どの国よりも早く日本で先行発売され  
る。その数は五千個であったが、予約は既に開始してから十分で終  
わっていた。

コネが無いと手に入れるのがほぼ不可能に近かったのである。

「確か、オークションには百万と書いてあったよな。つまりあれだ  
けの大金があればオレたちにも……」

だが、数個だけこのゲームのセットがオークションで販売されているのがあった。数少ないゲーマーたちの希望の星だ。

「あれって、詐欺も多いとテレビでやってたなかったか？」

氷雨がここでやつと発言した。

最近二ニュース番組で知った知識を、言ってみる。

「だよな。つまり、オレたちがプレイするのは何年後になるか……」

彼の友達の一人在落し込んだ。

その詐欺は現在社会問題にもなっており、一か八かでそれに賭ける人も少なくはないのだ。

「あーあ、雲林院うんりんいんのような金持ちの友達がオレにも居たらな……」

「無理無理、あいつはイケメン久遠にぞっこんだったろ。つまり、オレ達はおこぼれをもらうぐらいしかないわけだ」

久遠、今この名前がチラツと出たが、彼はこの学校では雪並みに有名であった。

名は光。ひかる

顔や目付きや鼻が欧米人の祖母の影響で酷く整っており、髪は金色。スポーツも上手く、勉強の成績も高い。そんな男として完璧な要素をもち、またこれを自慢しない謙虚な性格さえ持ち合わせる。なので、この学校の女子からは王子だと比喻されることもしばしばある。

要するにイケメンで、隙がない優等生なのだ。

そんな彼であるからして、困っている女子を助けることが多く、

非常にモテていた。その中の一人に雲林院という日本を牛耳るようなお金持ちまでいるのである。

そして、今はそんな彼が雲林院から希少価値の高い“ダンジョン・セルボニス”の、お試しプレイを今日やるという情報まで回っている。

だが、もし彼に手を出せば学校中の大多数の女子から非難を受ける羽目になる。

だから、そんな彼と正反対の三人は、こうやってひそかに彼の事を愚痴る事しか出来ないのだ。

「そういえば、南雲の姉ちゃんはいつに惚れてなかったよな？」

「そうだそうだ。その点もあってこの学校では一番人気が高いんだ。やっぱりいいよ。お前の姉ちゃん」

ここでまた話題が氷雨の姉に戻った。

雪はミーハーなほかの可愛い女子たちとは違い、久遠に全くなびかない。

その点が、彼女がこの学校で男子達の人気を数多く集める理由の一つだった。

（けっ、姉ちゃんは男よりゲームなんだからしょうがねえだろ。）

だが、氷雨は心の中で思いだしたことがある。

彼の姉の雪は他の女子に比べて、久遠に助けられる“こと”自体が無い。

そこらの不良には、氷雨と同じ武術で簡単に蹴散らすし、弱みであるオタクも家族以外には完璧に隠蔽しているからだ。

「それに彼氏がないのもポイント高いよな」

「そうだな。南雲、たしかお前の姉ちゃんあんな辺境に住んでるか  
ら男との接点もないもんな」

最後に彼女は、男より“ダンジョン・セルボニス”に関心が向け  
られており、彼氏を作る気などさらさらなく、現在も過去も居ない  
のだった。

「もう、この話題やめようぜ？」

氷雨は嫌そうに言った。

それは、それがどんないい評価であれ、身内の話はあまりしたく  
ないというむず痒い思いからだった。

「分かったよ。それじゃあ次は一年のあの子の話にするか？」

「いやいや、それよりも、テレビで話題のあの女優の……」

キンコンカンカーン！

ここでSHRの開始のチャイムが鳴る。

「よ～～う！ オレ様！ 降臨だぜ！！」

と、同時にうざい奴も来た。机の上に仁王立ちし、左手は腰にあ  
て、右手の人差し指が天を向いている。わけの分らないポーズだ。  
氷雨の残る友人である。

普通の学生服なのだが、赤いたすきをかけている。ちなみにたす  
きの意味は、特になかった。

「……じゃ、またな」

「……お、おう」

「……後でな」

「ちょいちょいちょい！！ オレは？　ねえ、オレは無視ですか？  
??　ここまで頑張ったんですよ！」

たすきの男は他のメンバーからは無視されるのだが、これもある意味挨拶であった。

こうして、彼の学校生活の恒例の出来事は終わったのだった。

——そして、これが、かけがえのない大切なものだったと、彼が気づくのにそう時間はかからなかった。

### 第三話 始動

学校が終わり、放課後。

氷雨と雪は急いで家に帰った。

そして着替えもせずに、自宅にある畳が敷かれた部屋に向かう。

そこは、二台のノートパソコンと二つのダンボール箱がある簡素な部屋だ。

雪はダンボールを開け、中に敷き詰められた梱包材を丁寧に一つ一つ取り除きながら、“リアル・カモフラージュ”という機械を取り出す。

それは頭につける大きな丸い装置に、それに沢山のコードが繋がれた小さな丸い機械が四つある装置だ。その小さな装置は、手首と足首の四肢につけるものである。

「姉ちゃん、これでいいのか？」

氷雨はそれを体に一つ残らず身につけ、畳の上に横になった。コードの内の一つはパソコンに繋がっており、既にパソコンには“ダンジョン・セルボニス”のソフトがダウンロードしてある。これで、いつでもゲームを起動できた。

「ええ。でも氷雨、あっちについたらどこにも行かずその場所で待つてなさいよ。ゲームのいろはも知らないんでしょ？」

「……わかったよ」

氷雨はの頭の中は、既に興奮でいっぱいだ。

何ヶ月も待ったゲームが、いよいよ始められる、と。戦える、と。

だが、彼はどんなコネかは知らないが、今手に入れるのが最も難しいゲームを、弟の自分の為に入手してくれた姉に心から感謝している。だから、気まぐれに雪の言葉を見殺しできないのであった。

「——じゃ、はじめるわよ」

そして、この声を最後に氷雨の意識は失われた。  
それは雪がマウスをクリックした瞬間である。

指が動く。

手が動く。

腕が動く。

膝が動く。

足が動く。

口が動く。

光を感じる。

それらは同時に行われ、徐々に脳が覚醒していった。例えるなら、朝起きた時に近いだろう。そして、少し前の記憶を思い出し、ゲームの世界に來たんだ、と考えてから目を開けた。

「……！！」

その眼下に広がる光景は、まるで変わっていた。

古びた畳も、何度も張り替えられた障子もない。代わりに合ったのは、上に雲がない快晴の天空。足元は並べられた石畳。周りにはレンガで作られた町並みがあった。

「……うつわ！」

その、色が塗られた鮮やかな仮想現実<sup>バーチャル</sup>の完成度に、氷雨は言葉すら遅れる。ここを現実だと思わない人は居ないと思うほど、現実<sup>リアル</sup>に近い完成度だと彼は思った。

氷雨はそんな感動を胸に感じながら、佇んでた場所から少しだけ移動し、道の脇に並べられた区切りのような段差に座り込む。

雪を待つためであった。

先ほどの自分が立っていた場所を見ると、ぽつぽつと人が突然現れる。どうやら皆このゲームを始めた者は同じ場所から始まるからだ。

そして、彼はそれに納得すると、自分の姿を確認し始めた。

服は紺の学生服ではなく布製の簡易なズボンとシャツだったが、それ以外は明らかに“自分”だ。顔を触り目の位置や鼻の位置、口の位置などを確認しても、それも“自分”だ。手の長さや足の長さ、<sup>リアル</sup>全て現実と遜色がない。

だが、一つだけ違う部分があった。

胸や腹などの体の中心部分の動きが少しばかり弱いのである。これは“リアル・カモフラージュ”という機械の性能上しかたがなかった。頭や四肢の先端にしかつけないので、そこから遠くなればなるほど動きが僅かだが鈍くなるのだ。

しかし、それは氷雨のように全身の感覚が非常に鋭い人間に限ってである。一般人ならこのゲームをする上で気づきもしなかったのだ、特に何の問題はないとゲーム会社は判断したのだ。

「よかった。氷雨、ちゃんと待ってたのね」

氷雨が考察に耽っていると、目の前から自分と似たような雪が声をかけた。やはりだが、雪の顔も現実リアルと変わらない。

彼女は氷雨と同じ機械を付け終わると、すぐにゲームの世界に飛んだのであった。

それが、このゲームの特徴だ。

このゲームでは、仮想現実バーチャルをよりよく体験してもらうため、アバターといった自分の分身のようなキャラクターを作ることが出来ない。良くも悪くも現実の顔や身体が、そのまま影響されるのだ。

これに対して最初、発表時にはプライバシーなどの反論などが多数あった。

だが、メーカー側の身体のパーツを変えると最初のゲームの基礎的な動きが全く出来なくなり、慣れるまでに数週間の時間がかかる。それにこれに慣れたら現実リアルに戻ったとき身体が動きずらくなる、という弊害の説明の結果、反論は殆どなくなったのだ。

「ああ。で、姉ちゃん、最初はどこに行くんだ？」

待ちくたびれたように彼は言った。

これからたくさんできる戦いに興奮してか、氷雨は貧乏ゆすりをしている。おそらく、待ちきれないのだろう。

「決まってるじゃない。——チュートリアルよ」

「チュートリアル？」

「簡単に言うと、ゲームの説明ね。ゲームの最初には必ずあるの。例外的にスキップできるゲームもあるのはあるけど、大体はこれを

受けないと先には進めないわね」

「だったら、早く行こうぜ」

「フフツ、でも、もう少ししたらこの場所で説明が入ると思うわ。そうWikiに書いてあったから」

雪は笑顔の氷雨を見て、少し笑った。

彼の貧乏ゆすりの意味が、分かったのである。

『皆さん、お待たせいたしました。こちらに集まりください。チュートリアルを始めます』

そんな時だった。頭の中に電子音が響いたのは。

それと共に、そこに居た全員が、反射的に“その”声の方向へと目を向ける。

と、この時、氷雨はいつからだっただろうか、と考え始めた。この場所に存在していた人は誰一人減っていないく、増えた者もずっと居た。

なるほど、この場所に一定の人数を集めてから一斉に説明を受けさせる。ただしチュートリアルが始まるまでこの場所からは移動できないのか、と納得した氷雨である。

「氷雨、行くわよ」

氷雨がそんな考察を繰り広げて立ち止まっていると、雪が彼の行動を促した。そして、声の方向にあった一つの建物に、二人揃って入って行く。

カランカラン！

扉を開けると、甲高い鈴が鳴る。

その中はただの広い空間だった。暗く光の玉がいくつか浮かんでプレイヤーの顔を照らす地球上では、まずお目にかかれなような幻想的な空間だ。

だが、そんな場所に感動してる暇など、今はない。

『ゲームの説明はこちらで行います。画面をご覧ください』

また、頭の中に響いた。だが、不思議とその音に不快感は感じられない。

皆は突然に現れた真ん中に映し出された映像を見始めたが、その殆どのプレイヤーは一人で見ている。

どうやら、二人で行動している姉弟が、この場所では異様のようだ。

『それでは、まず……』

それから、ゲームの簡単なチュートリアルが始まった。

「……普通ね」

ゲームの説明としては、と雪は述べる。

それは数多くある武器の種類を軸に、一定の種類<sup>レベル</sup>の武器熟練度を上げると使える技<sup>スキル</sup>。そして、力量はどうやったら上がるか等の説明。それに付け加えるように迷宮<sup>ダンジョン</sup>の簡単な仕組みや、フィールドの仕組みなど。他にはログアウトの仕組みとゲームオーバー時には所持金を全て失った上で最後にいた町に戻ることや、能力値<sup>ステータス</sup>の見方など、全て合わせて説明は五分程度で終わり画面がプツンと消えた。

『最初の軍資金として、プレイヤーの方々には1,000ギルを渡します。ご自由にお使いください』

突如、目の前の空中には布袋が浮かんでいた。それはふわふわと漂っており、手に取るとジャラつと音を鳴らして、重力を取り戻す。ゲームのパターンとしてはこれもよくあると、雪は言う。最初に手に入れたお金で装備や道具を整えるのは普通なんだ、と知った氷雨だった。

『——最後にこれは助言です。北には、まだ行かないほうがいいと思いますよ。そこには、迷宮ダンジョンでも上位に位置する危険な動物モンスターがいますから……。では、今後とも“ダンジョン・セルボニス”を宜しくお願いいたします』

この言葉を最後に、頭の中の声は消えた。

そして、用の無くなったプレイヤーが次々とこの部屋から出て行くのだった。ただ、氷雨の顔だけは、なぜか少し綻んでいた。

姉弟が部屋を出るとその扉は、光となって霧散する。一度出ると二度と入れないような仕様である。

そんな外に出た光景は、ある“一つ”を除いて入った時と変わっていない。

それは“人”であった。

プレイヤー、ノンプレイヤーキャラ問わず、先刻とは打って変わ

って人数が増えている

「やあやあ、ユキ殿でございますか？」

そんな大勢の中、二人に喋りかけたのは似たような格好をした四人。

四人はまっすぐに雪を見つめていることから、二人をではなく、雪を待っていたようだ。

「ええ、じゃあ、もしかして貴方がノボル君かしら？」

「そうでございます！ いやいや会えてよかったですなあ！ それにしても美しい！ こんなお方と冒険できると思うと、こちらとしても心が踊りますなあ！！」

「そう。お世辞をありがと。こちらこそ、宜しくね！」

皮の鎧に、腰に両手剣を携えた小太りのノボルと雪が笑顔で握手した。

氷雨は仲間はずれとされているが、この五人はとあるゲームで噂になるほどのパーティーである。そんな雪を除いた四人は、今日だけ学校や会社を休んでおり、家にこのゲームが届いた時から集まってゲームの攻略を目指していた。

先程、雪から今から始めるとの連絡が入ったので、ノボル達は初心者が必ず通るこの場所に集まったのである。

そんな中、ノボルは雪が連れて来た氷雨が気になっていた。

「ところでユキ殿、次はこちらの方を紹介してもらってもいいでございますか？」

「ええ、弟の氷雨よ」

「ほーう、この子がヒサメ殿ですか。いやはや、これからよろしく  
お願いするであります」

「は、はい、こちらこそ宜しくお願いします」

氷雨は固い感じで、差し出されたノボルの右手を握った。若干だが、頬も引きつっている。

どうやら彼は敬語がなれないようである。

「そんな緊張しないでいいでございますよ！　これから仲良くしよう  
ではありませんか！」

「は、はあ……」

いや、氷雨は高テンションのノボルが苦手なのだろう。両手で握った片手をぶんぶん大きく振り回されながら、彼は苦笑いをして  
いた。

「氷雨、この方は私達のゲームを入手してくれたのだから感謝する  
のよ」

「ああ、うん」

「いえいえ、ユキ殿。同士の頼みとあれば、断れる筈が無いではあ  
ります！」

雪のゲームの入手先はこのノボルだった。

このノボルという男は謎であつたが、ゲーム会社に多数のコネがあり、それを駆使して雪の分とは言わずこのパーティーの分のゲームは、全て彼が仲間の為にと用意していた。

その時、氷雨がこのゲームをしたい、と急に言つたので無理を承知にノボルに頼んでみると、二つ返事で了承との連絡が入つた。

もちろんそれぞれお金は払うのだが、それにしても六個分。へたしたら最多くのこのゲームを手に入れている彼の素性はパーティーの誰も知らないのだった。

「オレも宜しく！」

「うちも宜しくね！」

「僕も宜しくな！」

何故だか、雪以外の全員がハイテンションのパーティーメンバーに、氷雨はまたも微妙な表情で順番に握手していく。

それは今日始めて会つたといえる雪も、同時に。

その四人は槍、弓、杖とそれぞれの武器を装備しており、鎧はノボルと一緒に。

スタートダッシュを早く切れているだけあつて、その四人は周りの人たちよりかは豪華な金属製の武器で、幾分か強そうだ。

それは怪物を斃すと結晶が手に入り、その結晶を売つたお金でより強い武器等が手に入ると、チュートリアルで言つていた。

それから考えると、彼等はどれだけかは分からないが怪物を<sup>モンスター</sup>少なくとも何匹かは討伐した事になる。ならば、<sup>レベル</sup>力量も上がっているのだらう。と、氷雨は推測した。

「——で、ヒサメ君も当然我がパーティーに入るのは確定でありますよね？」

ここで、突然、氷雨にとってノ衝撃の言葉を、ノボルは放ったのだった。

#### 第四話 プレイ（前書き）

読者の皆さん、作者の勝手なわがままを承諾していただきありがとうございます。  
うございます。

作品の修正は少しずつですが、これからもご応援お願いしますね。

## 第四話 プレイ

「確かにそうよね。氷雨はゲームを全然知らないし……」

「うちもその方がいいと思うで。ここから東に行けば簡単に力量も<sup>レベル</sup>上がるしな」

ノボルのその意見に次々と賛同の意が募る。空気としては氷雨がこのパーティー、通称アンタレスに入るのが当然のようだった。

「氷雨くん、では、パーティーの手続きに行こうではありませんか！」

パーティーの手続きには、とある段階を踏む必要がある。

それは一つはパーティー組合所という店に入り、その掲示板の中で自分が入りたいパーティーを指名する。その後、リーダーが許可を出すと、正式にそのパーティーのメンバーとなる。ここでの注意は、一つのパーティーには六人までしか入れないということであった。

もし仮に、新しくパーティーを作りたい場合は、パーティー組合所で新規パーティーの要請をすると誰でもできるのである。

「氷雨、行くわよ」

と、雪が、氷雨の手を取ろうとすると、彼はその手を払った。そして一言。

「——嫌だ」

と、言った。

彼は、さつさと戦いたかった。一人で戦闘を、それも高純度の死闘を行いたかったのだ。そこに仲間などというのは不要だと、氷雨は考えていたのである。

「えっ、どうしてであります？」

「なんでなんだよ？　こう言っちゃあ悪いが、初心者には安売りだぜ」

「うちらそんな弱いわけちゃうしな。ほんまお得やで」

「僕らは現在、このゲームの攻略の五本の指に入ってます。なので、パーティーに入りたい方は沢山いるんですよ」

氷雨のこの発言に、四人からは次々と驚きの声が飛んだ。

彼等、アンタレスはスタートダッシュが少しばかり遅れたが、攻略スピードが群を抜いて早く、とある初級迷宮ダンジョンを二つもクリアしている。これは、今、三組しかない凄まじいことで、彼等のパーティーに入りたい者は後を絶たない。

それに、他の二組のパーティーはじつくりと時間をかけて迷宮ダンジョンをクリアした。だが、彼らはWikiなどの誰でも編集が出来るwebサイト等で情報を集め、早々とクリアしているのだ。

「はあ、氷雨、いいからこのアンタレスに入らない理由を教えて？」

最後に雪が聞いた。

彼女は予想はついている。

——獣のように獯猛じゆうもつな彼は、血を求めていた。それを祖父から教えてもらっていたからこそ、雪も氷雨の“戦闘衝動”を知っていた

のだった。

「決まってるだろ。存分に、心行くまで、——“戦<sup>や</sup>りたい”んだよ」

最後に、彼はそう問題発言をした。

これに対し雪はやっぱり、と溜息を一つ。そして、冷静に基本馬鹿の弟の目指す場所を聞く。

「で、どこに向かうの？」

「北——」

「——でしょうね。ま、死なないように頑張りなさいよ？」

これを最後に彼はこの“ヴァイスの町”を去った。

動揺の声はアンタレスだけでなく、耳に入った通行人までも発する。だが雪だけはそれを分かっていたように、呆れ顔をしていた。

「ユキ殿！ ヒサメ殿を止めなくてよかったのでありますか？ あそこは……？ 北の森”は……とてつもなく、危険な場所なのですよ？」

「いいのよ。あんな馬鹿はほっとけば。それより私たちは武器や防具を整えに行きましょう？」

そう実の弟へ冷たい雪に、アンタレスの仲間は戸惑うが、

「ゆ、ユキ殿がそう言うなら分りました。では、装備品の調達に行きましょう!!」

「お、おう」

「ええ」

すぐにノボルの声に賛成し、五人はヴァイスの町中へ消えていった。

そんな街中での五人の会話は、凄く明るいものであった。

「ユキ殿、知っていますか？ ヴァイスの西通りには、まだサービスが始まって数時間なのに“凄腕”の職人がいるんです！ 是非、そこに行きましょう！」

「そうね。でも、私はまだ1,000ギルしか持っていないわよ？」

「ご安心ください！ このノボルが、全てのお金を出すであります!!」

「ありがとう」

「いえ！ 雪さんのためならいくらでも……!!」

実は“ダンジョン・セルボニス”は剣士や槍使いなどの戦闘技<sup>スキル</sup>だけではなく、鍛冶や服飾などの生産技<sup>スキル</sup>も充実している。

彼らはNPCが売っている装備を探しに行ったのではなく、同じゲームプレイヤーが作り出した装備を探しに行ったのであった。

（さて、氷雨は何匹斃せるかしら？）

雪は街中でアンタレスのメンバーと話をしながら、氷雨のことを考えていた。

まさか、ゲームの仕様を全く使わずに戦う人間はどんな強さになるのか、という疑問に彼女は思いをはせていたのだ。

ある意味、このゲームを作った人間ですら考えないことである、古流武術でのゲームプレイ。

（楽しみ……ね！）

「ユキ殿？ どうして立ち止まっているのですか？」

「ごめんね、すぐに行くわ」

雪はいつのまにか立ち止っていたのか、ノボルに注意され初めて気がついた。

（ま、頑張りなさいよ）

雪はそう思ってから、仲間を追いつくまで走り出した。

テュートリアルで警告されるほどの難易度を誇る“北の森”。まだ、このゲームのサービスが始まって、八時間ほどしか経っていない今の状態で挑むのは無謀とされている領域で、一組だけ挑んだパーティーが居たが、結果は四分で全滅。

“北の森”を超えた先にあるとされる迷宮ダンジョンの攻略はおろか、森を通り抜けることすら難関とされる場所で、間違っても初心者が一人で挑むような場所ではないのであった。

氷雨は最初に持っていた1、000ギアで、上から羽織る灰色のフード付きマントを買っただけで、北の森に来ていた。

武器も無く、防具も無く、薬草などの回復薬もないゲームを舐めていると思えないような装備である。いや、ある意味ゲームをしに来たわけではなく、習った武術を試しにきた彼にとっては、当然の装備だと言えるだろう。

「はあ……はあ……」

そんな準備など全くしていない彼の状態だったが、この“北の森”に訪れて早十分、未だ彼はゲームオーバーになっっていなかった。これだけでもある意味彼は、ゲームプレイヤーの中の異常だと云えるだろう。

人が作つたとされるような道は無く、全てが緑に染まっているこの森。

危険、そうチュートリアルで言っただのも氷雨は納得できた。

自分に襲撃してくるのは強く、大きく、気高く、動物だからだ。モンスター

三百六十度周囲を常に警戒してなければ、いつゲームオーバーになってもおかしくなかった。

それにまだ彼は“一匹”も討伐していないのである。

サッ！

今も狼をモデルとし、体色が白で全長2メートル程の動物が、モンスター後の草むらから飛びかかってきた。数は一匹。遭遇したのはこれで

三度目。

しかし、前回も前々回の遭遇時も最後には逃亡した。

それは、敵の弱点は分からず、素手の攻撃も効かず、間接も極められない相手に氷雨が苦戦していたからであつた。

そして、今回も、隙を見つけ出し何とか逃亡した。

逃げた先は木の上。

ここまでは良かった。

だが、彼に休憩できる暇などなかった。すぐに上空から鳥に似た動物が数十匹。氷雨は額にかいた冷や汗を手で拭い、足場の悪い幹の上で腰を低く構えた。

その鳥のような動物は、モンスター翼を畳み、鋭いくちばしで突き刺そうと、氷雨に向かつて――落ちる。

一匹目は最小限の移動で避けていた。ただ、皮膚を浅く切つてしまったので、視界の左端に固定されているHPヒットポイントだけは、着実に減っていく。

「ちっ!!」

十匹目まではそれで攻撃を避けたのだが、十匹も来ると、急に氷雨は追い込まれた。

——ここで枝の先端まで来てしまったのである。

ピンチだった。凄くギリギリの状況だった。

だが、彼は慌てることだけはしない。

すぐに木の枝から跳躍し、下にいた狼がモデルの動物に、モンスター踵落としを行った。既に氷雨の事を視界から外していたその動物は、モンスター上からの彼の攻撃を予測できず、頭蓋に直撃する。

ゴンッ！

鈍い音が響いたが、それだけであった。

敵はHPがあまり減らず、大したダメージには繋がっていない。

「ははっ……！」

上からは鳥。

正面には狼。

それぞれに似た怪物を位置を確認した上で、氷雨は少し笑う。

ああ、楽しい、と、この絶対的状況を分かった上で、彼は笑ったのだ。

「これだよ、これ。こういうのが欲しかったんだよ！」

彼は、日常では絶対得られないような命のやり取りに興奮していた。

やっと、念願の“戦い”<sup>モンスター</sup>が出来る、と。戦れる、と。

まだ、一匹も怪物を殺してはいない彼だったが、既に敵を一匹殺したような充実感に浸っていた。

グアアアアーーーー！！！！

だが、それに浸っている余裕など——無い。

上空の鳥の攻撃は当たる寸前で、狼も氷雨に飛び掛っている。

その二つの攻撃をそれぞれギリギリまで引き付け、転がるようにして氷雨はその場から離れた。すると、鳥のくちばしは次々と狼を貫いた。

狼は悲鳴を上げる。鳥は標的を氷雨から瀕死の狼へと変えた。

弱肉強食が、この世界の縮図だからだ。

人も亜人も怪物でさえも、弱者は強者に虐げられる。このゲームはそんな重厚な世界観で作られていたのだ。

「はあはあ……」

氷雨は疲労した体で、その場を離れた。

この数瞬の激闘は結果的に氷雨の勝利となったが、彼の力量は上がっていなかった。このゲームでは、自分もしくはパーティーメンバーが怪物を斃さないで経験値が手に入らないのである。したがって、本来貰えたはずの莫大な経験値によって起こるレベルアップが行われなかった。

ガサツ！

だが、そんな彼に、休息の時間など与えられない。

また、すぐにどこかで草が動く音が聞こえたのだった。

（今日は満足したし、そろそろ帰るか）

それから数十分、彼はずっとその森で彷徨っていた。その間、数多くの怪物と気を抜けない攻防を行っていた。

HPは少しずつ減っていたのだが、0になることはなく、氷雨は結局ゲームオーバーにはならなかった。

そしてほどよい戦いの満足感を感じていた彼は、そろそろログアウトしようと思っていた。

それはメニュー画面に搭載してあった時計を見て、夕食の時間だと知ったからである。

もし、夕食の時間に遅れたら、姉に叱られる。この折角のゲームが出来なくなるかも知れないかと、危惧した結果だった。

「メニュー、オン」

そうして、テュートリアルの説明にもあったメニューを開けると、目の前に透明の液晶が現れた。その中にはログアウトのボタンがあり、氷雨はそれをタッチした。

また、あの意識が消失する感覚がくる。

こうして、彼の初日のゲームプレイは終わった。

これが最後のゲーム——とは知らずに。

今回の氷雨の討伐数0。——未だ、力量<sup>レベル</sup>1。

## 第五話 リアルとバーチャル

夢から覚める。

氷雨の現在の感覚だった。少し前までの程よい殺気と適度な戦闘の後だったので目など開けず、ずっと、ずっと、その感覚に包まれていたかった。

「おいおい、これ……なんだよ……っ！」

「お、俺、ログアウト……したよな？ おかしいだろ、これっ！？」

「お前ら、何者なんだよっ！？ 管理者か？」

だが、そんなわけにはいかない。

傍らから聞こえるのはしよぼくれた祖父の声ではなく、凜とした姉の声でもなかったからだ。声質は上がり、次々と湧き出る情けない言葉。

（チツ、黙れよ）

氷雨はまだ目を開けず、言葉の主をそう思った。“今”の自分がどんな体勢でどんな場所にいるかなど、些細な事だと考えていたからで、悲鳴を雑音のコーラスだと判断したのである。

彼は興が削がれたような煩わしい気持ちで、視界に光を受け入れた。

（……あれ？）

彼は首をかしげた。

そこにはざつと見て、五十人は存在するだろう。

氷雨を中心とした手を縄で縛られた数十人の人間に、剣を持って困う数人の戦士。戦士の眼は鋭くギラついており、常人の目じゃない。幾戦の死闘を渡ってきた“武芸者”の、眼であった。

その様子を見て人一倍察しの悪い氷雨は、欠伸を一つ。

彼の思考は表面的には機能しているが、実際は寝ぼけが半分ほど混じっており殆ど働いていない。阿鼻叫喚を響かせるこの領域で、ただ一人彼だけが慟哭せずに、樂觀していたのだ。

——慌ててるなあ、と。

(ふう、腹減ったな)

と、お腹がぐーと鳴った時、氷雨はとある違和感に引つかかった。お腹が空いたのだ。否、それだけではない。

もし、ゲームの世界ならここまでお腹の動きを再現率が低いはずなのに、今は腹の全てが“完璧”に動く。腹筋や背筋も、だ。ゲームの世界では無かった筈の稼働率である。それは、現実と体全ての動きがなんの遜色もなかった事を意味する。

「聞いてんのかよ？ 俺達のロープを解いてくれよ！」

「そつだそつだ。ここはどこなんだよ？」

氷雨同様、縄で後ろに固定された人間が、周りの剣士達に声をかけた。その剣士以外の誰もが、初心者用の装備である同じ型の布の服である。氷雨だけはその布の服の上に、安っぽいマントを一枚着ていたが、それはお世辞にも防具とはいえない薄いものだ。

初心者の服は同じで、その上から防具や武器を身に付けたり、お

金に余裕が出来たら布の服もより高価な物に買い返られるというシステムが“ダンジョン・セルボニス”というゲームだ。その説明を氷雨は覚えていた。

とすると、ここはゲームの世界で、周りの人間は自分と同じゲームの世界の人間——つまり、ゲームプレイヤーと考えた。しかし、氷雨はこの推測に自信を持って答えられない。なぜなら、ここがゲームの世界ならば、この腹の動きが感じられないからである。

——ゆえに、現実リアルと仮想現実バーチャルという二つの概念が、氷雨の中で激突した。どちらとしてもおかしくはない。どちらとしても納得は出来る。

でも、どちらと納得をしても、違和感だけが残った。  
現実リアルならば、自分がいるのは家のはずだ。今頃、実の姉と実の祖父と一緒に住んでいる家の畳の上にいる。こんな丸裸の土の上で座っているなど有り得ない。

ならば仮想現実バーチャルとすると、自分はある危険な怪物モンスターが多く出現する“北の森”にいるだろう。怪物ではなく、人が何十人もいるなど考えられない。

それにHPの値も視界に無かったし、メニュー画面も現れなかった。

氷雨は少ない脳を絞って思い出す。

自分は確かにログアウトした、と。その時、ログアウト以外のボタンは触らなかった、と

他に情報はないかと探すが見つからない。手詰まりであった。そんな風に、無言で思考を巡らせていると、——突如、声が鳴っ

た。

「皆さん、聞こえますか？ 君達是我々の“奴隷”となったのです！」

ゲームプレイヤーであろう人の、質問に答えるかのように、遠くの壇上に立っていた煌びやかな貴族風の豪華な衣装の男が高らかに言う。

残酷な内容を、あっさりと。

これに全員が声を失った。

皆が、誰もが、理解したくないのだ。

その単語の意味も分かる。その言葉も通じてる。ゆっくりと、頭の中で何度も何度も何度も確認をする。

そして、ぐつと——飲み込んだ。

「ふざけんな！」

「私達を家に帰して！」

「開発者はどこにいるんだ！！」

ここにいる原因は不明だが、“弱者”に落ちた、と。それはゲームプレイヤー達は分かっていた。

しかし、それぞれが無駄だと言わず、口々に反論した。

——納得できないのだ。

奴隷という身分に。もし、勇者や英雄としてなら、もっと高貴な立場なら、こんなに反抗はしていなかったかもしれない。

「——黙らせなさい」

けれども、その行動が逆効果だった。

“上”の人間が、“下々”の人間の戯言などに付き合う暇は、どこの世界でも無いものだ。“上”の人間は、常に自分の事を優先させるからである。

「はい、カナヒト様……」

剣士の一人は、貴族風の男の命令に従い、腰にあった剣を——抜いた。

意味は子供でも分かるはずだ。

沈黙を要求するのに、最も簡単でこの上なく早い方法は恐怖で相手を縛る。これが最も早く、ある意味単純な方法だ。

「あ……あ……」

それは誰かの嘆きだった。

剣士は別に誰でもよかったのであろう。

男でも、女でも、老人でも、中年でも、若者でも、子供でも、脅しつけるのは誰でも。

そして——剣を振るった。

それは一番近くに居た男の太ももに当たり、線が走る。血は勢よく飛び出た。次に出たのは斬られた男の声にならない悲痛。彼が悲鳴を上げなかったのは、今度声を出すと殺されるとつさに思ったのだ。

男の、いい判断であった。

これに、誰もが静かに冷静を失う。

ゲームの仕様では怪我などせず、怪物モンスターの攻撃でも痛み一つ感じない。ただ、HPが減るだけ。

だが、今の状況は違う。

斬られたら傷を負うと、斬られたら痛いという、人間として当たり前の感情が蘇るのだ。

だが、誰もそれを口には出せなかった。

恐怖という針金が、全身を強く縛っているという感覚が、心に染み込まれたからだ。獅子が鞭に怯え芸をするように、溺れた人が水を怯えるように、殺されるかもしれないという“最悪”の予測が、脳裏に染みついた。

それが——悲しい現状だった。

「ふふつ、何度見てもこれは飽きませんね。素晴らしいです」

貴族風の男は円になっている自分の静かな“所有物”を見て、嗤う。

これ等を生かすも殺すも自分の自由という愉悦に浸り、また多くの財が手に入ると嗤ったのだ。

やはり、“上”はいいとも男は思った。

一方的に、下から搾取し続ける権利があるからだ。

同時に、“下”にはなりたくないとも思う。

どの権利が無いからだ。生かさず殺さず働き続け、使い捨てのようにならなくていい。ただ、それだけの存在にはなりたくない。

「あーはっはっはっは！！！！！！」

男はまた、嗤う。

プレイヤーの中には反乱を起こしたいと思う者も居たが、手が縛

られたままでは、無駄死になるしかない。

ぐつ、と唇を噛み締め、辛い未来に、堪えるしかないのだ。  
そう達観していた。諦めた、と云ってもよかった。

(……)

——けれどたった一人——例外がここにいた。  
多数の怖さに震える人間が存在する中。仮想現実バーチャルじゃない現実リアルに、  
より喜び、より愉悦し、より感動し、震えていた人間がいたのだ。  
萎えた感情も蘇り、下を向いた座った状態で、

最初に、ゴキッ、誰にも聞こえぬよう、手首の間接を抜くように  
無理やり外した。関節が外れて縄が緩むと、両手を拘束から外した。  
次に、ゴキッ、と誰にも聞こえぬよう今度は関節を無理矢理入れ  
た。手のひらを地面につき、全体重を片手にかけるような感じで、  
一個ずつ両手の関節を入れたのだ。  
そんな彼には、現実リアルという心地よい激痛が走り、貌に笑みが宿っ  
た。

最後に、ポキッ、と誰にも聞こえぬよう座ったままで、全身の骨  
を満遍なく動かした。

首も。

肩も。

腹も。

足も。

全ての動きは、正常であった。どれも十全に動かせる。

これで、彼はいつでも“衝動”を解き放つことができる。

——戦闘という、衝動を。

自分の状況の見当などさっぱりであったが、一つ分かるのはあの貴族や剣士は悪者なので、殴ってもいいとの事。

初めての人相手という“戦い”が、彼を怪物相手の時よりも興奮させたのだ。

——さあ、と。

## 第六話 初戦

カナヒトが多くのゲームプレイヤーを見て、嗤っている最中、

「ははっ——」

彼も嗤った。

顔を伏せ、口角を上げ、座ったまま。手は後ろにあるままで、見た目の変化は何も分からなかった。

だが、会場は静かさに染まる。

異常だからだ。

草食獣が、肉食獣に笑いかけるように、下の者が上の者を貶すように。本来ならありえない現象だったからだ。そのため、周りのゲームプレイヤーも、剣士も、貴族風の男でさえも、その嗤った人物を信じられないような目で見た。

「——ああーおもしれえ。非常におもしれえよ——」

見知らぬ人物に語るようなその声は、静かな広場に響き渡る。

この時、誰もが彼を注目した。

そこは異様な静けさだった。風も、木の葉が掠るような音も、息でさえ、大きいと思えるほど静かだった。

「——さあ、戦<sup>や</sup>ろうぜ」

彼が脈絡もなく、そのなんの変哲もない顔を上げた。それは歓喜に染まり、快感に溺れ、快楽を求めるような貌だった。

彼の貌は——獣の貌だったのだ。

戦いに餓え、血に餓え、勝利に餓えていた現実<sup>リアル</sup>。

貴族風の男は、彼が勝手に決めた悪人である。ならば、我慢しくていい。誰に拳をぶつけても構わないという考えになる。

そんな風に、免罪符を得たような気がした。

と、同時にこれが彼の“本性”であった。

危機的状況では、その者の剥き出しにされた心が見えるという。ならば、この“戦いたい”という欲求が、彼の全てなのだろう。

「なっ、なにがっ！　なにがおかしいんですっ！　誰でもいいのであいつを黙らせてくださいっ！」

当然、狂ったような事を言い出す彼に、貴族風の男はうろたえた。

——訳が分からない、と。そして、すぐにその気持ち悪い貌をトドメをさすよう剣士に命令する。

ゲームプレイヤーで出来た円の真ん中より少し外れた彼に、囲んでる十人の内の一番近い剣士が近づく。座っている彼に、命令どおり、剣を——抜いた。

「はっ！？」

それは一瞬の出来事である。

誰もが予想にしていなかった“結果”だった。

彼が、“氷雨”が、立ち飛ぶように剣を避けたのだ。

縄が無く、全身が自由になっている彼の姿を見て、貴族風の男をはじめ様々な人間が驚愕に染まった。

「ふふっ、どんなトリックを使ったかは知りませんが、問題ありません。——たかが、力量<sup>レベル</sup>1です。この中の底辺の中の底辺です。“

雑魚”は蹴散らしなさい！」

貴族風の男は慌てはしたが、取り乱しはしなかった。

氷雨が、力量<sup>レベル</sup>が1だからである。この世界では、生まれて15程度の人間ならば必ずしも2以上は持っている。それがどんな職業でも、だ。稀に体が病弱な場合などに限り、1というケースもあるが稀は稀だ。滅多にない。

それは男が奴隷にしたがっているゲームプレイヤー何十人も同じだ。彼等の力量<sup>レベル</sup>は平均5。最高は12で、最低が彼の1。彼だけが力量<sup>レベル</sup>1のため、貴族風の男は氷雨の顔をよく覚えていた。

力量<sup>レベル</sup>だけに意識をいき、彼を雑魚を決め付け、その鍛えられた肉体は気にも止めなかった。

その力量<sup>レベル</sup>絶対主義は、剣士にしても同じである。力量<sup>レベル</sup>のみを気にし、30程度を彷徨っている剣士たちにとって、己の十分の一以下などが反抗するなど、万死に値すると思った。

「死ねっ！」

だから、その剣士は己の頭で彼の強さについてなにも考えず、今度は横に薙ぎ払った。

彼はそれを潜るように避け、剣士の体制を崩す為だけに、拳を剥き出しの顎に一発。予想外の一撃に、体を揺らしながら戸惑う剣士。

「まっ、死ねや」

その後、彼は剣を持っていた右手を、引くように自分の元へ引き寄せる。その向かってくる相手の顔を両手でしっかりと、抱きかかえるように掴んだ。

ポキッ！

そして、首を掴んだまま、前転のように剣士の向こう側まで飛んで、曲がらない方向まで首を曲げた。

男は、天を見上げるような顔の位置のまま頸椎が圧迫される。そして、今折れ曲がった首に、今度は振り返った勢いのある裏拳が炸裂する。上を向いたまま首を横にしたおかげで、完全に気道などを閉じられ、――絶命した。

首の骨の音が折れる音は、呆気なく鳴ったのだった。

男は白目を向き、涎は口から溢れ出た。その姿は、かの有名な武蔵坊弁慶の立ち往生に非常に似ていた。

「鳴……呼……」

友の変わり果てた痛々しい姿を見て、仲間の剣士が嘆く。  
それほどまでに、死んだ兵士は痛々しい姿だった。

「おいおい、あいつ正気かよ！ オレは……大丈夫だよ……な？」

「いや、これは夢だな。そうだ。そうに違いない」

「キヤアアアア……！！！！！！」

一方、ゲームプレイヤー達も始めて目にした“人殺し”の光景に戦慄を覚える。

ある者は氷雨に恐怖を見た。

ある者は現実逃避をした。

ある者は耐え切れなくなつた恐怖に悲鳴をあげた。

この広場は一気に騒がしくなる。これまで亀裂が入りながらもなんとか決壊を逃れていたのが、“殺人”というきっかけにより、ゲームプレイヤーという集団のパニックを引き起こしたのである。

縄で手を縛られているため、立つことしか出来ない彼ら。

だが、もう一つ剣によって動いたら殺されるという針金が、彼らを縛っていた。だから立ったまま彼らは足踏みだけをして、動けずに居たのであった。

（以外だな。まあいいか。さて、あいつは弱<sup>ます</sup>かったのだが、この中で誰が一番強<sup>つま</sup>いんだろ？）

そんな中、初体験した人殺しに氷雨は、罪悪感を微塵も感じなかった。

気持ち悪くなる、と本や漫画ではよく書いてあったが、そんな気持ちは湧いてこない。むしろ、早く次がしたい、という感情が強かった。

そんな氷雨は人間として最低ながらも、次の獲物を探す。まるで血の味を初めて覚えた獣と、同じ行動だった。

きよろきよろと彼は辺りを見回す。

六角形の壁によって閉ざされているこの広場。出口は二つ。その両方が脇を屈強な槍を持った兵士で固めており、彼らも強そうであった。

だが、彼の脳は“より”強い獲物を見つけ出す。

そして、見たのは貴族風の男。

正確には貴族風の男の護衛である二人の剣士を見ていたが、この場の全員が“にたあ”と嗤った氷雨の顔が貴族風の男に向けられたと思った。

トストスト！

一歩ずつ一歩ずつ噛み締めるように大地を踏め締めながら、氷雨は標的に向かって歩みを進めた。

それに、ゲームプレイヤーは皆、道をあけた。

殺されたくない、という一心からだ。今の氷雨は、見るだけで怖くなるほど、殺気立っていたのだった。

目が合ったら殺される、そう思ったほどだ。

「皆さんッ！ あいつを殺したら特別ボーナスをあげますっ！」

そんなモーゼの海割りを垣間見て貴族風の男は、“にたあ”と嗤った氷雨の殺意に、顔を蒼白にし怯え、奴隷なんかよりも自分の身を守ることを考えた。剣士がこれだけいたら勝てる、と男は思ったのだろう。

剣士は特別ボーナス、という輝きの持つ言葉に引かれ、氷雨に近づいた。氷雨を囲んでいたゲームプレイヤーも剣士から離れた。これにより、氷雨、貴族風の男、剣士の間に人は無くなったのであった。

（やった！ これで死中に活ありだ！）

その頃、混乱の中でゲームプレイヤーの一人が――動き出した。

順調に進めていたゲームからログアウトすると、仲間の雲林院や雛形と共に氷雨と同じようにこの場所に居た。

彼こと、久遠光は仲間を助けたかった。だが、迂闊な行動に走ると死ぬ、というのがあの剣士の行動で分かり、助けたいのに助けられないと、非常に歯がゆい思いをしていた。

だが、そんな彼に好機が訪れたのだ。

氷雨が剣士の一人を殺し、彼が敵の目を全員引き付けていたからである。

久遠はばれないように殺された剣士に近づき、そっと足元に落ちていた剣で、後ろに縛られた縄を切ったのだ。

あいにくそれは、ゲームプレイヤーも、剣士も、カナヒトも、氷雨を注目していたので誰にもばれなかった。

「静かにして……」

「はい！」

「ええ！」

その剣をこつそりと持ち、久遠は仲間の雲林院と雛形の縄を切った。彼女らの頬は、久遠という王子様に助けられたことにより、ほんのり朱色に染まっている。だが、そんなのを久遠は気づいていなかった。

久遠はその後、騒ぎにならないように、近くのゲームプレイヤーの縄を切っていくことになる。

——そして、これが次なる“混沌”を招く。

## 第七話 混戦（前書き）

読者の皆様、変わらない応援ありがとうございます。  
これからも頑張るので、気軽な感想などをよろしくお願いしますね。

## 第七話 混戦

（一発か……）

氷雨はカナヒトへと歩きながら、体の調子を確認していた。

体に異常があつたのは両手で、やはり、関節を無理やり外し、無理やり嵌めたので痛い。

右手に殴れないほどの激痛は無いが、左手は使えそうにない。先程の裏拳により、手首から先の感覚がもう無いのである。

そう考えると、右手も一度しか使えなかった。一度だけ使った左手の感覚が無くなったことを考えると。

残り一発の弾丸で、十人以上の戦士を斃さなければならぬのだ。

だが、この絶体絶命の苦境に——より彼は燃えた。

目を滾らせ、手が駄目でも足があると。

そう考えると、剣が峰に立っていたとしても、貴族風の男の隣にいる剣士へ氷雨は全速力で——走れた。

「旦那様のために死ねっ！」

彼が地を駆けると、右からすぐに邪魔者が飛んできた。

氷雨は斬り下がる剣を一步下がって避け、剣を掴んでいる両手を蹴る。武器が無くなり剣士を無力化できたので、氷雨はそれ以上その剣士に攻撃しない。

彼の目に映ってるのが、弱い剣士ではなく強い剣士だからであつた。

「……」

今度の剣士は、無言で突いてきた。前の男は声を出して攻撃したから氷雨に気づかれた、と思ったためである。

彼はそんな攻撃を上<sup>かわ</sup>に飛んで躲す。

そのまま遠慮なく蹴り、剣士の男を沈めた。頭への、上段蹴りであつた。兜の上から遠慮なく蹴つたため、足に痛みが奔るが、両手の激痛に比べるとなんてことはない。

氷雨は足の痛みなど気にせず、また狙いの男に向かう。

「はあっ！」

「ひゅっ！」

次は二人同時に、氷雨へと切りかかった。

その二人の頭に、氷雨の力量<sup>レベル</sup>が低いという意識は既<sup>レ</sup>にない。これまでで、三人も楽に斃<sup>レ</sup>せた彼を強敵だと認識し、油断は微塵もなかった。

だが、それも氷雨には通じない。

二人が攻撃する瞬間、一度だけ止まり、また走り出したのだ。そのためタイミングを外された兵士たちの剣は、宙を斬った。彼等の攻撃は不発に終わったのだった。

「皆、立ち上がった！ 僕たちの自由を手に入れるんだっ！」

と、そんな時だった。

久遠が剣を頭上に掲げたのは。

とがらせた金髪に、端正な目鼻立ち。掲げた剣が太陽によって輝き、後光が差しているかのような光彩がそこにはある。

殆どの人間が、怪しいと思えるほどの魅力的を持つ彼に目を向けた。その時、時間が止まったと感じる者までいた。

「――全員で協力したら、数で対抗したら、どんな強敵にも勝てないことはないっ！ 僕たちの正義は、正義は必ず勝つんだ！！」

久遠は、自分達を正義だと決め付けている。

縄で自分たちを縛り、仲間の雲林院や雛形を危険な目に遭わせた彼等。それだけで、久遠の中では剣士他大勢を、何らかの理由がある可能性があることも考えず、悪だと決定していた。

まあ、当然力ナヒトたちは悪なのだが。

これとは反対に、カナヒトは次なる危機を覚えた。

あの青年が居る限り、奴隷の反乱は簡単には沈静しない。圧倒的な武力により謀反を止め、反乱分子の根絶やしによって、初めて沈静したと言えるのだ。

これは反乱を起こす前に、奴隷たちを静めなければ自分の命が危うい、と貴族風の男は思ったのだった。

「奴隷達をつ！ 奴隷達を静めなさいっ！ “雑魚”は私の護衛がなんとかしますっ！ 先に奴隷をつ！」

だから、心から男は叫んだ。

それは、悲痛の叫びと云えるだろう。

「オレ達でもできるよなっ！」

「ああ、だってこんなファンタジーな事滅多にないぜ？」

「正義は私たちにあるもんねっ！ 奴隷なんて制度を使う彼らが悪者っ！」

だが、時すでに遅し。

奴隷ならぬゲームプレイヤー達の士気は上昇していた。それは、上限を知らなかった。

久遠の剣によって縄が解かれた十人は、それぞれが刃物も使わず別のゲームプレイヤーの拘束を外す。自由になったゲームプレイヤーは鼠算ねずみざんのように増えていった。

それらは武器を持っていないとしても、力量レベルが低いとしても剣士達には脅威である。

——数が多いからだ。

数はそのまま力になる。かの有名なナポレオンは、数の利を生かして幾つもの大局に勝ったのであった。

それに士気の高さも、そのまま力に繋がる。

士気が限りなく上昇した者が、死に恐れなくなるからだ。恐怖を失った者は、捨て身の攻撃を何度も行う。捨て身などは、当たり前前に。

ゲームプレイヤー達は久遠の言葉によって士気が上がり、そんな——勝てれば死んでもいい、という異様な空気に包まれていた。

「ぐっ！」

剣士達は、そんな“空気”にたじろいだ。

それは剣士たちの圧倒的有利な状態が終わったからで、ここからは血みどろの勝つか負けるかの争いだからだ。

勝者が全てを得て、敗者が全てを失う——そんな戦いだ。

この戦い、分だけ見れば、おそらくゲームプレイヤーの方が高いだろう。

いかに剣士たちの力量が<sup>レベル</sup>高いとしても、それが有利になるのは一対一の場合だ。一騎当千の実力がない限り、人対人であれば4〜5人で囲んでしまえばまず負けることが無い。

——人海戦術が、戦場では一番強いからである。

そして五十人ほどのゲームプレイヤーは久遠を一番前とし、集まっていた。一方、十人程度の剣士も氷雨に軽く倒された者も含め、集まっていた。

それぞれが、心を激しく滾らせながら。

「皆、一人ずつ囲んで武器を奪え！ 武器を手に入れたらこっちのもんだ！ 勝つためには恐れるな！ 正義は僕達にある！ ——勝利の女神は僕たちについてるっ——！」

「おおおおおおおおおおおおおお——！」

久遠の咆哮と共に始まったのは——勝利への応援歌。

「勝つぞ！ 負ければ死だ！！ 全員齒を食いしばれっ——！」

「うおおおおおおおおおお——！」

その反対に、一人の剣士の雄叫び<sup>おたけび</sup>から始まったのは——制圧への

序奏曲。

二つの軍団は、まもなくぶつかるのであった。

「——ははっ、やっとだな」

そんなゲームプレイヤーと剣士による激戦の少し前、氷雨も貴族風の男とその護衛の剣士の元に来ていた。

護衛の剣士は貴族風の男の前に出て、氷雨と睨み合う。

「お前の強さの理由は分からない。興味も無い。——だが、我輩をこれまでの者と一緒にするなよ？」

剣士は言った。

自分の実力はこの中で一番上だ、と。

そんな男の力量は40<sup>レベル</sup>。氷雨は知りなどしないが、それはやはりこの上で一番上であった。

「——けっ、上等だ」

氷雨は腰を低くして、半身になる。左足を前に出し、右手を腰元に、構えていた。

彼は戦いに、ぶるつと震える。

——武者ぶるいであつた。

戦えることに歓喜し、強者と巡り合えたことに感謝し、興奮に痺れた体に支配された、彼だけの戦闘準備であつた。

「——ふんつ、減らず口が言えるのも今の間だけだ」

反対に、護衛の剣士は、腰の剣を抜いた。

太陽の光が鈍く光る剣。それは魅せるために作られたわけではなく、儀式のために作られたわけではなく、ただ——人を殺すために作られた剣だ。

ゆえか、怪しい魅力があった。

鈍色に輝くその剣には、人の目を引きつけて止まない怪しい魅力があった。

「早く、早く雑魚を殺してしまいなさいっ！」

そして、この二人の戦いは、貴族風の男の罵声をきっかけに始まったのだった。

# 第八話 終戦

「うおおお——！！！！！！！」

ゲームプレイヤー達は勇ましく雄叫びおたけを上げ、死ぬという恐怖を取り除いた。

そこにまともな思考判断などない。

作戦ともいえない久遠の作戦に従い、各々が剣士に向かって突進して行くのである。

その先頭は久遠であつた。

自らが旗揚げした烏合の衆を率いるためだ。ばらばらな集団を一つにするには共通の目的を持たすことが最も早い。

だが、旗揚げした本人が率先して戦わなければ、その効果は薄いのだ。それを本能で理解している久遠は、仲間を守るという強い意思のもと、最初に走り出したのであった。

「はあっ！」

久遠は一番近い敵に、持った剣をがむしゃらに振り落とした。

武術の素養などない彼は、どのフォームが最も効率よく敵にダメージを与えるか分からないため無茶苦茶な素人の振りとなつたのであった。

そんなでたらめな攻撃は、やはり剣士に簡単に防がれた。当然だろう。

どこに落とすかフェイントも全くない攻撃なのだ。むしろ防がなければ、剣士はこれまで何を習っていったのかという疑問さえ出る。

「弱い奴がオレ達に逆らうなっ！」

剣士は嘲笑った。

ぶつかり合った二つの剣は何度もぶつかり合う。

押されているのは久遠だった。秀でた反射神経だけで、何とか攻撃を防いでいるが、後ろに下がりがりながら逃げているだけでまず敵わないだろう。久遠もできるかぎり粘ってはいるが、いずれ負ける。これもこの“世界”では当たり前であった。

「はっ！」

だが、本来なら当たり前に勝てるはずだった剣士は、負ける羽目となる。

まず、ゲームプレイヤーの誰かが、血気盛んに突撃した。剣士は久遠のみに注意を向けていたので、体と体はぶつかりあった。そのおかげで一瞬の隙が剣士にできる。

久遠はそこを狙った。

その瞬間剣士の剣を、自分の剣で塞ぎこむ。聞こえはいいだろうが、実際は剣を剣士の剣に押し付けているだけだ。

凶器の危険を少なくすることによって、素手のゲームプレイヤー達を活かそうとしたのだ。

「やれえー！」

「今だあー！」

「オレ達が……オレ達が勝つんだあー！」

そしてその魂胆が分かった彼らは、久遠と同じように隣から何人

も何人もやってきて、剣士の動きを封じ込んだ。

彼らの封じ込め方は、右足、左足、右腕、左腕を、それぞれ一人ずつ全身で止める。こうなれば、幾ら筋力があるうとゲームプレイヤーに抑えられない道理は無い。

所詮、どれだけ力量<sup>レベル</sup>が高かろうと、剣士も人間なのだ。

筋力差はあるが、それはあくまで人間範囲でのこと。

もし、彼等が別の“人種”なら、結果は違っただろうが、同じ人間ならばそう大きな差は出ない。

氷雨だつて、この人数に抑えられれば攻撃できない。それは彼もやはり人間であるからだ。

だが、彼ならきつと、その抑えられる前に、――斃す。だから、先程の数人の剣士との戦いを退けられた。

集団戦では――力を抑えられる形になればもう“終わり”なのだ。

「うわっ！？ 止める！ 離せ！」

その封じられた後の剣士は無残であつた。

いくら力量差<sup>レベル</sup>があつても、大群には勝てないからだ。武器を奪われ、剣士は成すすべも数人に攻められた。ある者は馬乗りになり、ある者は手足を抑え、またある者は地味に鎧のない部分を蹴つたりと、そこに遠慮はなくリンチに近い。

彼等は“正義”という美酒に酔い、そこに罪悪感は全くないのであつた。

そんな風に、次々と彼等は剣士を大勢で蹂躪して行く。

誰かが決死の思いで剣士に突撃し、一瞬動きを抑えて他の者が次々と襲い掛かる。中にはゲームプレイヤーの中には、その突撃で大怪我を負った者も居た。だが、ゲームプレイヤーは止まらなかった。

崩壊したダムから流れる水のように、逆に勢いは増えていく。

卑怯、と剣士達は思っただろう。

ゲームプレイヤーのまともに戦わない戦法に。

だが、それを出す者は剣士の中に居なかった。

自分達も気が失っていたゲームプレイヤーをここまで連れて来たのだから……。

その数十分後、この場の主導権は逆転していた。

一方、氷雨はの中で最強の剣士相手に苦戦していた。  
攻めきれないのだ。

剣というリーチ差が氷雨を不利にしていたのである。

「チッ！」

氷雨は迫り来る剣を、バックステップで避けた。

それを追うように、剣士はまた剣を薙ぎ払った。氷雨はそれにくぐる様に躲し、自分の間合いに近づこうとするが、剣士は氷雨が懐に入る寸前に後ろに下がる。

「けっ！」

「はっ！」

氷雨は男の剣を強引に潜り、顎を狙い右の拳を突き立てる。が、

男は氷雨の腹を蹴って、そのアッパーを躲した。

護衛の男は“お綺麗な騎士剣術”ではなく、戦いの中で築きあげた“自己流の剣術”で戦っている。それが何よりも、氷雨にとっては厄介だった。

「……！」

「しつこいっ！」

氷雨は剣士の傍に張り付いていながら、上手く攻撃できないでいた。

——隙がないのだ。

彼は剣士の攻撃を縫って、さらに防具の隙間を狙わなければいけない。そんな“大きな隙”を、この剣士は作ってくれないのだ。

なので、こんな状況が繰り返される氷雨は、防戦一方であった。

まず、氷雨には武器のリーチが足りない。70センチはあるかと思われる剣と腕の長さで足なら確実に足のほうが短く、リーチは短ければその分不利になる。

それに、防具の差も大きかった。防具で覆われている部分の多くに、氷雨の蹴り技は通用しないからである。体のどこを狙われても致命傷になる氷雨と、鎧のない部分しか致命傷にならない剣士。

速さは氷雨、後の基礎能力は剣士が勝っているだろう。

だから、氷雨は全ての攻撃を避けている。一瞬でも隙を見せれば、たちまち鋭い刃を体に浴び、死を免れないと本能で分かっているからだ。

だが、このままでは永久に決着はつかない。

両者ともそう思っていた。

「――終わりだ！」

――先に動いたのは剣士であつた。

この状況を変えようと、剣士は数メートル近く氷雨と離れたのだ。剣士はそこで剣を構え、縦に振った。

（なんだ？　これに何の意味がある？）

氷雨は、この行動に最初は疑問しか持たなかった。

むしろ、休憩できるいい時間だと思った。

だが、この判断は失敗であつた。

ブウン！

鋭い風切り音が鳴った剣からは、透明のガラスのような三日月状の“何か”が出た。

その瞬間、彼の野生の勘が働いたのか、“何か”が出ると同時に動き出していた。体を毛を逆立たせて、その場から脱兎のごとく離れたのである。

しかし、その行動は、もう遅かった。

三日月状のそれは時速150キロ位出ている、氷雨が完全に避ける前に、彼の左肩の皮膚を掠り、肉を抉る。血が舞った。

この強い痛みが、彼の思考を混乱させる。

こんな攻撃は今まで見たことが無いのだ。

氷雨の目は大きく見開き、誰が見ても驚愕していたように見えた。

「はっ、その様子だと剣技スキルの一つ、『飛斬』も知らないのか？」

挑発するように剣士は言う。

だが、剣技スキルという言葉に心あたりのない氷雨は、まだ困惑している。

この剣士は、わざわざ自分の技の理屈を言うような馬鹿やお人よしではない。

無言で、その場から、『飛斬』を放つ。

いくつも、いくつも。

時には縦に、時には横に、時には斜めに、剣士はその場から動かず、縦横無尽に剣を振る。

剣からは幾つもの三日月状の“何か”が出た。

（スキル？ どこかで聞いたような……）

氷雨はその迫ってくる『飛斬』を全て避けきる。

縦のは右に、横のは跳んで、その全てを躲しながら、彼は頭を回していた。だが、頭には靄がかかっており、スキルというのが中々出てこない。

血を土の上に垂らしながら、余計に氷雨の戦況は過酷になっていった。なぜならこちらは相手に近づけず、相手は離れた所から攻撃できるからだ。

（クソッ、頭がぼーとしてきた）

そして、肩から流れ出る血が、より彼を不利にさせていった。血を失えば、正常な判断力を失うからだ。

『飛斬』を避ければ避けるほど、氷雨は集中力と体力を失っていく。

故に、動きが鈍り、先程まで躲していた筈の『飛斬』を受け、肌

に一つずつ掠り傷をつけていった。

氷雨は攻められないわけではない。

死ぬ可能性のある神風特攻のような攻撃なら、いつでもできる。

だが、その結果は悲惨なものだろうもし、上手いこと賭けに勝ち、相手に勝てることになっても、自分が死ぬ恐れがある。

それだけは避けたかった。

やっと、こんな世界に来れたのだ。どうせ帰るなら、この世界を堪能してから帰りたいかった。

「クソッ！ クソッ……」

彼は攻撃を避けながら朦朧としてきた視界で、必死に探す。飛び道具を。石でもなんでもいい。固いものなら。投げられるものなら。

だが、そう容易くは見つからなかった。

やはり、世の中は非常なものだ。

そう自分に都合よく出来ていない。

氷雨は一発使えもしない左手で、自分の顔を殴った。

大して痛くもない。

だが、活を入った。たかだか、この程度の出血でなんだ。たかだか、この程度の怪我でなんだ。たかだか、この程度の不利でなんだ。と。

勝たなければ、と思う。

もっと、このゲームよりスリルな興奮を味わいたいからだ。

『飛斬』を避けながら、氷雨はマントの端を破り、大きな怪我の左肩を無理矢理止血する。

血の流れは、殆ど布の動きで止まった。

もう一度覚悟を決める。

勝て、負けるな死ぬな、と。

「はあはあ、お前ももう少しで終わりだな。最後は我輩の剣で直接降してやる！」

そして、有利な剣士の息は、——既に切れかけていた。

この時、氷雨の脳裏にある“可能性”が浮かんだ。

もう『飛斬』は出せないという可能性だ。もし、無尽蔵に『飛斬』を出せるなら自分なら使ってる。相手が傷つき、倒れるまで使ってる。

ならばもしあの技に制限があつて、もう『飛斬』を使いないなら、近づけると氷雨は思った。

近づけたらいくらでも斃す手立てはある。

氷雨のその考えは、間違つてはいなかった。男が覚えている技を<sup>スキル</sup>発動するのに、体力の消耗が必要不可欠だからだ。技の発動時、<sup>スキル</sup>体力が一定以下の使用は、満足に発動しない場合や発動してもそのまま気絶する場合がある。

“冒険者”なら大体の技に、<sup>スキル</sup>体力の消耗など常識であるが、冒険者ではない氷雨はもちろんその常識を知らない。

もちろん、男はそれを知っていたため、これ以上の『飛斬』の使用はしなかった。傷ついた獣ならば狩るのは簡単だと思っていたからだ。

「けっ、やってやる。やってやるんだ。勝つんだ、よ。俺はな……！！」

氷雨は疲れなどを隠して、高くいきり立った。

だから、一か八か体に最後の活を入れ、腰を低くした。近づいてくる敵に、いつでも駆け出せるための準備である。

彼の頭は、大量のアドレナリンの出すぎで正常ならば機能する痛

ゆえに、いつもより、不思議と体が軽かった。

「――勝つのは俺だ……！！」

[illegible]

氷雨は弱弱しく、剣士は荒々しく吼えた。

お互いとも、既に体は限界である。

いや、剣士は限界を超えてないが、氷雨は限界を超えている。左腕の損傷はかなり酷く、左腕自体の感覚がもう――無い。

ダンッ！

二人はほぼ同時に地を蹴る。

そんな二人が激突するまで、時間にして十秒もないだろう。しかし、貴族風の男にはもつと永く見えた。

そして、氷雨に近づいた男は、ぎりぎりの剣が届く距離を見切つて、剣を右から左に振つた。

「なっ！？」

男は、灰色のマントで咄嗟に脱いで避けた氷雨に驚いた。

剣にまわりついたマントのおかげで、氷雨の姿が消えた。かのようにだった。そして、男が目を逸らした隙に、氷雨は自分の得意距離である数十センチに移動した。

だが、氷雨も無傷ではない。避けたように思われた剣は腹の皮を一枚分切っており、そこから血が少しずつあふれ出る。

彼は腰の位置に構えた右の拳を、指を広げて四本の指を綺麗に揃えた。

男はこの時、少しだけ安心した。この世界では、“貫き手”などという技術がないからである。だからその危険性に、溢れんばかりの氷雨の殺気に、気付かなかった。

「——まっ、死ねや」

彼は揃えた四本の指で、男の剥き出しな喉を狙う。

喉に指は深く突き刺さり、男は少ししてから——死んだ。それは「うつ……あ……」と、最後の言葉を残した剣士からも分かる。

そして、勢いよく抜いた彼の右手には、自分ではない赤い血が滴っていた。ぽとぽと、と地面に流れ落ちるのが、氷雨にもわかる。

「はあはあ……」

彼は体がぼろぼろな状態でも、十分なほどの満足感を味わっていた。それは緩んだ彼の顔からも分かる。

「やったぜ！」

だが、近くから聞こえるゲームプレイヤーの歓声のおかげで、その感覚に浸っているのもほんの数秒ほどだった。

「やったぜ！」

「正義はやっぱり勝つんだ！」

「リーダー俺たちを率いてくれてありがとう！」

ゲームプレイヤーが剣士達を完全に制圧した。

この動きにそう時間はかからないのであった。

彼等がぼこぼこにした剣士は、武器を取り上げられた上で、端っこに居た。かつてゲームプレイヤーが縛られていた縄で、体中を雁<sup>が</sup>字<sup>らめ</sup>搦にされているのだ。兵士たちはみじめな気持ちであろう。

そんな彼等を縛った張本人であるゲームプレイヤーは、広場の中心で勝利の宴を開いていた。

「いや、皆のおかげだ！ この反乱は僕一人では絶対無理だった！ 皆ありがとう！」

だが、そこにご馳走も酒も何もない。

けれども、人だけは居た。

数時間前まで、“ダンジョン・セルボニス”をプレイしていたゲームプレイヤーが。世界初のVRMMOのゲームをログアウトすると、後ろで手を縛られ、貴族風の男には自分たちの事を奴隷だと言われた人々が。

あのままでは、本当に奴隷になってただろう。底辺の生活を送っていただろう。そんな生活は久遠、彼によって免れた。救われたと云ってもいい。

そんな人々の中には、踊ってる人もいた。  
泣いてる者もいた。

笑ってる者もいた。

様々な人々が様々な方法で、今の喜びを表現していたのだ。

「いや、リーダー！ あんたのおかげだ！ あんたが居なければ、きっとオレは奴隷になっていた。いや、間違いない。だったら、オレは、オレを助けてくれたあんたに付いて行くぜ！」

「オレもオレも！そしてオレ達に栄光と安全な生活を！」

「私も！ 貴方だったら危険が多いこの世界でも信じられる！」

これからも、苦難は山ほどあるだろう。

もとの世界に方法も分からないし、この世界では現代ほど満足に生活をおくれないかもしれない。他にも色々とギャップがあるだろう。

だが、そんな不安も今だけは取り除けた。

久遠光、という英雄がいたからだ。

彼には感謝をいくらしても足りない。この場に居たゲームプレイヤーの誰もがそう思った。そして、誰もが彼についていこうと思う。それは彼にある独特の魅力が成せることであろう。

——そう久遠の栄光の第一歩は、これが始まりとなるのである。

## 第九話 次なる……

「あ、そうそう、忘れてたな」

「ヒイツ！」

突如、振り返った氷雨の発言は、貴族風の男に動揺を与えた。さらにそれだけではなく、全身に血を浴び、ところどころ赤くなつた布の服を着た氷雨を見ていて、恐怖は倍增する。

「ま、待ってください！ 私を殺すと、色々とデメリットがありますよ！ だから……どうかどうかお情けを……」

貴族風の男は高価な衣装を砂で汚しながら膝と手をつきながら、殺されないよう懇願していた。

この場の主導権は、完全にゲームプレイヤーにあるからだ。生きている剣士は、縄に縛られている。門を守っていた門番は、とうの昔に逃げていた。つまり、貴族風の男に味方はいないのだ。

——生きてさえいればいくらでも再起できる。

そんな野心を目に宿らせたまま、頭を地につける。これは一種の賭けであつた。

氷雨はそんな男に、無表情で近づいた。

そして、男と同じ目線になる。

「じゃあ、ここはどこだ？」

「……あつ、はい。ここはクリカラの町の南部に位置するエルフィ

ンの森の一角です」

「なら、この周りは森なんだな」

「ええ、そうです。ここから近いのは、北部はクリカラの町で、西はエータルの町になります」

男は人が変わったように、饒舌に話し出した。

氷雨はそれをうんうんと頷くように、聞いている。

これからのことを氷雨は考えていた。自分の状況がさっぱり掴めていない彼であったが、お腹は空いている。人間の三大欲求である食欲には、どうやっても勝てない。

食べていくには働けばならない。

世界の常識だ。これだけは、時代が変わろうと国が変わろうと、常に変わらない常識である。盗みという方法もあるにはあるが、これはあまり好みではない。弱者と戦ってもなにも面白くもないからだ。しかし、自分を襲ってきた者や死んだ者からは遠慮しない。金品や売れそうな物なら遠慮なく貰う。

そして、氷雨は自分の行き先を、男の話で決めようとしていた。

「クリカラとエーテルはどう違う？」

「クリカラは商業都市ですね。物の流通が盛んです。エータルはここだけの話、かなり治安が悪いので、行くのは控えたほうがいいですよ。近くに“長年攻略の出来ない迷宮”<sup>ダンジョン</sup>があつてがらの悪い冒険者や浮浪児も多いですからね」

決まったな。

氷雨は行く場所を、そう心の中で決めた。

ところで、次の行き先は決まったが、彼には聞きたいことがあった。

「——で、どこで俺たちを見つけた？」

——現在の立ち位置だ。

自分はゲームからログアウトしたはずなのに、リアル現実からは程遠く、バーチャル仮想現実も近くない“第三の現実”にいる。

そして、その疑問を解決するためには情報がいると考えた。

そう、聡明な姉に教えられていたからである。

「森の中です。森の中にこの全員が寝ていました。だから私は剣士に頼んで、この場所まで運んだんです」

「へえーそうかよ……」

だが、結果は不発。

頭がいい人なら、他に質問することもあるだろうが、氷雨はそれほど頭がよくなかった。

（探すか……）

騒いでいるゲームプレイヤーを遠めで見て、そこに久遠や雲林院、雛形など、自分の学校でも有名な連中を彼は見つけた。今日、学校に行くと友達は、久遠達が集まって“ダンジョン・セルボニス”をすと言っていた。

そして、もし“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤーが、この“第三の現実”に來ているなら、——居るはずである。

同じゲームをしていた彼自身の姉である雪が。

頭では逆立ちしたって勝てない彼女がいれば、この疑問が取れると彼は思った。

彼は、何か強い思いがあつて帰りたいわけではないが、帰れるなら帰りたい。そして、自分の家へと帰つて、祖父と戦つて勝ちたいのである。

これは一種の野望であつた。

祖父の老い先は自分が見ても短く、いつ立てなくなるかも分からない。ならばその前に、彼が一番強いと思う祖父と戦つて勝つ、と。

「——で、これだけ話しましたよね。もしよければ彼らに私の身を安全するよう交渉してくれませんか？ これでもエータルの自宅に帰れば、たつぷりと支払えるほどの財産があります。どうでしょう？ 私に協力してくれませんか？」

貴族風の男は、これでなんとかなると思つていた。ここまで話した。少しは見返りとして、親身になってくれる、と。

「——自分でなんとかしろ。俺がそこまでする義理はない」

だが、甘い。甘かつた。

氷雨には最初から貴族風の男の願いに応える気などは、ない。聞くだけ聞いただけであつた。

「どうか、どうか、お願いします。どうか私にお情けを……」

男は、少し破れたマントを剣から取る氷雨の服の裾を持って、必死に願つた。

しかし、その慈悲を求める手を氷雨は乱暴に払つて、男に笑いか

けた。

「調子乗ってると……殺すぞ？」

「ヒイツ！」

だが、その笑みは決して優しさからくるのではない。うつとおしさから来るものだ。

彼は本当なら貴族風の男をのような弱者を殺したくないし、それ以前に殺す余裕などない。表面上にある凄みと羽織ったマントの間から見える血、この二つだけで貴族風の男を圧倒したのだった。

「あ、そうそう……忘れてたな——」

氷雨は一旦カナヒトから離れ、思い出したようにまた近づいた。

「——お前への借りが、な」

「ヒイツ！！　　すみません……　　すみませ……　　グボツ！！」

そして能面のような無表情な顔で、貴族風の男を——蹴った。殺すつもりはなく、ただ痛いだけの蹴りローキックであった。彼は縄で縛られた仇を、この時返したのである。この時、奇怪な目線が彼に向けられる。

やはり彼は容赦の無い男であった。

氷雨は二つの門の内の一つに向かっていた。

方角は分らないが、二つある門は対になっているのではないので、その一方がクリカラにもう一方がエーテルに通じてるのは何となく予想できる。

先程の戦いで、破いたマントの切れ端で強引に血を止めた左肩の血は、もう止まっていたので当てていた布をとった。この止血方法は本来は間違っていたのだが、あの時はこれしか出来なかったので我慢したのでだ。本来なら水で洗ってから、綺麗なガーゼで傷口を覆いたかった。

あの時は肩しか覆えなかった。今はどこでも覆える。だが、ほかのは全て大きくはないので、そのままにしておいた。血がまだ出ている箇所もあるが、いずれかさぶたができ止まるだろうと思ったのだ。

もし、道の途中に川があれば、口を潤し怪我もとを洗いたい氷雨である。

「——ちょっと待ってくれ！」

「はっ？」

だが、そんな氷雨を止めた人物がいた。

「君のおかげで皆が本当に助かったよ。ありがとう！」

あの久遠であった。

久遠は氷雨の戦闘によって剣を得て、あの反乱を引き起こせた。なので、久遠は氷雨にとっても感謝していた。

「私もありがとう。貴方のおかげで助かったんで、お礼は言っとくわ」

「あ、あ、ありがとうございます！ 貴方がいなければ私達は反抗さえできませんでした！」

氷雨はああ、と知っている顔の久遠の隣にいた二人の女性を見た。上から発言は雛形、雲林院だ。

雲林院と雛形で、背の高い金髪が雲林院で背の低い黒髪が雛形だ。雲林院はスタイルがよく顔も整っており、どこから見ても美人。雛形のスタイルはお世辞にもいいとは言えないが、こちらも顔が整っており美少女であった。

「本当にありがとう！ おそらく、あの場に居た全員が君に感謝していると思う。ところで、どうだろう？ 皆で、もとの世界へと帰る手助けをしてくれないか？」

久遠は爽やかに両手で氷雨の手を握った。その目は期待に満ち溢れ、きらきらと輝いていた。

そんな久遠の意見を、女性陣も賛成する。

「確かに光の言う通りね。彼がいれば心強いし……」

「そ、そうですね。今回も助けられましたし、今度もきつと助けてくれるはずです！」

氷雨は一回、じつくりと心の中で考えた。

（仲間になるのは……いや、やめとこう。メリットも多そうだが、

デメリットが多い。自由な行動は無理そうだし、そしてなにより、  
“考え方”が違うからな)

ここでいうメリットは仲間だ。仲間が多ければ出来ることが増え、  
様々な可能性が飛躍的にアップする。氷雨一人では勝てないような  
強敵も、協力すれば勝てるだろう。

反対にデメリットは、好きなように戦えないだった。仲間が入れ  
ば敵は取られるし、戦いたい時に戦えない。

それにあの雰囲気を見るに、あの何十人全員が久遠の配下に加わ  
るのだろう。“人殺し”の自分が、あの“人を殺していない”中に  
入るには居心地が悪いとも思った。

それに、先ほど――カナヒトを蹴った時に感じた視線である。

何故、そこまでするんだ、という視線から、彼を仲間に入れたく  
ない、というムードが伝わってきたのだ。

そして、氷雨はこの三人と自分では、“考え方”が違うと思う。

彼等はいくまで他人の為に戦っている。それは、自分の為に戦う  
氷雨とは対極に位置するのだ。

久遠たちは、おそらく人を助けるならいくらでも命を賭けれるだ  
ろう。だが、氷雨は出来ない。強敵と戦うことのついでに、人を助  
けることなら出来るが、それは似ているようで全く違う。

背中あわせのようで、それは真逆の考えであつた。

「話は以上か？ 俺がそれに付き合う義理はない」

彼は、久遠の手を払って、短く淡々と三人に応えた。

呆然としている三人を見て、彼は門へとゆっくりと歩き始める。  
早く三人のいない町へと行って、飯をたらふく食べ、ゆっくりと休  
みたいのである。

金は死んだ剣士が持っていたすかすかの巾着を奪ったので、少しはある。これは戦利品としていただいた。死んだ者からは何を頂いても問題はないだろう、と氷雨は強引に納得しているからである。こついつた考えもまた、久遠たちとは相いれない考えであつた。

「ああ、うん。そうだよね……ごめんね無理言つて……それじゃあまた」

「ひ、光、落ち込まないでよ……」

「ひ、ひ、光君、大丈夫ですか？」

久遠は断られるなんて思つておらず、目で明らかになるほど落ち込んでいた。

だが、そんな後ろの状況など全く気にせず、氷雨は広場を出て、自分の目的地である“エータル”に向かった。

治安が悪いほうが自分に合っている、と彼は考えたのだ。戦いに餓え、戦いを求め、戦いを快樂とし、“人殺し”の業を背負っている自分には。

広場から出ると、風を感じた。

森独特の爽快な匂いと、火照つた体を冷やす冷たい温度。それに丁度いい風量。

そんな全てが、心地よかつた。

上には太陽がまだ空を照つていて、真下には草が一本もない整備された道がある。

遠くには町が見えた。これなら傷ついた今の体でも、今日中にはつきそうだ。

そして、彼は次なる目的地へと、歩き出したのだった。

——やがて、氷雨と久遠は時が経つと再会する。その時、二人の立場には大きな差があった。それがまた、大きな戦いを生むのであった。

## 第十話 不法都市

あれから数時間。

やっと目的地に着いた。

その町は暗い。いや、夜なので仕方がないといったら仕方がない。だが、電球で夜空を照らす日本の風景に見慣れた氷雨にとっては、とても暗く——不気味に見えた。

ゾワッ！

そして、そんな町に一步入ると、その身の毛もよだつような異質な雰囲気始めて気づいた。

それは一步入ったその瞬間、町中にいた全員が灰色のマントを羽織った氷雨を目測で図ったのだ。強いのか、弱いのか。金があるかと。

平和な日本に住んでいた氷雨にとって、感じたことのない視線であつた。

常に何かを怯え、他者を出し抜こうとするような、強烈な生への執着心。平和に溢れた日本ではまず考えられない感情だ。

それが、この都市の特徴だつた。

この都市では大勢の犯罪者が“とある理由”で暮らしているため、国によって定められてる法律が正常に機能しない。故に強奪、殺人、強姦などが当たり前に行われている。だから、この町では弱いものから死ぬ。

弱い者が搾取され、強い者が全てを得る。

そんな世界の縮図が色濃く出た町であつた。

——そして、これが無法都市エータルの最初の洗礼となるのだ  
た。

「おばちゃん、宿屋は開いてる？」

氷雨は早く休みたかったので、三階建てぐらいであろう木造の宿  
屋に入った。この店を宿屋だと分かったのには理由がある。先程、  
金をチラつかせ薄汚い服を着ていた子供に、宿の場所を聞いたのだ。  
いい宿屋はないか、と。

そしたら、その子供が指した宿屋がここだった。

宿屋の中はホテルや旅館ほどの清潔さはなく、入り口は広くもな  
い。冒険者が泊まる為だけに作られたような泊まるためだけの宿屋  
であった。

入ってすぐのカウンターに位置する女主人に話しかけた。

「いらっしやい。おや、新顔だね。宿屋の仕組みは知ってるのかい  
？」

「いや、“この”宿屋の仕組みは知らない」

「ちっ、そうかい、じゃあ説明するよ」

女主人は、氷雨に分からないほどの小さい舌打ちをした。“この”  
を付けたと言うことは、この町にある他の宿屋に泊まったことが  
あると考えたからだ。

もしこの町の“初心者”なら、部屋で寝た時にいくらでも金品を盗めるが、町の仕組みを知っているとそうとはいかない。

金目の物は隠すだろうし、寝る時も厳重な警戒をしてから寝る。この町ではいかなる時も、油断も隙もあつてはならない、と知っているからだつた。

——こうして、氷雨は知らず知らずの偶然の内に、“戦いの種”を失っているのであつた。

「以上だよ。分かつたら金を払つて、さつさと食堂なり部屋へと移動しておくれ」

女主人による宿屋の説明はとても簡単で、終始けだるそうに説明していた。

臨時報酬が無いのが、よつばと堪えたのだろう。だが、この町の宿屋はこれで普通だ。これでも良心的な宿屋である。酷いところでは、部屋だけでベットすらない店もある。木の床に眠れ、と普通にいう主人もいたのであつた。

この宿の値段は夕食込みで、一泊１０００ギル。

銀貨一枚分だ。氷雨はそれを今日の一日分だけ払つた。

彼の残りの全財産は、残り銀貨一枚。明日、この宿に泊まるだけで終わってしまうような全財産であつた。

「あんたの部屋は二階の間だ。この鍵と同じ部屋に入るんだね」

「ああ」

氷雨は女主人から乱暴に鍵を渡される。

それを受け取り、彼は奥の食堂へと消えていくのだった。

氷雨は食堂でパンとスープというこの世界では普通の食事を取った後、井戸へと向かった。夕食の量は質素で、味付けはほんのり塩が効いてるだけ。

現代食に慣れた氷雨にとって、味の濃さも量も物足りない食事であつた。

だが、これで我慢するしかなかった。

その食堂には、自分と同じような客が沢山いて、中には彼より二周りも大きい人間でさえ、同じ食事の量で納得していたからである。金が出来たら、肉を腹一杯食べたいと思う彼であつた。

「冷たっ！」

彼は上半身の服を脱いだ後、井戸の水で今日出来た傷口を全て綺麗に洗つた。

冷たい水は体にとても染みたが、自分の未熟な武術の腕のせいでここまで体を痛めつけたと思うと、何故だか氷雨は我慢できた。

これもそうだ。

両の引き締まった腕に無数にある細い傷。これも自分の未熟さが引き起こした傷だ。この胸にある大きな切り傷も、背中にある丸い傷もそうだ。

度重なる修練の果てにできた勲章である。

氷雨はその全てが誇らしく思う。

姉は今日作った傷を見れば「また、無茶して」と怒ると思うが、これは自分の成長の証。一つ新しい傷を作るたびに度に、反省し、強くなった努力の結晶だ。

今日、自分は初めて真剣勝負をした。武器を持った者と初めて対戦した。そして――初めての人の殺しを経験した。ほかに、今日は様々なことが色々あった。

そして、彼は、思う。今日、自分はまた成長した、と。

ここまで考えて、彼は宿にある自分の部屋へと戻った。上半身裸で、夜風にあたりながら考えることではないな、と思ったのだ。下手をすれば風邪をひく。現在、体が商売道具である彼は、自分の体を労わらなければいけないかった。

「寝るか……」

彼に用意された部屋は大きくはなかった。だが、小さくもない。一人用のシングルベットと、丸い小さな机に椅子が二個。それに壁には火の消えたランタンがあるだけだ。

そんな部屋は、窓から差す青白い月だけで照らされていた。

ベットにある布団は固く、お世辞にもよく眠れそうとは云えない。地べたで寝るよりかはまし、といった所であろう。

そんなベットに潜り込み、氷雨は目を瞑る。

明日の事を考えながら……。

彼の現在の装備、古びた灰色のマント。

所持金、1000ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数0。――未だ、<sup>レベル</sup>力量1。

## 第十一話 初めての冒険（前書き）

PVが40,000。ユニークが13,000を突破しました。  
皆さん、本当にありがとうございます。

## 第十一話 初めての冒険

次の日の昼のことだ。

氷雨は冒険者ギルドへと来ていた。

金を稼ぎたかった彼は、この町にあった巨大な迷宮ダンジョンに訪れた。すると、そこに居た門番にギルド公認通行証を持っていないと通せないと言われたのだ。なのでその門番からギルドへの行き方を聞いて、ここへと来ていた。

“冒険者”の手ほどきも知らない彼にとっては、“冒険”の初歩を知るいい機会なのであった。

「姉ちゃん、こっちにも酒だ！」

「がっはっはっは！ お前、死にそうになったんだってな！」

「う、うるせえ、だから今日は昼間っから飲んでるんだよ！」

——冒険者ギルド。

こここのギルドの中は広く、酷いアルコール臭がする。

ここでは、酒場と受付の場所は分かれており、酒場のほうが受付より4倍ほど大きい。酒場では冒険者であろう屈強な男たちが、昼間から自分たちの武勇伝を着にエール酒を煽っていた。肴は各々の武勇伝だ。

「迷宮ダンジョンの通行証をくれ」

だが、氷雨の目的は酒ではなく通行証なので、酒場には目もくれずカウンターにいたアッシュブロンドの短髪の受付嬢に向かった。酒を飲まない氷雨にとって、酒の匂いなど嫌な臭いに近いのである。

る。

「あ、はい、通行証ですね。再発行でしょうか？ 新規の発行であればこのギルドに登録してもらわなければなりません……一体どちらでしょう？」

「新規だけど、登録ってなにをすればいいんだ？」

「新規ですか……！ かしこまりました。少々お待ちください」

始めは事務的な態度だったが、新規と聞くと急に慌てはじめた。実はこのギルド——新規が入る時期は月の終わりに一回と決まっており、それ以外では新規登録がまず無いとされる。

今は月が終わった時期とは遠く離れているので、受付嬢は新規登録がないと思っていたのである。

「ありました。こちらに生体情報として血を垂らしてください。新規の登録手数料として、銀貨一枚がかかりますが宜しいですか？」

カウンターの下に潜って数分、やっと受付嬢は顔を出した。下の棚にある申込書のような物を探していたのだろう。

受付嬢は、無骨な石をカウンターの上に置いた。これが——冒険者ギルドの申込書であった。

氷雨は受付嬢が言った、このDNAを調べるような方法に少し疑問を感じたが、気にはしなかった。

ここはこういう場所なのだと、無理矢理納得したのだ。

昨日、急に広場で目を覚ました彼にとって、信じないものはない。もし目の前に神様が現れたとしても、すぐに信じるだろう

「ああ、だけど刃物は無いのか？ 実は俺、刃物を持っていないんだ」

「ありますけど……一本も持ってないんですか？ 珍しいですね」

受付嬢は銀貨を出した氷雨を怪しそうに疑いながらも、自分が持っていたナイフを手渡した。

この町では、護衛のためどんな人間でも最低刃物を一本持つ。持っていないと言うのは大抵、ハンマーのような鈍器を持つ者か、もしくは見せられないような高価な刃物を持つ物である。

だが、彼は鈍器らしき物を持っているような雰囲気はなく、かといって高価な物を持ってそうな服装でもない。ところどころ切れたマントを着ているからだ。

「そうか？ 普通だろ」

氷雨はナイフを受け取って、手を軽く切った。手から出た血は、たらたらと石まで垂れる。

この彼の発言に受付嬢はまた疑るような視線を彼に送るが、彼はあくまで“日本”の常識を話したので、二人の間のずれは世界観のずれなので、当たり前といえるだろう。

“ここ”は、やっぱり“日本”なのではないのだった。

「そうですか……これで登録は終わりです。後はお名前を教えてください」

「氷雨だ。」

「ヒサメ様。かしこまりました。この名前と個人情報登録して、ギルド公認永久の迷宮通行証を発行するので、また少々お待ちくだ

さいね」

受付嬢は、今度はカウンターの向こう側にある部屋へ消えてから数分後、またカウンターへと戻ってきた。

戻ってくると、カウンターの上に時計のような機械を置いた。

「こちらが通行証となっております。こちらは他にも力量<sup>レベル</sup>が上がる  
と自動的に知らせる機能を持っております。どうしましょう？ こ  
のギルドのシステムを説明しましょうか？ 使用料として銀貨一枚  
がかかりますが……」

「いや、遠慮しとく。聞きたいことがあつたらまた来るし、別に  
いや」

「分かりました。——では、またこのギルドでお待ちしております」

氷雨はお金が無かったので、受付嬢の申し出を断る。

受付嬢は何度も使い古された冊子を、すぐに片付けた。そこには  
ギルドの様々なシステムが乗っているのだが、この世界では紙が高  
価なため、全ての冒険者で共同に使っているのである。

そして、文字盤もなく、デジタル盤もない腕時計のような機械を  
氷雨は腕に巻き、この冒険者ギルドから出て行った。

去っていく氷雨の後姿を見ていたのは数人であったが、その冒険  
者たちの顔は何故かにやけていたという。

——こうして、晴れて新米冒険者となった氷雨であった。

午後。

遙か彼方では太陽と空が混じったような黄昏時に、彼は迷宮の入り口へ訪れていた。

門番は日中見た二人とは変わっていたが、この腕時計のような機械を付けているとすんなりと入り口を通してくれた。

地上から見える“この”迷宮ダンジョンの入り口は大きくは無い。地下へと続く階段が、地表に突然現れているだけだ。

「——気をつけな。そこから先は、冥府となんら変わんねえ」

「また、それかよ……この町でお節介をするのはお前ぐらいだな…

…」

門番の二人が言いあつてゐる。

この門番は、新顔を見ると助言のようにこの言葉を言う。誰か親しい者が中で殺されたか、迷宮ダンジョンの中に、苦い思い出があるのかは定かではない。

だが、これが彼への忠告であるのは確かだった。

コトツコトツ

氷雨は、階段を慎重に降りていく。一步一步周りに、敵に、罠に、注意しながら着々と先を進んでいるのだ。

やはり彼の頭の中では、先ほどの男の声が反響していた。

——そこから先は、冥府となんら変わんねえ。

この言葉が槍となり、彼の心に深く刺さっていたのだ。

冥府——簡単にいえば地獄だが、他の言葉でいえば死後の世界。つまり、ここに足を踏み入れた時点で、棺桶に片足を入れているのと同義だと、あの男は言いたかったのだ。

だから、この忠告を素直に受け入れ、彼は階段を下りていたのだ。

（死ぬわけにはいかないからな。絶対に——）

と、心に釘刺しながら、階段を降りていった彼に見えたのは、長方形の石で作られた床であった。

床だけではなく壁も、同じ石で作られている。そこは広い空間で、天井には発光した大きな白い花があり、この花によって奥行きまで確認できた。

（で、どうやって稼ぐんだ？）

やっと、迷宮<sup>ダンジョン</sup>へ到着した氷雨だが、ギルドで何の説明を聞いていなかったたので、金の稼ぎ方をあまりよく分かってはいない。

とりあえず売れそうな物を探そうと、今いる大部屋を探索していると、目の前から——スライムが現れた。

「おっ」

半透明なゲル状で、プヨプヨしてるだけの怪物<sup>モンスター</sup>。体長は60センチ。横幅は40センチ。見た目ではそれ以外に特徴は無く、特出したような器官さえ無い。

ただ、その場で少しだけプルプルと振動していた。

氷雨は、そのスライムを見るとすぐに拳を握り、——突きを放った。体は全快とはいかない。昨日の怪我が残っているし、まだあちこちが痛い。

しかし、問答無用に放った突きは、とても綺麗な型であった。体の動きに一切の乱れはなく、これ以上の突きであった。並みの武芸者なら、一撃喰らうだけで悶絶するような痛さだろう。

プルンプルン！

だが、そんな鋭い突きも、気持ち悪いぐにっとした感触と共に、スライムは軟らかく揺れるだけ。ダメージなど——全く与えられてなかった。

プルンプルン！

スライムは氷雨に飛び掛るが、彼はその攻撃を簡単に下がって避けた。特別早くもないその攻撃を避けることは、誰でも容易いだろう。

それだけ敵は、のろまだったのである。

プルンプルン！

まだスライムは震えていた。もう、こちらに襲ってくる気配も無い。

だが、それが返って氷雨には恐ろしく見えた。

まるで、己はいつでも攻撃できる。氷雨の攻撃では己の体に傷一つ付けられないんだぞ。などと気持ち悪い外見からは想像できない“高み”からの、余裕に見えたのだ。

氷雨はその苦境を跳ね返すように、今度は全力でローキックのよな攻撃をした。しかし、また変な手応えと、不気味に揺れるだけである。

形はやはり元に戻り、スライムは反撃すらし無い。

関節技は絶対通じないと思うので、次は体を一回転した踵落とし。  
——スライムは揺れた。

次は手を全て開きそのままスライムへと直進に、掌底。——スライムはまた揺れた。

突き、アッパー、フック、回し蹴り、飛び蹴り、胴回し。既に氷雨は、普通の思考状態ではなかった。——スライムはただ揺れるだけで、これまで時間をかけて教わった武術が通じないのだ。

それも自分が最も自信のある突きが。そして次に自信のあるローキックのような蹴りも。

だから、自暴自棄になり、大技ばかり放ったのである。

（これが……世界の広さ……なのか？）

その時、何十発もの攻撃をして、やっと彼は頭が冷めた。すると急にスライムに恐怖が、ふつふつと心の奥底から湧き上がってきた。そのスライムの姿に、飄々とした底が見えない姿に、言いようのない感情を感じたのだ。

——始めてであった。

戦いを楽しいと愉しいと感じたのは何度もある。だが、戦いを怖いと思ったことは無かった。

スライム、ゲームでは初期に位置する怪物と聞いたが、実際は全く違う。こんな、こんな、うんともすんとも云わない怪物だと。  
モンスター

自分に初めて恐怖を与えた存在であり、遥か上にいる存在。背を無様に晒しながらも、その名をしかと胸に刻んだ。

——そう、彼は逃げ出したのだった。

「うわっ、だっせ。スライムなんか逃げ出してるぜ、あいつ」

「ププッ、スライムの力量は<sup>レベル</sup>1。あいつの力量も<sup>レベル</sup>1。あいつの命も今日1日」

「まあ、言っな。ルーキーなんだぜ？ 今日“冒険者”デビューした可愛い可愛いルーキーなんだぜ？ 許したれよ、まあ、身ぐるみは全て剥ぐ、がな」

「ふっ、あんなルーキーから搾り取るとは我らも悪よのう」

地上へと続く階段の近くで、逃げ出した氷雨を見ていたのは、酒場でカウンターに最も近い席に居た四人。

強さ中堅より少し下。装備は似たようなめした革で作られた防具に、剣、剣、槍、斧とそれぞれが強いと思う武器を所持していた。

彼等がスライムを雑魚というのはしかたがない。

スライムは打撃系の攻撃は全て無効化するが、剣や槍による斬撃。もしくは魔法や、地に武器を叩きつけるなどして衝撃が出る技<sup>スキル</sup>を持っていると、“絶対”に一撃で斃せる怪物<sup>モンスター</sup>だからだ。

そんな迷宮<sup>ダンジョン</sup>の中でも足元に位置するスライムと一対一で戦って、勝てなかった氷雨。そんな彼が雑魚と認定されるのは自然の成り行きであつた。

「ププッ、あいつ先へと進んでいった。こんな時間に無謀だ。無謀だ。無謀だ」

「流石、初心者。オレ達の想像の斜め上を行くぜ」

奥へと進む氷雨を見て、四人の冒険者たちは、また、嗤う。

今の昼と夜が混じった黄昏時は、大抵の怪物が凶暴化する時間帯だ。スライムみたいな怪物は別だが、モンスター昼間や完全な夜間になど比べると死亡率が高い。

つまり、同じ階級でも強さが別段なほど、違うのだ。

だから、殆どの冒険者はこの時間だけは迷宮ダンジョンに來ない。自らを鍛えたい冒険者や無知な馬鹿な冒険者以外は。

もちろん、氷雨は後者に入る。

四人の冒険者は、まだここが一階層のため、黄昏時でも大丈夫だ。もう少し下に行くと、このパーティーでも、命が危うくなるほどである。

「——さ、ルーキー狩りの始まり始まりだ」

そして、四人の冒険者は、“狩り”慣れた迷宮ダンジョンを歩き出したのだ。  
つた。

「はあはあ……」

氷雨はスライムから命辛々逃げ出したと思っている。

久々の脇目も見ない全速力で走ったため、息は切れていた。体には嫌な疲労感だけが残る。過程がどうであれ、結果自分は逃げ出したのだ。

その負けた後味は——決しているものではない。

（次は……殺す）

彼は広間ではなく、薄暗い狭い通路を歩きながら、密かに決意していた。それは誰にも語られることのない決意だった。

だが、そんな思いを抱いても、恐怖の後に残った胸の中の苛立ちが消えない。後ろから探偵のように着いてくる四人の男達にも気づかないほど、心はスライムに対する思いに覆われていた。

そして、何かにこの怒りをぶつきたい、とそんな狂気に彼は包まれている。

グルグル！

そんな今触れれば凶器であろう人間の遠く向こうで、牙を見せ、深く唸っている者がいた。

狼のような怪物である。モンスター

その種族名は——ルー。モンスター

だが、北の森で見た動物と比べると、同じ形で合っても大きくはない。体色も黒で、“あれ”ほどの威圧感はない。

その怪物は黄昏時によって瞳を赤くし、より凶暴になっていた。モンスター

だから、本来なら、獲物を見つけた時点で一気に駆け寄り飛び掛る筈なのに、このルーは何故か飛び掛らずに、通路の端にいた。

野生の第六感が、怪物の勘か、詳しいことは不明だが、ルーは一目で氷雨を危険だと気づいたのだ。モンスター

なので、通路の端でそつと息を殺す。

氷雨に殺されないためであつた。

不幸にも氷雨は、壁にある白い花が光っているだけの見えにくい通路のせい、すぐ横に居たルーなど見えていないようで、すんな

りと横を通り過ぎようとしていた。

ルーは心臓をどくどくとさせ、丸くなりながら待っている。氷雨がこの場からいなくなるその時を。そんな無限とも思える刹那を、ルーは感じていた。

やがて、氷雨は前だけを見据え、この場から去っていった。

ルーは、その安堵ゆえか、ほっとした一息をついたように見えた。

——これがまた、彼が戦いを逃した瞬間であつた。

グルグアッ！

ルーは氷雨の後に来た男達に飛び掛つた。

氷雨と比べると弱いと思つたのだらう。この迷宮で生まれたばかりの怪物に、<sup>モンスター</sup>“強さ”を正確に測るような選別眼は備わっていないかつたのだ。

そんなルーは、男達に飛び掛るものの、二人の剣士によって動きを取り押さえられ、最後に1メートルは軽く超える斧を持った男の<sup>スキル</sup>技によつて、頭をバキツと割られた。

ルーは生まれて数十分で、命を失つたのであつた。

それは、いくら黄昏時で怪物が獰猛といえども、ただか力量<sup>レベル</sup>1では長年冒険者を行っている彼らの敵ではない。

だが、念のため、男はとどめとして、<sup>スキル</sup>技を放つた。

その技の名は、『重斬<sup>スキル</sup>』。

斧技の一つで、大きな斧の特性である重さと硬さを最も活かした一撃必殺の縦切り。隙も多いが、通常では考えられない程のパワーで斧を振り落とすので、威力は絶大であった。

まさにとつておきの名に恥じない一撃である。

モンスター  
怪物が彼に怯えて隠れていたことなど知らない男たちは、氷雨が先に行ったことで残ったルーを始末しながら、口々に思いのたけを喋っている。

「うわっ、あいつルーにまで逃げ出してるぜ！」

「ププッ、ルーの力量<sup>レベル</sup>これまた1」

「——でも、ちょっと変じゃねえか？ 幼児でも2は持つてるぜ。あんな成長した男が1なんて考えられねえよ」

槍を持っていた男が感じた違和感であった。

力量<sup>レベル</sup>が低くすぎる人間。1などありえないのだ。男は力量<sup>レベル</sup>1の間など、赤ん坊しかこれまでに見たことがない。

だから、この男は疑問に思ったのだが、

「ふっ、どうせ温室育ちなのだろう。病弱で温室育ちのどこかの貴族の嫡子なら、力量<sup>レベル</sup>1でもおかしくはないはずだ。そういった噂は、どこかで聞いたことがある。実際に見たのは初めてだがな」

斧を持っていた男に即座に否定された。

これは、貴族風の男に似た意見でもあった。

「いや、そんな貴族の坊ちゃんならこんなところ来ないだろ？」

「ププツ、そうだな」

「そこでだな、オレは考えたんだが、あいつには凄い秘密があるんじゃないか？ それも特上な秘密が、だ。例えば力量<sup>レベル</sup>の偽造とか、詐欺だ。これは今、都市伝説であつただろ？」

「ふつ、都市伝説はあくまで都市伝説だ。そんな物に踊らされるなんて、お前もまだまだだな」

「ププツ、力量<sup>レベル</sup>が偽造が、本当だった。としても、問題ない。どうせ、あいつはルーすら斃せなかった。それに武器も持ってない。だったら、オレたちなら斃せる」

「まつ、そうだよな。じゃなきゃ、あんな出来立てはやはやのスライムやルー相手に、逃げるわけねえもん……」

「それにもし、あいつが貴族の嫡子なら、我々もいい金づるを見つけたと言ふことだ」

「だな！」

氷雨を見つからないよう足音がしないよう追いかけながら、一人の男が思った疑問は仲間の声によつてすぐに泡となつて消えた。

そうだそうだ、と彼の力量<sup>レベル</sup>1という事に納得したのだ。

力量<sup>レベル</sup>をどれだけ偽造してても、その“もと”が弱ければ偽造の意味がないからである。

もし、その者が三桁になるほど強くて、その強さを目立たぬために隠したいのであれば、不可能とされる力量<sup>レベル</sup>の贋作もありえる。

だが、彼は弱い。

レベル  
モンスター  
力量1の怪物すら斃せぬようでは、全てが杞憂だろうと男は思ったのであった。

「で、あんなふとしたオレの勘違いは無かったことにして、どこであいつを嵌めるんだ？ この先にある広間なんか、丁度いいと思うぞ」

「ふつ、そこはちゃんと考えておる。あの広間には地下へと続く階段があつたであろう？ そこを降る直前に仕掛けるんだ」

「ププツ、君たち流石。階段を降りようと油断してる時に狙うなんて外道」

「ふつ、そう褒めるでない」

斧を持っていた男は、自分に酔っていた。

彼が貴族の嫡出子ならぼろ儲けだし、もし一文も持っていないくても奴隷として売ればいい。

どっちに転んでも金が稼げる。

そう、この時は、こう樂觀してられたのだ。

氷雨は狭い通路を腕をぶらぶらとぶら下げてゆつくりと歩きながら、刺々しい瞳で獲物を探していた。

モンスター  
スライムから逃げ出して以来、怪物の影すら見ていないのだ。それはルーと同じように怪物が彼を見かけると即座に逃げるか、隠れ

るという行動を行っていたからであつた。

ゆえか彼の周りは、殺気に満ち溢れていた。

溢れ出る戦闘衝動を、発散できないためである。

男達も力量<sup>レベル</sup>1という色眼鏡がなければ、随分前に逃げ出していたであらう。

（戻るか？）

その時、氷雨は今日は宿に戻って後日スライムに再戦する、という選択肢を思いついた。

だが、それを実行はしない。

まだ金目の物が見つかっていないからだ。

振り返ればここに鬱憤を晴らしに訪れたわけではない。空腹を満たしに、金を稼ぎに来たのだ。

しかし、甘い。

この階にある宝は、既に他の冒険者に掘り尽され全く残っていない。40や50まで行けばまた違う結果になるだろうが、彼にそんな予備知識はないし、そんな下の階まで行ける仲間も、力もなかった。

初めての冒険である彼には、何年かけても攻略者が“0”の、この永久の迷宮はそれほど厳しいものなのだ。<sup>とこしえダンジョン</sup>

今、彼がいるこの一階には、既に何千人と人が訪れた。故に、マップの詳細も、出現する怪物<sup>モンスター</sup>も全ての情報は、冒険者の中に出回っている。

だから、一階を拠点としたら、稼げる金も稼げないのであつた。

「はあ……下に行くか」

彼はそんな知識もないのだが、目の前に現れた階段を降りることを即決した。それは、この広間に先に続く道がなく、先へと続く道は下しかないからであった。

そして、階段に向かって踏み出すと、

「今だっつ！！！！！」

野太い男の声が、部屋中に響く。

四人が、一斉に、片足を階段へと踏み入れた氷雨へ襲い掛かったのだ。

「……………」

この場面で不意打ちされることは氷雨も予想していなく、足を階段のふちに引っ掛けながら、無様に転げるようにして、四つの刃物は避けれた。

だが、床の上に転がる氷雨に、すぐ第二陣がやってくる。

「死ねっ！」

槍であった。鋭く、長い槍。幅広大型な三角形の穂先を付けた長槍で、俗に云うパルチザンである。

剣より長い槍が、転がっている彼に突く。

氷雨は近づいてくるそれを、冷静に、刃ではなく柄の部分を上へと殴って逸らす。

「ププッ、次っ！」

第三陣が襲撃する前に彼は起き上がるが、膝立ち状態の彼に今度は剣が薙ぎ払われた。氷雨はそれをバックステップで避け、敵の情報を整理しようとした。

だが、そんな余地は与えてくれなかった。

今度も剣だった。

深く踏み込んだ男が、剣を彼の頭上に落とす。また、氷雨は下がつて避けた。

続けざまに別の一人が、剣を振るう。  
槍を振るう。

さらにまた別の一人が斧を振るった。

しかし、これはただの序章であつた。濁流のような勢いで、彼を飲み込む攻撃は、これから始まるのだ。

剣。 槍。 斧。 剣。 剣。 斧。 剣。 槍。

まだ、四人の男による猛攻は終わらない。誰も氷雨に向け、容赦もなしに武器を振るってきた。

氷雨は精神を削ぎ落としながら、一つ一つ命のやり取りをしていく。瞬きや深呼吸の暇さえ、与えられない。

氷雨の頭には躲すという事柄がなく、時には丁寧に、時には大胆に、攻撃を一つ一つ後ろへと下がりながら躲していった。

「もつとだっ！」

男達も氷雨と同じように戸惑っていた。

初撃で葬る予定だった氷雨が、まだしぶとく生き残っているからだ。だが、彼が何者かという思考する余裕は——ない。

これで殺さなければ、これで殺さなければ、と攻めても攻めきれない相手に、手をこまねいているのだ。

「ププッ！」

後ろへ一心不乱に躲していた氷雨は、ついに背を壁についた。

そこを狙っていた槍使いが、槍技<sup>スキル</sup>『疾槍』を放った。『疾槍』は単なる突きであるが、『重斬』同様リミッターを外した筋力によって行う並外れた速さの攻撃であつた。

それはやはり早い。

だが、重い槍であるが故に、祖父のジャブほどのスピードではなくぎりぎり見えたので、氷雨は頭に迫り来る槍を、首を左に傾ける。

髪が少し切れた。しかし、皮膚までは切れなかった。

狙いの外れ、勢いのついた槍は壁に当たり、刃が欠けた。

氷雨にとつての——絶好な好機だつた。

「なっ！」

氷雨は研ぎ澄まされた感性で、その一瞬の隙を見逃さない。槍を片手で支え、もう一方の片手で関節を折るようにする。

ボキッ！

そして、――極めた。

人の骨を折るように、木で作られた柄を折ったのだ。

「あつあつ……」

槍使いは斬られたのではなく、折られた槍に声すら出ない。武器とは消耗品なので、代えの武器を持っているが、懷に隠した武器を出す時間を与えられなかった。

氷雨は、一步で相手に近づく。

槍使いの仲間は槍使いを守るよう、先に氷雨を殺そうとする。だが、その前に彼は槍使いの兜が無い顔面を殴った。

「……」

もう一発顔を殴る。さらに鞆丸のある股間に上蹴り。音はなかったが、ぐにやりとした感触から潰れたな、と氷雨は感じた。

槍使いは――くる、と思った。

それは鞆丸を潰された痛みである。数秒後、やはりきた激痛に悶絶した。その痛みは、すぐに全身を走る。やってきた絶え間の無い痛みの波は、槍使いの戦意を消失していた。

そんな男は股間に手をやった。

痛みが消えぬと分かっているも、股間に手をやったまま膝から崩れ落ちた。目を固く縛り、呻き声をあげ男は倒れたままジタバタしていた。

戦えないわけではない。立てないわけではない。

だが、感じたことの無い激痛に、終わらないだろう激痛に、槍使いの戦意は消失していた。

いつそのこと死にたい、そう思ってしまうような痛みだった。

そんな氷雨は、状況は以前として不明だが、先に仕掛けられているのに、殺さないや手加減するなどといった感情はない。

やられたらやり返す、との心情のもと、攻撃には手を緩まなかったのである。

そういつた覚悟が、弱点を的確に狙ったのだった。

「あ……あ……」

そして、槍使いの仲間の三人は、仲間を立つたまま見ていた。男なら誰でも感じたことのある他のどれとも違う云い様のない痛みに、耐え抜いている槍使い。

その姿を見て、仲間の自分の股間も押さえなくなった。

「うおおおおー……！！！！」

次に吼えた仲間が居た。

あの痛みを見た後で、自分を奮い立たせるために、急所を的確に狙う敵を斃すために。

先刻の不安は、杞憂だったのではない。

——敵は強大だと。

だから、剣を強く握った。

だから、大地を強く踏みしめた。

そして、氷雨へと距離を詰め、剣技<sup>スキル</sup>「連剣」を行なった。『連剣』

とは、人外の速さで幾つもの剣による閃光を起こす技だ。<sup>スキル</sup>

何発も。何発も。何発も。

だが、高威力しかも連続技であるこの技<sup>スキル</sup>には弱点があった。発動

すれば終わるまで、その場から動けないのだ。

剣のリーチは拳に比べると長いが、槍に比べると短い。

氷雨はその剣の距離を冷静に見極め、下がった。胸や腹など、『連剣』によって体の正面に傷が数箇所入ったが、深くは無かった。

そこから先は言うまでもない。

男は技の効果で、その場で剣を振り回しただけであった。技とは、効果的な場面で使えば予想外の強さを発揮するが、一歩間違えると不利になる。

この剣技『<sup>スキル</sup>連剣』もそうだ。『<sup>スキル</sup>連剣』とは他の技よりも強力だが、一旦放つと途中で止められないというデメリットを要する。そして、男の攻撃が終わった。同時に動きもとまる。

顔が青白くなり、無呼吸運動を続けたが故の、——酸欠だった。大きな深呼吸をしたかった。だが、それも叶わない。

氷雨は動きが止まった男を待ってたのか、がら空きの目に人差指で一突き。

そのまま——指を穿り出した。

眼球が飛んだ。地面に転がる。眼があつた眼底からは、血が間欠泉のように出る。

剣使いの男は痛みよりも、片方の光が無くなった事に驚いた。すぐにその原因が、もう片方の目に映る。

「ああああ——！！！！！！！！！！」

——絶叫した。

だが、この男の凄いところは、片目が無くなっても氷雨に反撃し

た事であつた。

技は使わない。<sup>スキル</sup>いや、使えない。もう一つの『連剣』のデメリツトに、使用すれば体の負担を減らすため、一定時間は他の技は使えないのである。<sup>スキル</sup>

だから、男はすぐ傍にいた氷雨に袈裟切りをした。

しかし、氷雨の攻撃とは速さが違つた。

拳と剣。超近距離であれば、拳のほうがその速さゆえに有利になる。

拳はフックの要領で、鎧の隙間をぬつて男の脇腹、肝臓の部分に刺さる。

ボキッ！

あばら骨が何本か折れて、体がくの字に折れ曲がる。その衝撃ゆえか、剣も手から離れて地面に落とした。

剣使いの男は、人間による内臓を的確に狙つた攻撃は初めてのようで、意識を簡単に手放した。

「くそつたれ！」

そんな氷雨に背後から、斧を振り落とす者がいた。

それは『重斬』。<sup>スキル</sup>それを斃した技と、同じであつた。

——結果から云うと氷雨はそれを食らつた。避けるには時間が余りにも足りないからであつた。

「ぐっ！」

だが、彼も負けてはいない。

斧自体は体に命中したが、斧使いの方へ体を動かしたため、刃ではなく金属部分の柄がもろに右肩にあたる。

右肩は『重斬』の威力によって外れたが、大した怪我ではない。

次にくるんとターンして、氷雨は筋骨隆々の斧使いの男の正面に立った。

そして、左手の手刀を斧使いの首に。男も斧で反撃しようとするが、その重さゆえに取り回しにくい。

両手で振り上げてもう一度、斧を落とす前に、首にもう一度右ハイクック。首は、太いゆえにまだ折れてなかった。

男は斧で反撃するのを諦めたのか、武器を手放した。

そして、斧使いは幹のように太い腕で氷雨を殴ろうとする。

これが、——斧使いの間違いであった。この体格の違いからの筋力差に、斧使いは素手でも勝てると思ったのだろう。

だが、徒手空拳がずぶの素人である斧使いと、素手のみを長期に渡り鍛錬してきた氷雨。

戦力差は誰が見ても歴然であった。それに、斧使いがつけている筋肉は斧を使うための筋肉であって、殴る筋肉ではない。

氷雨は殴ろうとする男の左腕を逸らすように取る。そして、背負うように投げ、地面に叩きつけた。受身知らない男は、背中を強く打つ。

そして、氷雨はそのまま首を取り、両腕で頭部を挟み込み、捻るように回して、——極めた。

——ピコーン、力量<sup>レベル</sup>が2になりました。

その声は、氷雨の左手からした。斧使いが死んだことによる力量<sup>レベル</sup>アップだった。

だが、氷雨は力量<sup>レベル</sup>アップに関心を向けない。彼が興味あるのは、“ほどよい”殺意であるからだ。

「あつ……あつ……」

地面に横たわる三人。

そして、未だ立っていて、氷雨が見つめてるのは自分。未来は楽に考えられる。

彼は、剣を持っている自分の狙っているのだ。

いくら力量<sup>レベル</sup>がたった今、2になった彼でも、脅威<sup>レベル</sup>だという事実に変わりはしない。逃げることも出来ないだろう。鎧を着ている剣使いとマントのみを着た氷雨。

どちらのほうがスピードは早いのかは、猿でも分かった。

「……あああー！ー！ー！！！」

男の慟哭は、部屋中に木霊する。

このパーティーで一番強かった斧使いが負けたのだ。そんな相手に、パーティーで一番弱い自分が勝てるわけなど無い。

だが、勝てぬと分かっても、抵抗するしか道は無い。それで奇跡が起きなければ自分は負けるのだ。

剣使いの男は、『飛斬』を目隠しに、氷雨へと近づく。

だが、既に『飛斬』を目にしたことがあった氷雨はそれを難なく避け、近くに落ちていた斧を剣使いに投げる。

「えっ！」

男は迫ってくる大きな斧に剣で防ごうとするが、パキッと剣が折れた。斧は柄の部分が腹に当たったので即死は免れたが、すぐ前に――氷雨がいた。

ブシュッ！

そして、細い男の首に、氷雨の貫き手が突き刺さっていたのだった。

「っ！！」

氷雨は貫き手をした左手を、首から引き抜く。肌についた血を飛ばすように腕を二、三回振ってからマントで血を完全に拭う。

そして、死屍累々と横たわる死体と、呻き声をまだあげている槍使い。それに片目を失ったまま気絶している剣使いなどの惨劇を見て、一言。

「ふう……やりすぎたか？」

氷雨は、軽く言いのけたのだ。

あの貴族風の男がいた広場にて、人を二人も殺しているのもう人殺しに慣れたのだらう。まるで動物が当たり前に呼吸をするように、氷雨も当たり前のように人を殺したのだ。

だが、ただ一つ。勿体無かった、と彼は思っていた。

彼は不意打ちが嫌いで、正々堂々が好きなのだ。不意打ちはしてもされても、“戦い”の興奮が悪い意味で存分に味わえない。

その点、正々堂々は体の芯まで“戦い”を味わえるのだ。

本日は、“戦い”を十二分に堪能とまではいかないが、ある程度の充足感<sup>充足感</sup>は手に入れた。

これ以上の高望み<sup>高望み</sup>をしても衝動は際限なく湧くだけ、と彼は考え、今は早く帰りたい<sup>帰りたい</sup>かった。そして、当初の予定通り飯を腹一杯食べたかったのだ。

（さて、全部盗るか）

幸い金の当てはあった。

それは、死人に口なしの如く、一人ずつ装備や金になりそうな物を剥ぎ取っていったのだ。そこに遠慮の二文字など無く、ただ黙々と奪い取っていった。

（ふう、この程度か？）

まず貨幣を手に入れ、武器も手に入れた。その他装飾品など、金になりそうで軽い物は全て奪う。しかし、防具だけは脱がすのが大変なので諦めた。

氷雨は両手に抱えきれないほどの戦利品を手<sup>手</sup>に帰ろうとした時、ふと――妙な空気を感じた。そして、周りを丁寧に見回した。

グルルル！

その胸騒ぎは、間違っていなかった。

——ルー<sup>モンスター</sup>がいたのだ。それも数十匹も。

狼のような怪物であるルーは、——やはり鼻が発達していた。だから、氷雨が殺した二人の血に誘われてここまで来たのだろう。

「へえー、俺と、戦<sup>や</sup>るのか？」

氷雨を丸く囲んでいる数十匹のルーは、例外なく目が赤かった。黄昏時の影響は、まだ切れてないのだろう。そんな、ルーの数による威圧感は間違いなく氷雨を刺激し、戦利品を全て地面に置くと、彼もルーと同じように殺気を出した。

大群のルーは、少し氷雨から退く。

あの生まれたばかりのルーと同じように、このルーたちも類稀な嗅覚で匂いだけでなく強さも、本能的に嗅ぎ分けるのだ。

「逃げたきや逃げろよ。今日の俺は機嫌がいいから見逃してやるぞ？」

氷雨はそう挑発してからルーを一瞥し、さっさと戦利品を拾い上げた。

朝から何も食べていない空腹の彼にとって、満腹という未来がとも輝かしく見えたのだろう。戦いという欲求には勝てても、食欲という欲求には勝てない氷雨であった。

グアッ！

ルー達も氷雨の言葉の意味は分からなかったが、言葉の真意は分かる。

大勢の怪物は氷雨から四人の冒険者へと視線を変え、その肉へと喰らいついた。足に、腕に、内臓に、思い思いの場所へと一斉に喰らう。

辛うじて生き残っていた冒険者は、大量のルーによる体を引き裂かれる苦痛に目覚めて叫びだす。だが、黄昏時のため助けてくれるような人もおらず、そのまま死んでいくのだった。

これが、迷宮ダンジョンのメカニズムだった。  
モンスター  
何かが死ねば必ずハイエナのように怪物が現れ、死体を骨だけに  
する。

服や鎧は、見つけた冒険者が拾うので、結果的になくなる。そして残った骨でさえも、迷宮ダンジョンという生き物に——喰われてなくなるのだ。

なので、何百人と死んでいるとされるこの迷宮ダンジョンには、骨一つ残らない。常に綺麗であった。

だが、それは、絶えず行われている——迷宮ダンジョンの浄化作用のおかげなのだった。

夜。

氷雨は町に戻ると、昨日泊まった宿屋に向かった。食事の前に武器等をどこかで売り捌こうとも思ったが、既に空は薄暗くなっていたのと空腹の為、諦めた。

なるべく早く腹一杯食べたかったのである。

この宿屋の食堂のシステムとして、夕食込みの場合の食事はパンとスープだけだが、追加料金を払うと肉や野菜などが食べられる。パンとスープの種類は毎日変わるので飽きることはなが、物足りないと感じる者だけ追加メニューを頼む。

だが、そんな者は極僅かであった。

この宿に泊まる大半が、並程度かそれ以下の冒険者である。冒険者の資本とは命だ。

彼らは死にたくないため、装備や薬草などに一番金をかける。少しでも高価で丈夫な装備を、と冒険者はいつも保険をかけるのだ。なので、質素な食事だけで満足し、金のかかる豪華な食事など一番後回しにする。一時の幸福感のために命を疎かにするなど、冒険者の間では考えられないのだ。

中には追加メニューを頼む者もいるが、その者達は皆冒険者の中でも上級者である。高い装備に身を包み、永久の迷宮の50階以上を、軽く踏破する強者しか食べることはまずないのだった。

「——これで買えるだけの肉をくれ」

氷雨はぼろい灰色のマントのまま、食堂のキッチンの人間に銀貨を3枚出した。

キッチンにいた料理人の一人は、こんな貧相な格好の男が追加メニューを頼むなんて、と驚いたが客の内情に口を挟むほど愚かではない。

氷雨の注文通り分の肉の塊を焼いてから、塩だけで味付けをし皿の上に置いた。パンとスープも一緒に。

彼は空いていた椅子に座ると、即座にがつつき始めた。

他の客が居れば、力量が低いのに追加メニューを頼んでいる彼に目を付けるだろうが、黄昏時が終わったこの時間。もう一度日々の路銀を稼ぎに、迷宮へと潜る冒険者が多いため、現在この宿屋の食堂に彼以外の客は居なかった。

氷雨は肉を食べ、パンを口に入れながら、スープで流し込む。味はやはり薄かったが、量だけで言えば昨日より遥かにいい。

食事の時間は数十分で終わる。

その後、今日の戦利品をすべて部屋に置くと、彼は外に出て行った。

外に出ると、雲ひとつない黒い頭上には、煌びやかな星が無数に輝いていた。例えば、存在感のある一等星や二等星のような大きな星や、天の川のような屑星が集まっている集団。白く光る月や様々な形に見える星など、それは街灯がないこの世界ならではの、素晴らしい景観だった。

それらの星達は、一晩ではとうてい語りつくせないであろう“物語”が作れそうであるかつて、古代の人が星座でいくつもの“物語”を作ったように、神話がここから生まれたように。——無限に想像力が湧いた。

そんな雄大な景色の下で、氷雨は地面に両手をつき、腕立てを始めた。両手で普通の腕立てを五十回。指立てを五十回。その後親指だけの腕立てを五十回し、氷雨は立って走り出した。汗はかいていない。

軽く流すだけの運動であるからだ。

日々の鍛錬を怠れば実力も落ちる。

武術に関してだけは、そんな祖父の教えを律儀に守っている氷雨だった。

適当な距離を走り終わると、今度は空き地のような場所を見つけ、マントを脱いだ。

そして一個ずつゆつくりと技の確認をしていく。

突き、手刀、貫き手、上段蹴り、中段蹴り、下段蹴りなど、どの技も丁寧で綺麗な型である。技スキルのような筋力アシストがある雑な技ではなく、精巧に作られた日本刀のような鋭い美しさであった。

型が終わると、今度は股割りをする。その身体は足が定規のように真っ直ぐになっているので、体操選手のように柔らかかった。次に、前屈など様々な関節のストレッチを始めた。

武術家にとって、身体の柔軟性は筋力と同じくらい大切である。特に蹴り技は、身体の柔軟性がないと行うことすら出来ない。

「帰って寝よ」

そんな一通りの筋トレと柔軟の訓練を行ってから、氷雨は宿へと帰ったのだった。また、明日の冒険のために体を休めようと。

——彼の現在の装備、古びた灰色のマント。持ち物、売却予定の装飾品や武器多数。

所持金、4670ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数モンスター0。力量レベル2。

## 第十一話 初めての冒険（後書き）

試験的にですが、迷宮と迷宮？と鍛錬を一つに纏めてみました  
読みやすさはどうだったでしょうか？

もしこれについて何かあれば、感想、ご評価などをいただけると  
とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## 第十二話 怪物狩り

氷雨は二日の休息をとり、迷宮<sup>ダンジョン</sup>へと来ていた。

彼が今居るのは一階。景色は相変わらずの石壁で、照明は白い花である。

まだ怪物<sup>モンスター</sup>は一匹も殺していないが、殺す為の対策はきちんと考えているので、“どんな怪物<sup>モンスター</sup>”でも斃すことが出来ると、彼は敵と遭遇するのを嬉々と待っていた。

そんな彼の休息の理由は——怪我である。連日に及ぶ連戦で、体にはがたがきていた。貴族風の男の護衛を斃すときは両手首を外し、左肩に大きな損傷を。次の日に戦った四人の冒険者には右肩を外された——だけかと思いきや、次の日にその怪我の確認をするとうっ血していた。

体に負った傷はこれだけではなく、細かい切り傷などを数えれば数十にのぼる。どれもこれも戦えないほどの傷ではないが、無視できるほどの怪我でもない。焦らずとも先があると彼は考えて、二日間は休息と情報収集に力を入れたのだ。

グルルル！

迷宮<sup>ダンジョン</sup>を探索していると、見慣れた怪物<sup>モンスター</sup>の姿があった。

ルーだ。相変わらず狼に、よく似ている。

この階層ではルーがよく出ると、ギルドでの調べは事前についてある。ギルドでは情報提供があった怪物<sup>モンスター</sup>の生態や弱点などは、まとめて保管しているのだ。

それらが載せられた写本を貰うのに当然金が必要となるが、氷雨

は必要経費と割り切って十階までの怪物資料は全て買った。

中には喉から手が出るほど欲しかったスライムの詳細も載ってたので、——本日の目標はスライム討伐と、勝手に心の中で決めていたのである。

シュツ！

氷雨は本来なら狩らない格下の敵相手に、全力の蹴りをした。鋭い蹴りは飛び掛ってきたルーの頬にぴったりのタイミングであたる。ルーはその威力の高さのあまり、遠くの地面に転がる。

彼は手刀で、その動きが止まったルーの首を一閃した。そして——ボキッ、とルーの首が折れたのであった。

（はあ、弱い。<sup>ます</sup>でも、リハビリには丁度いいな）

氷雨は嘆息を一回。

彼の性分として、弱い者虐めは基本嫌いだ。強い者と戦い勝つことが彼の至福の時間なので、不味い肉を大量に食べるような行為である弱者を斃すことには嫌悪感すら感じる。

だが、二日の間体が疼くばかりだったのと、久々の戦いで勝負勘を取り戻そうと思っていたので、今回は特別にルーを殺していたのだ。

それと怪物を殺すと金ができる、という理由もある。<sup>モンスター</sup>

<sup>ダンジョン</sup>迷宮で生まれ、<sup>ダンジョン</sup>迷宮で死んでいった怪物は黒い霧のような瘴気となつて霧散し、<sup>ダンジョン</sup>迷宮の壁に吸収される。

その時に残った色々な色彩を放つ石、すなわち“結晶石”がこの大陸の大切な資材となり、そこそこの値段で売れるのだ。

氷雨はこれをお金が入っていた巾着に入れながら、拾うのが少し

窮屈に感じていた。“結晶石”はお金となるので拾い残しはないが、これを腰に持ちながら戦うのは少し面倒だと思ったのである。

「よつと」

キャウンキャウン！

氷雨は細い通路の前方を塞いでいるルーを蹴りで飛ばす。彼は床に倒れたその頭を、自分の体重のみで踏み潰すと、それは呆気なく絶命した。

「はあ……」

キャウンキャウン！

氷雨は後ろから飛び掛ってきた三匹のルーの内、一匹目は頭に体を一回転させた踵落として、二匹目の頭はただの肘撃ちで、三匹目は頭を掴み膝に打ち付けるように蹴った。

どれも頭がぱんつと弾け、“結晶石”だけが残った。

「……」

キャウンキャウン！

氷雨は走った勢いに任せて、また狭い道を防いでるルーに飛び蹴りする。彼の攻撃は胴体に当たったが、そのまま首を両手で持って、捻るように回し、——極めた。

ちなみに、この時の彼の目は笑っていない。

グルルル！

彼の進行方向に、またルーが現れた。

当然、彼の細道を塞いでおり、先程のルーを斃してからまだ一分と経っていない。

ルーの遭遇率はこの階にいる他の怪物モンスターに比べてそう高くないのに、五分の間に六匹とは凄まじい確立であつた。

「——俺に恨みでもあんのか！……！」

氷雨は怒鳴りながらルーに近寄り、顎にアッパーをする。怒りに染まった彼の拳は岩石のように硬く、弾丸のように早かつた。ルーは二メートル程しかない天井に激突し、重力によって地面にも叩きつけられ、——死亡した。

——ピコーン、力量レベルが3になりました。

また、左腕から音が鳴つた。氷雨は殺した経験のない怪物モンスターばかりを討伐した事によつて、経験値が少しだが多く入つたみたいだ。いわゆる“初心者”だけの特権であらう。

だが、彼はその機械の音を雑音と称し、関心すら向けなかった。  
力量レベルが上がったら強くなるとギルドの人は言つてたが、“機械なんかで人の強さは決められない”と思つている彼にとっては、そんなのはたわごとでしかないのだ。

それからの氷雨は、何十匹のルーを見つけても無視するか、一撃で葬つて先を進んだ。ルーばかり鉢合わせしていた彼には、弱いはずのルーがとても恐ろしく感じたみたいだ。

もう、ルーの顔すら見たくないらしい。

それは彼がギルドで買った冊子の中身の内、怪物の弱点は食い入るように見ていたが、それ以外はさっぱりで食指さえ動かなかった。なので、彼は各怪物がどの階によく出没し、どの階では遭遇しにくいなどを知らない彼が、——原因なのであった。

## 二階。

このエリアは水分が抜けきった土の壁で出来ていた。地面はさらさらした砂で、学校のグラウンドとよく似ている。

階段から登ってすぐは広い部屋のように、オレンジ色に光っている花も壁ではなく天井にあった。

キシヤキシヤ！

そんな大部屋で、やっと望んでいたルー以外の怪物と遭遇とした。シュピンネである。体長1メートルぐらいの大きさで、全体的に黒く、クモにそっくりであった。いや、間違いなく八本足のクモだった。地球上では考えられない大きなクモ。こんなのは、誰が見ても気持ちわるく思うだろうが——

「ははっ！」

——彼だけは違った。

本日最初のルー以外の怪物に喜んでいた。

しかし、この光景を少し離れた場所で見っていた冒険者達は、不気味な怪物堂々の第二位を飾るシュピンネを見て笑っていた彼を、変人だと思っていたが。

シュピンネの人氣がない理由は簡単だ。

クモの中でも毒の持つていない種類で、討伐するのも比較的簡単で、体長も他の怪物に比べれば大きくはない。モンスター

だが、それでも人氣がないのは、シュピンネの独特の性質にある。シュピンネの体液は、人になんの影響もないが、金属で鍛えられた武器を錆びやすくする。いくら消耗品であっても、例えば十回使える剣を二回ぐらいしか使わないのは勿体無い。とくに浪費家の冒険者にとっては、シュピンネを殺すだけで次の日の飯が食べれない、と云うほどの問題である。

——つまり、剣の寿命を犠牲にしてまで殺すような存在ではない、モンスターと思われてる怪物であつた。

キシヤシャシャ！

シュピンネが氷雨に襲い掛かつた。彼はシュピンネが現れた事に感動していたので、対応が少し遅れる。その体当たりが“もろ”に体に当たつた。

氷雨は二メートルぐらい飛び、床に転がつた。

「えっ！？」

「冗談きついで、兄ちゃん！」

どんな者でも、この階のシュピンネ程度なら一メートルも飛べばいいほう。いや、殆どの冒険者はシュピンネ程度の攻撃には躲すか防ぐかの対処をする。まず、攻撃があたらないのだ。

だが、氷雨はあつた——

「意外と遅せな」

——かのように見えていただけだったが。

彼はシュピンネの攻撃を、紙一重で顔に直撃する寸前に、後ろに飛んで躲けていたのだ。その際、久しぶりにこんなスウエーに似た躲しかたをしたので、すっかり足の加減を忘れていた。だから、後ろに飛びすぎたのである。

氷雨は立ち上がるとすぐにシュピンネに近づき、柔らかい足の関節の付け根を狙って、手刀で一振り。その後、シュピンネは七本の足で旋回し、氷雨に噛み付こうと体を浮かせたので、体の下に潜り込み甲殻の間を貫き手で突いた。

キシャー——！！！！

——だが、皮膚が固いゆえに、氷雨の貫き手は刺さらなかった。

そればかりか、シュピンネは反撃として氷雨を押しつぶそうとする。おそらくシュピンネの体重は百キロを超えているだろう。氷雨は後ろに飛んでのしかかりをなんとか回避するが、シュピンネのほう一枚上手だった。

立ち上がる時間も無い彼へ、透明の糸を吐いたのだ。さらに粘性も強い糸を。

氷雨は左手を前に出し、糸をもろに食らう。幸いにも、肌に着ると硬くなる性質の糸が巻きついたのは左腕だけだったので、犠牲はそれだけで済んだ。

だが、左手の手首から先は手を軽く握った状態で、固まって完全に動かなくなる。

（開けない……）

氷雨はシュピンネの突進を躲しながら、自身の左手を開こうとしていた。閉じようともする。

だが、皮膚に絡まった途端に硬くなった糸はとれない。右手で糸を触っても氷のようにつるつると滑る。

これが全身だったと思うと、氷雨は身震いした。おそらく全身に絡まると、体が全く動けずシュピンネの養分にされていた、という予想が簡単についたからだ。

彼は試しに反撃してみた。相手の弱点は頭だ。だから頭を執拗に狙った。右手で、足で。

しかし、あたらない。クモは意外と足が速いからであつた。そしてその特性も、クモをモデルとした怪物のシュピンネにもよく活きてる。モンスター

剣や槍なら多少のリスクを侵せば、簡単に勝てる怪物なのだろう。モンスター  
そうギルドで貰った冊子にも書いてあつた。だが、氷雨は素手で装備も紙程度しかない。一撃でも喰らえば、いくら力量<sup>レベル</sup>2のシュピンネでも大怪我に繋がる。

下手な失敗は“死”に繋がる。

戦いは好きだが、勝つてこそその世界だ。負ければ何も残らない。

氷雨はそれをよく“理解”していた為、無闇な行動に出ない。

（で、どうする？ 逃げるか？）

氷雨の攻撃の大半は分厚い鎧に守られて通じないし、右手一本では出来ることが限られる。足技は隙が多く、関節技は人ではないの

でまず通じないだろう。

仲間がいれば、と云う想像もするが、瞬時に自分には合わないだろうと蹴った。

仲間がいらないこそその“体術”なのだ。あらゆる状況で、あらゆる攻撃が出来る。どの場面でも攻撃ができ、反撃ができる。その武器を持たないことで得られる圧倒的な火力こそが、“体術”なのである。——はまれば強い、それが体術の本質だと彼は教えられた。

けれども、こんな美談を語ったところで、絶体絶命なのに変わりはない。

予想外の苦境に冷や汗が出た彼は、酷く思い悩み、自分の頬を右手で全力で殴った。“逃げる”という考えが、少しでも頭に浮かんだからだ。

ここで逃げたらスライムの時の屈辱をもう一度味わうことになる。それだけはなんとかしても避けたかった。

だが、この状況を打破できるほどの“圧倒的な力”は持ち合わせていないし、“最良の作戦”を思いつくほどの頭脳もない。

「あの冒険者弱ええええー！ー！」

「たかだかシュピンネに苦戦してるぜ！」

「というか、糸を喰らう時点でもう駄目だな！」

ギャラリーは氷雨が悪戦苦闘しているのを見て、ここに来るような人間ではないと、十人十色の嘲笑した。

氷雨はまだ思い悩んで、

（俺も老いたな。、また——逃げるといふ屈辱を選択肢の中に入れるなんて）

いなかった。

彼はそんなブーイングなぞ耳にも入れず、すつきりとした顔付きとなっていた。簡単な解決方法に気がつき、これまで思いつめるほど考えた自分が馬鹿らしくなったのだ。

（集中しろ！ 力を抜け。一瞬に全てを！）

そして、次の瞬間予想外の行動に出た。彼はシュピンネとの距離をつめ、糸で固まった拳でを大きく振りかぶり——

ドゴン！！

「はっ！？」

「えっ！？」

——頭へ振り落とした。

シュピンネは鈍器で殴られたような衝撃が奔る。ギャラリーは、想定外の彼の行動に情けない声が出た。

（まだだ！！）

キシヤ！？

氷雨の攻撃は一撃だけでない。

二撃、三撃、と相手が噛み付こうとしても、彼は無視して左手だけで、殴り続けた。

左手は固くなっている。ならば傷つかない筈だ、と彼は酷く簡潔に考えたのだ。

その間に偶然激突したシュピンネの牙は、自分の糸の固さにやられて折れていた。

キシヤキシヤ…… シヤキシヤ…… シヤ……

幾つも幾つも、――殴る。そのパンチは突きだけではない。アツパーやフックなど、様々な技術を臨機応変に駆使し、シュピンネの弱点の一つである頭を集中放火した。

やがて、瘴気となって姿が消えるまで、糸というグローブのついた左手一本で戦い抜いたのだった。

周りのギャラリィは、シュピンネが死んだことによつて糸を消えた氷雨の姿を呆然と見ていた。

まさか左手が固まった逆境を、チャンスだと考えたなんて。拘束具を武器と捉えるなんて。これなら武器を消費しなくて済む。と、観客達は新たなシュピンネの攻略方法に、心を躍らせた。

だが、やはり武器を消費したとしても、武器を持たないのは正気の沙汰ではないな、と記憶の中だけに留めたのだった。

（はあ、ジジイの遺言どおりだぜ）

――俺は弱い。

氷雨は予想外の逆転劇を、冒険者にはちばちと拍手で賛美を送られたからといって、今回の失態を帳消しにするつもりはない。

勝てたはずの敵に苦戦する。それを“弱い”からだと彼は考えた

からだ。

スライムだってそうだ。あれだって“勝てた”のに、臆病風に吹かれて結果——逃げた。“勝てる敵”に“逃げる”のは自分が弱いからなのだ。

これからの上層部はもつと辛く強い敵が現れる。その度に逃げていけば、逃げ癖がつき、自分は今よりもつと弱くなる。

それだけは避けたかった。

弱くなりたくなければ逃げなければいい。強くなりたければ目の前の敵を全て斃せばいい。

そんな単純な考えに辿り着いたので、彼はすっかりしていたのだ。

（誰にも絶対言えねえ……）

だが、もし、祖父にこの事を知られたら、と彼は次の階を目指しながら顔をしかめた。それ程、自分の先程の痴態が知られるのが嫌だったみたいだ。

氷雨はこの時逃げ腰を改善した結果、——また強くなったらしい。

## 第十二話 怪物狩り（後書き）

今回は前までの書き方に戻しました。  
もしご意見や要望があると、気軽に感想、ご評価などをしてください。よろしくお願いいたします。

### 第十三話 浮浪児（前書き）

総合評価が1,800を突破しました。

読者の皆さんには、どれだけ感謝をしても足りないと思います。本当に嬉しいです。本

## 第十三話 浮浪児

次の日の朝。

昨日、あれから氷雨は迷宮を三階まで潜った結果、スライムとは会わずじまいだった。

スライムを専門に狩ってるパーティーがいてその者たちがスライムから出るレアアイテムをほしがり、スライムを乱獲しているのが原因らしい。

そんな風に、昨日の迷宮探索を不完全燃焼に終わらせた彼は、不法都市を歩いていたのだが、

「ねえねえ！ きょうもみちあんない、ないかな？」

彼は、腰ぐらいまでの子供に服を引っ張られていた。

肩までの髪の色は黒で、瞳の色も黒だ。服はぼろぼろの布で作られており、靴は履いていない。顔は汚れてはいるが中性的で、おそらく少年だと氷雨は考えた。

この町ではよく見かけるストリートチルドレンの中の一人でもある。

「はあ、またお前か……」

氷雨はそんな子供に向かって、面倒そうに頭を抱えた。

まだ町の全貌すら把握できていない程の広いこの都市では、目的の場所に辿り着くまでに多大な時間がかかる。なので、彼は行きたい店などがあると、金に対価にこの町で育ったストリートチルドレン達に案内を頼んでいた。

しかし、何回も同じ子供に道案内を頼んでいるとその子に——懐かれてしまったのである。

「うん！ そうだよ！ おにいちゃん、きょうはどうなの？ みちあんないないの？」

「ないない。今日は……道案内は、あつたよ。ったく……」

「ほんと！ やったあ！」

氷雨は喜んでる子供を見て、溜息を吐いた。

この不法都市では、なるべく人間関係を作らないように、と注意していた。人との繋がりとは厄介を生む、と彼は考えたからだ。ただし、日本であれば別だ、厄介は殆ど生まれないだろう。しかし、この世界では力が世を支配する。

もし、氷雨はなんらかの拍子に自分の力が誰かに利用されれば、と思う。

武術は自分の身や誰かを守るためなら利用していいが、闘争の道具には使えない、と姉や祖父からよく教えこまれている。

仮に、それを破ったことが姉に知れば、“説教”がもれなくなる。

（あー、おっかねえ）

彼は姉の説教を思い浮かべて、顔を青白く染めた。

そんなにも恐ろしかったのだろう。彼は姉のことを嫌ってはいないが、説教だけは嫌いと思っているのだ。

（まだ、大丈夫。まだ俺は“むやみな闘争”をしていない。だから――修羅道には堕ちてねえ）

貴族風の男の時も、奴隷とされていた自分や久遠等の身を守る為に戦った。階段に足をかけた時に攻撃をしてきた連中も、自分の身を守る為に戦った。と、どちらも言い訳できる。

なので、“まだ”と安心しきっていた。

「じゃあ、結晶石の換金所まで頼む」

「わかった！　こっちだよ！」

「おい、こら、走るなって……」

氷雨は子供に手を引っ張られながら、徐々に駆け足へとなるのだった。

彼が歩いているこの町では、多種多様の人種が存在しており統一感はない。肌も、髪も、服も、はたまた信仰する神さえ、人によって大きく違う。

だから、今、氷雨と子供の二人で歩いても、兄弟に見えたであらう。

「ここだよ！」

「ああ、ありがとな。ほら、報酬だ」

「やった！　ありがとう！　じゃあおにいちゃん、またね！」

「そうだな、じゃあな」

子供は道案内が終わると、氷雨から銅貨を受け取り、スキップしながら去っていった。

（やっぱしガキだな）

彼は流し目でその子供を評価しながら、目的地であった換金所へ入って行く。

ギーボタン。

扉を開くと、木製独特の嫌な音がした。

中は簡素な薬草屋だった。カウンターの下の棚に数種類の薬草が、数束置いてある。客は0で店員は一人。全身に黒い外套を包んだ老人であった。

「よく来たねえ。用はなにかえ？」

「結晶石。これだけで、分かるだろ？」

「ほう、今時、“そっち”とは珍しいのう！」

フードで顔の見えない老婆は、しゃがれた声で驚く。近頃は犯罪の目を避けて、この換金所に結晶石を売る者は少ないからであった。それは、結晶石の買取はギルドでも行っているが、諸経費として二割を、さらに税金として二割を取られる。つまり合計四割を取られるため、値段が幾分か安い。

その点、息がかかっていない“闇の換金所”は、諸経費の二割を取られるだけなので、冒険者としては儲かる。

だが、そのギルドの監視の目が、最近厳しくなった。

この“不法都市”では他の町に比べても、この程度の不正は当然であつたが、それを赦すとギルドの利益が少なくなる。だから近頃は、ギルドに一月の間に力量<sup>レベル</sup>に応じた一定量の結晶石を収めなければならぬ、という決まりができた。

もし、これを破れば永久<sup>とこしえ</sup>の迷宮<sup>ダンジョン</sup>への探索権が三月の間、立ち入れない事になる。

そんな事になったら冒険者にとっては死活問題だ。だから、冒険者は余計な不確定要素を増やしたくないので、闇の換金所に結晶石を売らなくなったのだった。

「だろう？　で、これくらいだつたらいくらになる？」

氷雨は大小様々な結晶石をカウンターの上に置いた。

老婆はそれを小さなルーペで、じつくりと目を見開いて、吟味している。

「これはのう、12000……いや13000じゃな。ギルドじゃつたら約10000ギルほどで売れるじゃろう。相場によつて500ぐらいは変わるじゃろうが、大きくは動かん。お前さんこれは売るのがえ？」

「ああ、今すぐ売ってくれ。できれば金もすぐ頼む。」

「まだ若いのに急ぐんじゃな。じゃが、これだけ稼ぐんじゃ。力量<sup>レベル</sup>はさぞかし高いんじやろ？　いいのか？　こんな“闇の換金所”を利用して目を付けられないんじやろうな？」

「けっ、店員が客の内情に突っ込むな」

氷雨がここまでの結晶石を持っているのは、あの四人の冒険者を殺した時に、持っていた結晶石を奪っていたからである。

その時は結晶石を宝石か何かと勘違いしており、売れると思って盗っていたのだ。

自分の結晶石だけだったら、1000もいかなだろう。それ程、男達が持っていた結晶石と氷雨が持っていた結晶石とは、雲泥の差があった。

「ふんっ、ここをマークされてるかどうか聞いただけじゃ。万が一にもお主がマークされていたら……おー怖い怖い」

「どんな恐怖かは知れねえが、安心しろ。“初心者”をマークするほど、ギルドも暇じゃないだろ？」

「そうじゃな。ギルドはそんな暇じゃ……！！じゃあ、お主は……いや、やはり、客の内情に首を突っ込むのはいかな。これが金じゃ、さっさと消えておくれ」

「分かってるじゃねえか。もし“偶然”結晶石を手に入れたらまた来るよ」

氷雨は巾着の中に入った銀貨の枚数を確認して、懐へ入れる。

「お前さん、“偶然”はたまにしかないから“偶然”なんじゃぞ。その意味を分かっておるのか？」

「ああ、たっぷりと……な」

ギーバツタン。

（化かされたか？）

老婆は店から出て行った氷雨を見て、おかしい気分になった。

実は老婆も氷雨から、“ある程度”お金を誤魔化していたのだ。それでもギルドの買取金額よりかは高いのだが、詳しい相場を知らない彼を不思議に思ったのである。

もし知っていれば、何か反論していたであろう。

その辺りが、老婆にとってはアンバランスで不可解であった。詳しい結晶石の相場を知らないのに、こういう裏の商売は知っている。彼には“何か”が欠けていると、老婆は思ったのであった。

（やっぱしガキに聞いててよかったな。あいつはこの町を“よく”知っている）

氷雨は街中を歩いていた。

彼はあまり記憶力が良くないので、二日の間に手に入れた情報で興味がないのは忘れていたが、不思議に思っていたことはよく頭に入っていた。

その中の説明の一つに、結晶石は“ギルド”でしか売れない。月に一定以上ギルドへ売らなければいけない。とあった。

何故か不思議に思った。

ついこの前、学校の先生の話に、独占禁止法という法律が出たか

らだろう。何故、結晶石がギルドで独占的に商売しているのか、と。

そう思考すると、ギルドが儲かるからと思った。

儲かるから独占する。普通のことだ。ならば、と考えると、どこかで不正をする者がいるとも思った。

だから、念の為、あのストリートチルドレンに聞いてみたのだ。この町のことを“よく”知っているあの子に。

氷雨が予想は正解だったのだ。

（儲かった、儲かった）

そのため喜びながら町を歩いていると、あの子供が遠くの前方にいた。

「あっ、おにいちゃんだ！ カイにい、あのひとだよ！」

「本当か？ 本当に本当か！」

「うん！ 本当に本当に本当だよ」

「よっしゃああああ！ ユウ、走るぞ！」

「わかった！」

いや、あの子供だけではなく、“一人”増えて二人になっていた。そして、間違いなく氷雨を指差して喜んでいる。

「はあ……」

彼はこちらへと走ってくる浮浪児二人を見て、深い溜息を吐くのだった。

二人が氷雨に体当たりしようとした数秒後、

「おにいちゃん、またあつたね！」

「アニキ、少しでいいから話を聞いてくれ！」

氷雨は既にややこしくなったこの現実から、即刻にでも逃げ出さなかった。

その元凶は二人。

一人は朝に道案内を頼んだ子供。

もう一人は、始めて見る顔であった。朝に会った子供と同じく短い黒髪と黒目、服もやはりぼろぼろの服で、靴は履いてない。肌は焼けているのか少し黒く、顔は泥で汚れておりどこか生意気そうである。身長はもう一人の子より少し高い。

「——じゃあな、二度と出会わないことを祈るから」

氷雨は数秒前、二人の子供が腹部に突撃してきて、それを避けた。二人の子供は勢いを殺しきれず、地面にこける。

そのせいなのか、町の皆から注目されていることに気づいている。その怪訝な視線は鋭く彼の心に刺さっており、子供達をスルーしてその場から手だけ振って去ろうとしていた。

「アニキ、待ってくれよ！」

「まってよ、おにいちゃん！」

だが、妙にテンションが高い二人にマントを掴まれ、引き止めら

れた。

「アニキ！ オレ達から逃げる理由がどこにあるっていうんだよ？」

「そつだよ、おにいちゃん！　なんでにげるの？」

氷雨は振り返り二人の顔をじっくりと見た。

二人ともぱっちり二重で、肌は土で汚れてるが血色も悪くはない。あざも見かけないし、大きな傷跡も見かけない。

服だけ変えたら、普通のどこにでもいそうな憎たらしい笑顔の悪ガキである。

「なんでつて？　騒がしかつたら普通は逃げるだろ」

彼は低いテンションのまま言った。お経のように、どこまでも起伏のない声質である。ちなみに騒がしいとは言葉のあやだ。実際は、面倒事に巻き込まれそうだったので逃げたのだ。

「わたしたちのどこがさわがしいの？」

「そつだぜ、アニキ！　逃げずにオレの話だけでも聞いてくれよ！　もしそれで、納得できなかったらオレ達は帰るよ！　だから！　だから、オレの話だけでも聞いてくれよー」

一方の子供達は、太陽のように明るい。言葉の一つ一つに様々な感情を乗せ、一喜一憂する姿は、世間の汚れを何も知らない子供だからこそできることだろう。

だが、氷雨はそんな子供達の姿にも屈せず、ただ断る。

「嫌だよ、面倒な」

「ええ〜なんでだよ〜話だけ、話だけでいいからさあ。頼むよう」

「おにいちゃん〜おねがい〜カイにいのはなしだけでもきいてよ〜」

「他の奴に頼めよ。別に俺じゃなくてもいいんだろ？」

「いや、アニキがいいんだ！ オレはアニキって決めたんだよ！」

「わたしもわたしも！ おにいちゃんってきめたんだ！」

彼は急遽現れた我侭な子供らしい子供の二人に、頭を抱えた。

氷雨は聖人君子というわけではないが、無抵抗で弱い子供を殴る趣味はないので、殴ることもできない。追い返しても、凶太そうなの二人だ。いつまでもしつこく追い回すだろう。

逃げてても無駄だろう、と氷雨は思う。今泊まっている宿屋は、二人の内の一人に聞いた。

待ち伏せという案は子供でも思いつくだろうし、宿屋を変えてもこの町を知り尽くした二人にはいずれ見つかるであろう。

「はあ、五分だ。五分だけだ。五分だけなら、話を聞いてやる。それでいいだろ？」

だから、話だけ聞くことにしたのだ。話だけ聞いて、追い返すと彼は子供だからと、どこか心の中で油断していたのだろう。子供達の要求を、あっさりと飲んでしまった。

「やった！ やったぞユウ！ 話だけ聞いてもらえればこっちのもんだぜ！」

「やったー！ やったー！ さっすがカイにい！ おしたらなんとかなるもんなんだね！」

「だろ？」

「だね！」

（俺は選択を間違えたか？）

氷雨は、子供達の手のひらで踊らせたような会話に、なんだか憂鬱な気分となった。

一筋縄ではいかない人間関係は作らないと、どこか心の中で決めていたはずなのに、一番複雑で面倒な人間関係を生んでしまった。

学校にいた頃は、もっと楽であった。

彼の友達にこんな自分本位な人間はいなかったし、皆空気を呼んでくれる。本音で語る時もあれば、だらだらと語る時もあった。

思い返せば、あれもかけがいのない日々だったのだろう。あの時はあのつまらない日々で退屈していたが、今の生活から考えるとあの平凡な日常もどこか新鮮でいいと思える。

少し、あの普段に、帰りたくなつた氷雨であった。

入り組んだ路地裏。氷雨は必ず迷いそうである。

氷雨は二人に連れられ、木造の家と家の間を通つた先にある古い

平屋に入った。床は土の地面が剥き出しのままで、家具は小さな机しかない。

隠れ家のような家であった。

「へっへ〜ん、アニキ、いいだろ〜ここはオレが見つけたんだぜ！」

「カイにいい！ わたしもさがしたんだよ！ かつてにカイにいいのでがらにしないでよ！」

「見つけたのはオレだぜ、ユウ？ 悔しいのなら、空き家の一つや二つ見つけてみるよ？ まあ、簡単に見つかるといいけどな」

「う〜！ カイにいい、ぜ〜たっいわたしだって、もっといいあきや、みつけてやるんだから！」

「へっ！ 待ってるぜ！」

「うっ〜〜！」

二人は仲良く言い争っていた。床すらない床に座って。どうやらこの場所は、見つけたから勝手に居座っているらしい。

——やはり図太い子供たちだ。

氷雨も二人に見習って床に胡坐をかき、一言した。

「——帰っていいか？」

「駄目だ！」

「だめだよ！」

「はあ、じゃあ、話を先に進めろよ」

彼は保育園の先生の大変さが、少し分かったような気がした。そして、自分には向いてないとも思う。二人だけで。まだ十分と経ってなくとも、こんなにぞっと疲れるのに、先生は一日中何十人の園児と付き合う。

この時、保育園の先生を尊敬した氷雨であつた。

「えっと、じゃあ、まずは自己紹介からだな！ オレはカイト！ カイトだ！ 気軽にカイトと呼んでくれ！ で、こっちは……」

二人は氷雨を引き止めるために、まずは自己紹介を始めた。子供改め、背の高いほうであるカイトは、隣の子を手のひらで指した。カイトは髪が短く、子供特有のにやつき顔が特徴だ。

「わたしはユウだよ！ ユウってよんで！ で、おにいちゃんの名えはなに？」

ユウとは、氷雨に何度も道案内をしてくれた子供のことである。髪はカイトより少し長い肩程度。二人とも顔がよく似ているが、こちらは、はにかんでいる笑顔が特徴である。

「氷雨、どうしても呼んでくれ」

氷雨は常識知らずでない。自己紹介を相手に行われたら、こちらも自己紹介をする。

素気ない態度であつたが、カイトとユウの二人は氷雨の挨拶だけで満面の笑みとなった。普通の態度で返されたのがよっぽど嬉しかったのだろつ。

ここは不法都市だ。

名など、不用意には教えない。もし、悪人に教えたら最後、借金の肩代わりや保証人、それだけでなく様々な犯罪の濡れ衣を着せられることなど、常識であるからだ。

だから、名を素直に明かす氷雨を、二人は善人だと思ったのだ。彼等はまだ子供なので、それが偽名の可能性も疑わない。素直に氷雨の言葉を受け入れたのだ。その辺りは、まだ二人とも子供であった。

「アニキ、お願いがあるんだ！」

「おにいちゃん、カイにいがおねがいがあるの！」

氷雨は本題に入ろうかとする二人を、一旦ここで切った。先程から、喉にずっと引つ掛かっていたことがあるのだ。

「そのお願いの前に、俺のことを兄と呼ぶの止めてくれ。俺はお前達の兄じゃないし、そんなガラでもない」

兄である。

彼に生来弟や妹はいない。ましてや、弟分などもない。そんな氷雨は、兄という呼称に慣れてないのだ。

「ええー話の腰を折るなよ」

「おるなよ」

「それにアニキのどこが嫌なんだ？ アニキはオレより年上なんだから、やっぱりアニキだろう？」

「おにいちゃんはあるときから、おにいちゃんなんだよ？ わたしはずっとそう呼んでたし、これからもそうよぶんだよ！」

「……分かったよ。ああ、分かった。それでいいよ。で、本題は？」

氷雨は投げやりになった。

彼は言葉で相手を説得できるほど饒舌ではないし、子供の相手に手馴れてるわけでもないからである。

そして、カイトは氷雨の言葉を耳に入れると、一度言葉が詰まり、真剣な顔になってから、——告げた。

「……いきなりだけど——<sup>ダンジョン</sup>迷宮に……<sup>ダンジョン</sup>迷宮に連れて行ってほしいんだ……」

「はっ？」

「だから、<sup>ダンジョン</sup>迷宮だよ。オレを<sup>ダンジョン</sup>迷宮に、連れて行ってほしいんだよ！」

氷雨はカイトの話をもう一度聞き直しそうになった。

武器も持たず回復薬も携えない彼が言える話ではないが、<sup>ダンジョン</sup>迷宮とは“死”が付き纏う場所だ。少しの気の緩みが破滅を招き、少しの油断が終焉を招く。

だから、確認をした。

「本気で言ってるのか？」

「うん……アニキにはこんなガキがって思つかもしれないけど、——本気だよ」

「死ぬ覚悟はあるのか？」

「うん、——目的の為に死ねる」

「あそこは、ガキが粹がつていられる場所じゃねえぞ？」

「うん、——分かってる。だって想像すると、こんなに体が言う事を聞かないんだぜ？ 十分……十分“怖さ”は分かってる」

カイトの手はぶるぶると振動していた。

「へえ……！！」

死ぬ気の少年。やる気と覚悟は見る限り十分だ。足りないのは年齢ぐらいだろう。

氷雨は目の前に座る少年を、カイトを、もう一度刮目する。やはり、体が怖さで震えている。ただ死にたいわけではないらしい。

——目的の為に、わざわざ危険を冒すのだ。

氷雨にそれは、理解できない気持ちでもない。

彼も戦いという目的があるから、死という代価を支払える。もし、戦いという目的がなかったら、戦場にすら立てないだろう。

「カイにいい！ ほんきな？ あそこいきけんは、よくきいてるでしょ？ それでもほんとうにいくの？ しんでもいいの？ しんだら……わたし、ひとりぼっちになっちゃうんだよ？」

そのカイトの決意に、一人反論した。

ユウだ。ユウが、目に涙を浮かべながら反論したのだ。ユウは力

イトが氷雨に迷宮ダンジョンの事を頼むとは思わなかった。

もし、知ってたら紹介すらしなかっただろう。

氷雨には、兄弟か友達かそれとも別の何か、か。詳しい二人の關係は知らないが、深いのだろう。

それだけの深い絆が、この短い間にも彼は見えた。

「ユウも知ってるだろ？ たった数ヶ月さあ、急にここで生きるこ  
とになったけど、オレ達のような子供は、死んでいく人が多い。最  
近はお金も減ってきた。たまにアニキみたいに、約束を守ってくれ  
る人もいるけど……だいたいの方は道案内などをして払わない。  
下手すれば上手いように言いくるめられて、どこかに誘拐される。  
やっぱりこれは、生きるためには……お金を貰うためには……しか  
たないんだって！」

カイトは、顔を下に向けユウに話している。

彼らのこれまでの生活は悲惨である。

孤児であるために、自分でお金を稼がなければいけない。でも、  
子供の自分達に十分なほど稼げるような仕事はない。

助けてくれる大人もいない。カイトもユウも、大人が自分達を見  
ても、どこか別の裏にある“金”を見てるのが、なんとなくだが  
分かった。

いや、分からなければ生きていけなかった。

孤児達が傷を舐めあうような集団は、この町にもある。だが、そ  
れにカイトとユウは馴染めなかった。万引きやスリを生きるために、  
平然と行つ彼らと価値観が合わなかったこともある。だが、その最  
大の理由は弱い者の取り分が少ないのだ。

つまりユウの食事などが少ない。そこにカイトは納得できなかつ

たのだ。

だから、二人はその集団の時に知った道案内や小金稼ぎを知っていたし、その集団から少しだけ盗んだお金のおかげでこれまで生き延びてきた。

だが、もう限界だった。もう二人は最低限の生活さえできないほど、貧しいのだ。

それは一人で下した決断だ。

たった少し、ユウより早く生まれたばかりに、決めた道。二人の年齢差に差はあまりない。おそらくカイトは6、7歳だろうと、ユウはその一歳年下とだろうと、氷雨は見ていた。

だが、カイトはどこかで年上の“自覚”はあった。年下のユウを守らなければいけないという、責任感と共に。

「で、でも、いまでもなんとかたべてけるでしょ？　じゃあそれで、それだけで、じゅうぶんだよ！　わ、わざわざカイにいが……」

ユウは泣きながら何とかカイトを説得しようとするが、

「分かってるんだよ！　ユウが我慢してるって！　食べるのを我慢してるって！　それがオレには……とても悔しいんだよ！　堪らないんだよ！」

カイトがこちらも泣きながら、激高した。

今まで、ずっと笑顔でいたカイト。ユウはその姿しか見たことがなかった。まさか、ここまで思いつめていたとは、考えられなかったのだ。

「で、でもお、だからってえ」

ユウもまだ子供だ。

いつもの取り繕ったカイトの表面上が、見えなかったのである。その裏に、どんな感情が封じられていたのかを。

だから、今、カイトのその感情が爆発したのだ。溜まり溜まった激情が。

「ユウ、分かってくれ。オレは死に行くわけではない。生きるために“命”を賭けるんだ！ 絶対に勝つ！ 負けないから安心してくれ！」

「い、いやだよ。だって、カイには、まだわたしとおなじことだし……ぜったいこころされるって……」

ユウはカイトに縋りながら泣いている。

カイトはそのユウの姿に、心が痛くなる。

「で、でもな……悪いユウ。——オレは決めたんだ」

でも、しょうがない、とカイトは決めた。いくらユウが引き止めても、もう自分は止まらない。もう、自分は動き始めたのだ。

カイトは服の裾を掴むユウの手をそつと払い、

「ま、ま、っでようガイ、に、い、」

「アニキ、行こうよ」

氷雨のもとに歩いた。

ユウはまだ地面に蹲って泣いている。

カイトは涙を手で乱暴に拭いて、赤くなった目を氷雨に向けた。

そして氷雨は――

「――嫌だよ。勝手に決めるな。そもそも俺は了承したとも言っていない」

――カイトに厳しく言った。

「えっ、でも、オレに色々聞いてたじゃん！」

カイトは急にうるたえ始めた。目に再び涙を浮かべる。  
ユウは嗚咽だけで、すでに泣き止んでおり事の結末を見届けていた。

「聞いたただけ。一度でも言ったか？ お前を迷宮ダンジョンに連れて行くって？」

「い、いや、言ってないけどさ！ でもさ！ でもさ！ この流れだったら普通連れてくたろ？」

「でも流れも無いんだよ。――これは俺が決めることだ。お前の決断と一緒にな」

「で、でもさ！ ぞれならオレの……オレの……」

カイトは一度枯れたはずの涙を、もう一度流し始めた。  
ずるい大人に泣いたのだ。ずるい氷雨に泣いたのだ。

まさかユウに全てを言い、全ての覚悟をしたら、氷雨に全てを蹴

られた。その無力感に酷く脱力して、膝を床につけている。

「決断は無駄だったな」

カイトは涙をぎゅっと拭き、唇を噛んでから、氷雨の胸を両手で叩く。

今度は泣き声ではない。

普通の声であった。

「なんでだよ。なんで駄目なんだよ！ オレの気持ちは分かるだろ？」

「ああ」

「じゃあさ、オレの覚悟も分かるだろ？」

「ああ」

「じゃあさ、じゃあさ、な<sup>ん</sup>で、だめ<sup>な</sup>ん<sup>だ</sup>よ<sup>〜</sup>」

カイトは氷雨の胸を弱い力で叩きながら、また泣き始めた。

彼はカイトの肩を持ち、強引に少年を引き離した。

「世の中はな、義理や人情だけで動いてねえんだよ。世の中の大体はな、メリットとデメリットで動いているんだよ。お前がどれだけの覚悟をしようが、どれだけの決意をしようがな、頼む人間がNOと言ったらそれで、それだけで、お終いなんだ。——お前が思っている以上に、世の中は非常なんだよ——」

氷雨は冷酷に言い放った。

「じゃあ、ざ、オレ、ばどう、じだら、い、い、ん、だよ、」

「——強くなればいいんだよ。目の前にある壁を乗り越えるのではなく、全てを粉碎できるような“力”を持てば、誰かに頼らなくても生きていける“力”を持てば、——きつと世界は変わる」

これは氷雨が、祖父にも云われた言葉だった。

両親が死んで、塞ぎこんでた氷雨を救った言葉でもある。あの時は、氷雨も親がいないことで苛められたりして、余計落ち込んでいた。

その時に、祖父からこう云われた。

——強くなれ、と。儂がその方法を教えてやる、と。

その言葉がきっかけになり、武術を習い始めた。

やがて、彼は考える。

いつからだろうか。“力”が目的ではなく、“戦い”が目的になったのは、と。

——そして、そこが氷雨と雪の違いでもあった。雪は目的が変わらずに、“今”も生きている。

「でも、ざ、オレ、は——」

ここで出そうになった鼻水を止め、涙を拭った。

「——オレは弱いんだよ、っ！ もう、もう、どうしようもないんだ！」

「カイにい……」

「……」

ユウはそつと、地面に手と両膝をついたカイトを抱きしめた。  
数秒間ずっとそうしてる。

お互いを抱きしめて、生きてることを確認するように。二人が二人のために泣いて、悲しんで、また繋がりがあった。

氷雨はその姿をずっと見ていた。

「——ところで、俺はメリットの無い事はしねえが、メリットのあ  
る事はする。誰かいねえかなあ？ 結晶石を拾ってくれるだけの人  
間は。別に戦わなくていいし、俺が死なない限り命の危険もない。  
ただ、結晶石を拾ってくれるだけの人間は、——どこかにいねえか  
なあ？」

「えっ？」

ここで、氷雨に驚愕したような瞳を向ける二人に、彼はニヤリと  
笑った。

「報酬も出す。もしもいらぬ武器や防具があつたら、いくつかは  
くれてやる。食事も腹一杯食わせてやる。どうだ？ 俺の為に利用  
され見る気はないか？」

真っ直ぐに氷雨はカイトとユウを見つめた。  
つくづく思っていたことだ。

自分は迷宮<sup>ダンジョン</sup>を舐めている。

前回3階までしか行けなかったことが、その証明である。本来ならあの日、10階まで直進するつもりだった。

怪物<sup>モンスター</sup>の強さで言えば、弱点の情報も生態の情報も得たので、何とか勝てると思っている。

だが、結晶石を一々拾う手間と、それを大量に持って怪物<sup>モンスター</sup>と戦う煩わしさ。その二つで三階までしか行けなかった。

だから、誰かを雇おうとは薄々考えていた。

結晶石を盗まないような善人で、自分の獲物を奪わない人間。そして、背後を安心でき自分を信頼してくれる人間。

もし、これらの条件が揃って、その人物をパーティーでも共に戦う仲間でもないが、一種のサポーターのような関係を持てたらな、と淡い考えを持っていた。

だが、この町は不法都市だ。見つかるわけが無い、と想像していた。

しかし、ぴったりの人材が丁度今、見つかったのだ。

より戦いやすい環境を、より戦える環境を、整えてくれる最良の人物が。

（あいつらの仲間に入るのは“デメリット”が多かった。でも、こいつらを仲間にするのはメリットが大きい。だから――）

それに、氷雨は数日前の久遠との会話を思い出した。

皆で、もとの世界へと帰る手助けをしてくれないか、という言葉  
を思い出していたのだ。

あの時、彼の提案に乗らなかったのは、デメリットが多かった

から。あくまで、手助け。立場はあちらの方が上で、氷雨は自由な立ち振る舞いができないからだ。

それにきつと、むやみやたらに喧嘩を買うのも駄目だろう。

きつと、一人で戦いたい敵でも、多人数で戦うことを強いられるだろう。

きつと、怪我をしている時は絶対安静、と戦いに行けないだろう。これらの理由から、氷雨は彼の案を断ったのだ。もちろん、あの空気は自分に居心地が悪い、との思いもあった。

だが、反対にこの二人——カイトとユウなら違う。メリットが多かった。

デメリットとしては、食費が多少かさむぐらいだ。

だがメリットとして、主導権を握っているのは、やっぱり氷雨。彼がイニシアチブを握っているのだから、きつと多少無茶な行動をしても許される。それに冒険で一番煩わしい結晶石も拾ってくれる。これらの理由から、氷雨は彼らを従業員として雇うことを決めたのだ。

「グスンっ、それって……オレでも……できるかな？」

カイトは今日何度目かになる涙を拭きながら、氷雨に言った。そこには、憎たらしい悪ガキの顔ではなく、子供らしく笑う顔があった。

「大歓迎だ。その代わりいっぱい働いてもらうぞ？」

「うんっ！」

「ねえ、おにいちゃん……それはわたしも……できる？」

ここで、ユウが覚悟をしたような顔で、質問した。カイトだけに負担をかけないように、と思ったのだ。

氷雨はその目をしかと見た。

「ユウッ！ お前は危険に身を預けなくていいんだぜ？ オレが、オレが、頑張るから！」

少年にとって、ユウは宝である。

どこまでも守りたい、とユウを大切にカイトは思っていたのだ。

「ううん！ いいの！ カイにだけに、むりはさせないから！  
どうかな？ おにいちゃん、わたしもでかいじょうぶ？」

「いいさ。どうせ、戦うのは俺だ。一人増えたところで、特に変わりはしない。だが、働くのは大変だぞ？」

「わかった！」

「アニキはやっぱいい人だったぜ！ オレの目に狂いは無かった！」

こうして、氷雨がより快適に“戦うためのサポーター”ができた。彼は保育園の先生の大変さより、“戦い”を優先したのである。

（俺は“弱い”んだ。もっと戦うには、もっと強くなるしかない。

——もっと、もっと……）

彼は強くなるためには、なんでも利用しようと考えている。そのため二人だ。

氷雨にとってカイトとユウは、結晶石専門の荷物運びである。それに二人はこの町の情報をふんだんに持っている。

そこも彼等をパートナーの関係に入れた理由の一つであった。

——こうして、氷雨にとっては利用する“仲間”が始めて出来たのであった。

### 第十三話 浮浪児（後書き）

特に反論も無いようなので、今回は結晶石と浮浪児の二つを纏めてみました、

ちなみに、読者も声もあつて、氷雨がカイトとユウを仲間にしたエピソードも増やしております。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## 第十四話 VS 名持ち

カイトとユウが部屋の中を駆け回りながら喜んでいた。それを氷雨は胡坐をかきながら、ずっと見ている。

だが、そんな兄妹二人の微笑ましい姿に、水を差す者が現れた。

「おい！ お前ら！ そんな喜んでるってことは、——金ができたんだろっな？」

男であつた。

三人がいる家の入り口には、分厚い鎧の上から黒色のマントで覆っている巨漢の男がいたのだ。

服の隙間から見える筋肉はゴムのような弾力があり、大木のように太い。片方の耳は千切れて無くて、鼻は潰れており、顔には傷が沢山あつた。

そんな男が手に持っているのは、両刃の斧である。斧は120センチ程度の長さで、刃はとても分厚い。

まるで敵を真つ二つにするためだけに生まれたような、そんな武器であつた。

「い、いやっ！ あの……まだ……まだです……」

その斧の持つている男に、カイトが頭を垂うつれた。唇をぐつと噛み、服を両手でぐつと掴みながら。

カイトが迷宮ダンジョンに行こうとした理由にお金が必要とあるが、そのお金が無くなった原因は、この男なのだ。この家に住んでいる場所代として、金を巻き上げられ、貧困生活を送っていたのである。

もし、この男がいなければ、カイトとユウは貧乏ではあつたが、

食べられないほどの生活ではなかっただろう。

「ふん、前に言ったよな！ 金ができなかったらこの嬢ちゃんを貰ってくつて？ いいのか？ 本当に売り捌くぞー！」

斧を持っている男は、すぐ隣で壁に体重を預けていた氷雨にも気づかず、子供二人を怒鳴りつけた。

「すつ！ すいません！ 待って下さい！ お金は“必ず”次回用意します！ だから……どうか……どうか……」

カイトは男に対し、すぐに土下座をする。がむしゃらに謝っていたのだ。

そんな男はそんなカイトのすぐ前にまで行き、腰を下ろした。顔は醜くて敵ついが、どこか温和そうな雰囲気も感じる。

「俺もな、孤児のお前が大変なことは分かってる。だがな、俺にもコミュニティの面子があるんだよ。知ってるよな？」

「はい……」

「たしかお前、前回は前回も前々回も払えてない。覚えてるな？」

「はい……」

「だが、俺もお前達が金を納めようと、努力していることは知っている。そこは認めるつもりだ」

「はい……」

カイトは男の言葉に、ひたすらオウム返しのように答えていた。否、それしか、できないのであった。

逆らったら殺される。

言い訳したら殺される。

口答えしたら殺される。

そんな場面を、カイトは短い間に幾度となく裏の町で目撃した。この男に逆らった貧民達は、皆、あの斧で真つ二つになつてゐるのだ。少年はそんな事前学習があつたからこそ、自分にとっての適切な対応をしているのだ。

「俺も鬼じゃねえ。だが、そう何度も待つてると、上から色々と言われるんだ。裏にも詳しいお前なら分かるだろ？」

「はい……」

斧を地面に置いたまま、男はカイトを怒るわけでもなく、遠まわしにつらいのは一緒なんだ、と言いたいのである。

そして、カイトとユウに背後を向き、最後に二人に言い残した。

「次だ。次が最後だ。次、無かつたら、嬢ちゃんを貰つてく。いいな？」

「はい……」

斧の男は、それだけで家から去ろう——とした。しかし、とある人物が目映たのである。

——氷雨で、あつた。

ぼろい身の上からすれば、成長した孤児ともとれる。それはマンが日に日にぼろくなつていた。既に長年使つたような哀愁が、マ

ントから滲み出ていたのだ。

「おい、お前は——誰だ？」

だが、どこか勘に触った。

視覚でも聴覚でもない男の第六感が、氷雨の存在を“異常”と感じ、  
“危険”と感じたのだ。

だから、目で威嚇し、肩にかけた斧の握り手に力が入った。腰も  
少し低くなる。男は戦闘の準備を、自然としたのである。

「けっ、しがない冒険者だよ」

「嘘——」

男は否定しようとした。

だがふと考えて、冒険者としては“常識”である相手の力量を視  
てみた。その力量は5。脅威などとは程遠い力量だ。だからあの“  
虫の知らせ”はたんなる錯覚だったと、男は結論づけた。

「——いや、俺の勘違いだった。すまん。怒鳴って……」

「いいさ、“どうせ勘違い”だったんだろ？」

男が素直に謝っても、氷雨は不適に微笑むばかり。

ところで、男は氷雨とカイトの共通点を不思議に思った。孤児と  
いう繋がりだけなら、まずこのカイトとユウとは関わらないと思う  
からだ。

何故なら、孤児達はこの二人——カイトとユウに苦汁を飲まされ  
ている。大切な金を取られたからだ。そんな人物と仲いいことが

知れば、グループからは敬遠され最悪袋叩きにあう“筈”だ。  
ならば次に、二人と氷雨が、兄弟……という可能性を考えたが、  
ないと思った。ましてや、親子など論外だ。

何故なら、この三人が兄弟や親子など大切な人物なら、先程のユウを売ると言った時、なんらかの反応が合ったはずだ。しかし、氷雨は声すら出さなかった。

「おい、カイト、もしかしてお前の“金のアテ”はこいつか？」

だったら、と男は思った。

数分前、カイトは“金のアテ”がある、と言った。浮浪児に“金のアテ”など、そうそう出来るものではない。

身売りか、仲間を売るか、それとも盗みか、これらに共通するのはどれも確実性は無く、危険な手段ばかりである。

また、カイトがユウを溺愛してるのは男も知ってる。そんなカイトがユウを売るわけない。売れるような友達もいなければ、盗みの才能もない。

だったら、“彼”が“アテ”なのではないか、と男は思ったのだ。ちよつとした予感——でもあった。

「はい……そうです。この人……いえ、アニキが迷宮で、<sup>ダンジョン</sup>結晶石を拾うだけの仕事をしないか？　って言うてくれたんです」

「……いや、カイト、お前もしかして本気で言ってるのか？」

斧を持っていた男は、カイトの“妄言”に笑った。

冒険者として稼ぎがよくなるのは、大体30階層以下に潜れる力<sup>ベル</sup>量30以上だ。それ以下だと冒険者の間でも下位で、一寸先が闇——程度の暮らししかできない。

つまり、5という氷雨の力量<sup>レベル</sup>だと、誰かを雇うなど、夢のまた夢なのであった。

「はい……」

「こんな力量<sup>レベル</sup>が10にも満たないペーパーの初心者が、お前達に満足な稼ぎをくれると、思うのか？　滑稽だ。非常に滑稽だな」

「えっ！？　アニキがつ、10以下っ！？」

「ああ、さつき親切心から俺が調べた。どうする他に“金のあて”はあるのか？」

「いや……ありません……」

「じゃあ、いいよな？　待っても無駄だと俺が判断する」

男はユウの腕を、強引に掴んだ。

ユウはじたばたと暴れていた。それを強引に男は引っ張った。

「す、すいませんっ！？　すいません！！　ユウだけは……ユウだけは……」

カイトの頭はこんがらがっていた。

氷雨が10以下で、急に斧を持っている男がユウを売り出すと言い始めた。もう混乱につぐ、混乱で意味が分からない。

「カイにい！　おにいちゃん！」

ユウは男に掴まれた腕の痛みของあまりに叫んでいる。

カイトは男のあまりの急転に、動くことさえできなかった。どうすればいいか、どんな判断を下せばいいか、全く見当がつかないのだ。

「ちつ、お前は頭のいい餓鬼とは思ってたが、所詮わりのいい話で騙される餓鬼だったとはな!!」

男はユウを強引に引っ張ったまま、片膝を立てている氷雨の横を通ろうとしていた。

だが、そうは彼の問屋がおろさない。

「——おい、図体だけの馬鹿が、うちの従業員を何処に連れて行くつもりだ？」

ことあるうことか、氷雨は男に喧嘩を売ったのだ。

「アニキッ！」

「おにいちゃんっ！」

「おい、てめえ、誰に口聞いてると思ってんだ？ 冒険者の素人の小僧が、溜口で話せるような存在じゃねえんだよ。俺はよお」

子供達は氷雨の名を呼び、男はドスの効いた声で氷雨を嗜めた。だが、氷雨の態度は相変わらず飄々として変わらない。立つこともなく、攻撃の構えをするのでもない。ただ、男を睨んでいたのだ。

「けつ、ウドの太木ごときが大層なこと言いやる」

「おい、こら、舐めてんのかああ!？」

「きゃっ!？」

男はユウをカイトの方へ投げ、両手を斧へかけた。今にも氷雨へ斬りかかりそうな勢いである。

氷雨の狙い通りの展開だ。わざと挑発をし、男を怒らせる。この斧の持った強そうな男と、“戦いたい”がゆえの策であった。

ところでカイトは、ユウの体を小さな体で精一杯受け止めていた。

「待てよ。どうせ、戦<sup>や</sup>るなら外で戦<sup>や</sup>ろうぜ。こんな場所じゃあ、斧は不利だろ?　いくらウドの太木でも、負けて言い訳されたら腹が立つしな——」

氷雨はそんな男を手だけで制止した。

だが、それは謝るためではなく、より相手を煽るための行為だった。

「へえ〜小僧、口だけは一人前だな!　いいぜ、低力量<sup>レベル</sup>ごときが、俺を愚弄したのを後悔させてやる。表へ出な!」

男はそれだけの捨て台詞を吐いて、家から出て行った。

氷雨はそれに、口角“だけ”を上げる。まさか従業員だけを雇っただけで、こんな大物まで引っかけたのが嬉しいのである。

「アニキっ!？　力量<sup>レベル</sup>が10以下って本当なの？」

「おにいちゃん!？　あいつだけはたたかったらだめ!!」

二人は思い思いの言葉を、氷雨の傍に近寄ってぶつけた。  
だが、彼は不適に笑っただけでだ。

「いい機会だと思ってな。お前等も俺の“強さ”を知らないだろ？  
ちなみに今の俺の力量は<sup>レベル</sup>5だ。普通なら——弱いだろうな」

そして、彼は立ち上がった。カイトとユウは、あくまで勝つ気で  
いる氷雨に驚嘆の瞳を向けている。

力量が自分達と全く変わらないのに、そこまでの自信が生まれる  
理由が分からないからであつた。

それは空は太陽が隠れ、中途半端に黒と白が混ざつた色をしてい  
た時だ。雲だけがそこにあり、月も星もない。

云うならば、雲が天上をとつたような、そんな空模様だつた。

闘技場になるべき場所は、細い路地だ。身長以上の壁が両脇を封  
じ、その路地の幅は僅か70センチほどで、カイトとユウの家の前  
に少しゆとりがある程度だ。さらに道の端には様々な大小のゴミが  
錯乱しているので、満足に戦える程のスペースはない——と云える  
だろう。

「待たせたな」

氷雨が家を出ると、細い路地裏の数メートル先、斧の男はそこに  
待っていた。カイトとユウの二人も彼に続いて外へと出る。

「ふん、まだ怖気づいてないのか傲慢な小僧だ」

男は醜い顔で、苛立っていた。兜をつけてないので、鬼や悪魔と云われても違いの分からぬような恐い形相である。

それだけではなく男は、斧は刃を地面に下につき、下から上へと真っ直ぐに伸びる大きい図体を支えるように、柄を両手で持つ。

「けっ、力量<sup>レベル</sup>で、“強さ”を計るお前のほうが傲慢だろ？ そんなので人の何が分かるんだよ？ それにな——」

氷雨は双眸で自分の存在を誇示し、マントを脱ぎ捨てた。

半袖の服からは、傷だらけの皮膚が見える。決して太くもなく、細くもない両腕。遠くからでは分からないほどの筋肉が、そこには詰まっていた。

「——“強さ”とはな、血と涙と汗で語るもんだ。たかだか力量<sup>レベル</sup>程で分る筈がねえだろ……」

氷雨は呆れたように、話を続けた。

これが彼の語る“強さ”であった。長年武術に打ち込んで鍛え上げた彼だけが、云えるだろう言葉だ。

「ふん、そんな戯言——まあ、いい。そんなびびらないお前に敬意を評して、圧倒的な“差”を教えてやる。——俺の名はベル。力量<sup>レベル</sup>は34。戦士<sup>ウォーリア</sup>という“名持ち”だ」

氷雨はそんな聞いたことのない“言葉”に驚くわけもなく、びびるわけもない。

ただ、かるやかにその場に立っているように見える。

「そんなこけおどしで俺が戦いを思いとどまるわけ……」

「アニキ、やっぱり止めとこうよ！ “名持ち”は駄目だって！」

「おにいちゃん！ こんなとこでいのちをむだにしたらだめ！」

氷雨は自分を抑えることなどしないが、カイトとユウが氷雨に抱きついて待ったをかけた。

二人は、この町の“裏”にいたので情報通だ。

もちろんその中に、“名持ち”の情報もある。その危険性をよく知っているから、自分達の恩人と将来なる人だから、氷雨を全身で止めたのだ。

「おい、カイト！ その無知な冒険者に、名持ちの意味を教えてやれ。教えれば今回“だけ”はユウを、売るのを諦めてやる。いい奴隷になりそうな獲物がいることだしなあ……！」

ベルが氷雨に“名持ち”を教えるのは、決して親切心からではない。

恐怖にのた打ち回って、全てを絶望に変えた上での氷雨を思いつきり蹂躪したいからである。それがベルの趣向で、弱い者を斃すときの楽しみであった。

「……分かった。分かったよ……。じゃあ、アニキ言っな？」

「ああ」

「名持ちとは、称号、二つ名、通り名、様々な呼び方があるけど、“力量<sup>レベル</sup>とは違う強さを持つてる”人のことを総称して“名持ち”って言うんだ！」

「力量とは違う強さ」ってなんだ？」

氷雨はまず力量に対して、疑問を感じていた。

彼は力量に対して、ある程度の知識はギルドなどで手に入れている。力量とは筋トレをして経験値を上げたり、人や怪物を殺した時に得る経験値で上がる。時には思春期などにある身体的な成長で、経験値が上がることも稀にある。

——そして、力量とは身体能力の合計値を一般的に視覚化したものだ。

力量が高いほうがパワーがあり、スピードがある。体格は関係ないが、細くても力量が高く、身体能力が高い者もいる。

しかし、そうだとしたら、自分はどんな存在なのだろうか、と氷雨は不思議に思ったのだ。

——自分は身体能力が低いほうではない。

これまでに何人も人間を斃してきたが、その全てが自分より力量が高いと思う。それは、全員が自分を見下していたから、そう思ったのだ。

だが、そのどの者より、決して身体能力が劣っていると感じたことが彼にはない。むしろ、優っていると感じた部分さえある。

だから、氷雨は——力量というまやかしを、信じていないのだ。

「うん、名持ちが上げられるアドバンテージは、持つてる名の種類によって変わるけど、その全てが同力量なら、確実に名持ちが高いんだ！」

カイトは氷雨の疑問にも気づくことなく、説明は続く。その真剣な瞳は真っ直ぐに氷雨を見ていた。その内容は詳しい名持ちの詳細であった。

ウォーリア  
戦士。武器を持った時の武器の扱いや、戦いに関する当て勘避け感などが上昇する。

ファイター  
闘士。素手の状態での体の動きや身体能力等が、上昇する。

ナイト  
騎士。気高い精神を持っていれば、武器の扱いや馬術が腕が上昇する。

マジシャン  
魔術師。魔法を使えば、魔力の消費を抑えたり、魔法の威力を上昇させる。

どれも限度があるものの、持っていれば確実に戦いを有利に運ぶ。そして、どの名も一番の問題は、入手方法が分からないというものなのだ。戦いの中で得たものもいれば、寝てる間に得たものもある。その条件は不明だから、持つてる者つまり名持ちは、この世界ではエリートと云われていたのである。

「ふーん」

「アニキ！ ふーんじゃないよ！ どれもやっぱり危険なんだよ。オレもベル様が名持ちだったのは知らなかったけど、普通の神経を持つ人なら確実に戦いを止めてるよ！ それこそ力量<sup>レベル</sup>が高いならまだしも、アニキはベル様より力量<sup>レベル</sup>が低いんだよ！！」

「じゃあさ、一つだけ聞くが他にも名はあるのか？」

氷雨は思わず聞いてみた。  
少し興味があつたからだ。自分が将来戦うかもしれない存在の名が。

「うん……あるよ……。詳しい詳細は知らないけど、さっきの名の上位種とされてる狂戦士。剣闘士。聖騎士。魔道師。そして——」

カイトの名持ち講義は、まだ続く。

そして、少年は最後の名を言う時は、微かに体が震えていた。

「——救世主<sup>メシア</sup>。これの詳細は少しだけど、オレも知ってる。最近、巷で噂になつてる大衆を救う“名持ち”と云われてる……」

「そこまでで終わりだ！ どうせ死ぬ奴にそれ以上話ても無駄だろうしなあ！ どうだ、小僧、震えてきたか？」

カイトの名持ちに対する簡易版の講義は、ベルの終了の声で終わった。

ベルの顔つきはニヤついていた。自分の名がいかに凄いものか、わざわざカイトに説明させたのだ。男は期待したのだ氷雨のうろたえる姿を。

「——つまり、お前は名の中でも下位つてことか」

「ああ……」

だが、彼の行動は予想に反した。カイトとユウの手を解き、男へと一歩進む。氷雨は名の一部始終を知った上で、男を再度挑発したのだ。

「だから、お前の持つてる名は、戦士<sup>ウォーリア</sup>は、名の中でも一番下なんだから？ だったら何の問題もねえ。俺は……俺の持つてる力でお前と  
いう壁を壊すだけだ」

氷雨はまた一歩進んだ。

顔の笑みは止まらない。足も止まらない。

ベルにとっては、その全てが胸糞悪かった。己の思い通りにならず、断固として勝つ気でいる氷雨が。

「お前は、とことん俺を怒らせる気だなあ！ もう殺してやる！  
奴隷商人にも売らねえ！ ぐちゃぐちゃにして殺してやるっ！！！！  
！！！！」

氷雨の背後にいたカイトとユウはが竦みあがるほどに、ベルの声はドスがとても効いていた。

斧の持つている男の血は、怒りによって熱く沸騰している。顔が赤くなり、全身を苛立ちが巡り回った。大木のような腕は熱い血が回ったことで、準備体操の必要が無いほどに膨れ上がる。  
ベルの戦闘準備は、これ以上ないほどに完了していた。

「——さあ、戦<sup>や</sup>ろうぜ」

一方の氷雨も、戦闘準備は完了している。

血液は強敵という興奮によって煮え立ち、ポンプの役割を果たす心臓によって、体中を流動する。

この戦いは、カイトとユウを救うという免罪符があるので遠慮の心配もない。頭の中にあつたりミッターは、既に外れている。

そして、次の瞬間、——獣達は動いた。

先に動いたのは、黒色の獣だ。

走りよってくるもう一匹の獣に向かって、持っている斧を大きく上下に振り回す。その勢いで、地面に叩きつけたのである。

ドンッ！！

斧技の一つ『衝波』だった。

『衝波』とは斧から出た大きなショックウェーブが、大地を浅く割りながら蛇のように這って直進に進む技のことだ。高さが数十センチの衝撃波は、氷雨を狙って突き進む。

「ちっ！」

氷雨は見たことのない技に、酷く戸惑った。

この技——『飛斬』ほど早くはないので、通常の縦横無尽に走り回れるような場所なら脅威でもなんでもない。

だが、ここは細い裏道だ。

左右に逃げる場所などなく、前に進んでも『衝波』にあたり、後ろに下がっても『衝波』にあたるだろう。

彼の逃げ場は“本来”なら零であった。

「おにいちゃん！ うえっ！」

だが、氷雨はユウの言葉によって、九死に一生を得る結果となる。彼はユウのアドバイスどおり、壁を蹴って高く上に飛び、男の攻撃を躲したのだ。

（あつぶねえ……）

彼は真下を通り過ぎていく『衝波』を見ながら、内臓が冷えたかと思うほどの緊張感を味わっていた。

ちなみに『衝波』は、カイトとユウの間を通り抜けて家の入り口へあたったのだった。

「くそっ！ ユウの奴め、いらんことを言いやがって！ ……へへっ！」

男はユウへ憎まれ口をたたくが、あくまでそれは演技。

ベルの本来の“狙い”はこれではなく、地上へと氷雨が降りる瞬間を予測して、『衝波』を今度は当てることなのだから。

ベルは三流の冒険者ではない。一発を“わざ”と外し、二発目で決めるという定石を知っている。

男がやった行動はまさに“それ”だった。

まるで詰め碁をやっているかのように上手いこと氷雨をはめて、——勝つ。狭い路地という限られた条件化ならでは、策であった。

（クソッ！）

そして、氷雨は今空中だ。

身動きが自由に取れる場所ではない。

さらに地面と『衝波』、両者との邂逅まで僅か一秒までに迫り、と全てが男の目論見どおりの展開だ。

そして、——氷雨は『衝波』とあたったのだった。

「アニキッ！」

「おにいちゃん！」

「ほれみろ！」

子供達はこれから起こるであろう惨劇に目を瞑り、ベルは『衝波』に激突した氷雨を鼻で嗤った。

彼は子供二人の近くまで吹き飛ばされ、地を転がる凄まじい轟音が氷雨の場所を周囲に伝え、砂煙が舞った。

「——やっぱり、低力量<sup>レベル</sup>だったんだな！ そんな雑魚が、“名持ち”の俺に逆らうからこうなったんだ！」

全ては男の想像通りに事が運んだ。

最初の『衝波』を上になかなか逃げ道に避けられ、次の『衝波』で相手を狙う。これ以上ないほどの展開であった。

「けっ、——“この程度”の威力で、何を誇ってるんだ？」

——だから、痩せ我慢を演じながらも立った氷雨に、男は驚いたのだろう。

『衝波』は『飛斬』のような斬撃ではないので、あくまで当たっても衝撃だけが体に伝わるだけだ。ゆえに、体のどこかが斬れることはない。

だがその代わりに伝わるのは、大きなハンマーで殴られた、と思うほどの大きな衝撃である。ぶつかってすぐに立てるような、やわ

な攻撃ではない。

「おいおい、なんで……なんで立てるんだよ!？」

男が知る限り、この攻撃を喰らってすぐに立てた者はこれまでにない。

いや立てるはずの者ならば、かなりの数がいただろう。だが、怪我は一つもなくとも骨髓まで響くその痛みに、“耐えられる”者がいなかったのだ。

「けつ、——気合だよ。気合」

氷雨もやはり体のどの部分も共通して痛かった。

そして、唇を噛みながら痛みを堪え、——走った。

「次だあああああああああああああああああああ!」

男はもう一回、『衝波』を放つ。氷雨は迫ってきたそれを、右手で受けめた。激痛が奔り、拳を握れなくなった。

また、男は『衝波』を放った。氷雨は今度はそれを、左手で止める。折れてはないが神経にダメージが響き、激しい痛みによって左手も動かなくなった。

——だが、彼は止まらない。止まらなかった

最短距離で男まで距離を詰めた氷雨に、男は顔を歪めた。

もう、『衝波』を振るう余裕も無いからだ。

氷雨はこれを——好機と思った。前宙のように一回転し、そのままの勢いで右足の踵で相手の脳天を狙う。

だが、

「——甘えな。やっぱり雑魚だけあって、煮詰めすぎたジャムのように甘え」

一歩下がられて躲された。

氷雨は回った勢いを殺しきれず、無様に地面へと倒れた。それは頭から落ちることとなるが、強引に体を捻ったので、強打したのは背中だ。

「ぐっ……！」

氷雨は心臓を強く打ったので、呻き声が反射的に出る。

「——終わりだ」

ベルは腐っても“名持ち”だ。

戦いの経験は、同力量の冒険者を遥かに超える。ゆえに、この程度の予想外に慣れていた。

戦いとは、自分の予想通りに進まないもの。

だからこそ、それにどう対処するかで己の価値は決まる、とベルは思っているのだ。

男は大きく斧を振りかぶり、横たわる氷雨へ斧を——落とした。

それは『重斬』。

あの四人組の一人が行った斧技で、基本的な技の一つ。重さと硬さを最も活かした縦切りだ。縦切りという普遍的な技だからこそ、技アシストによる筋肉のリミッターを外したパワーがよく生かされる。

云うならば、巨人の一振りに近い。

パワー、スピード、どれをとっても人外の技である。  
だが、それだけだ。  
振りが大きいので、隙も大きい。

ドスンっ！！

氷雨は地面を転がって、何とか『重斬』を躲した。  
斧は氷雨という緩衝材が消えたので、そのまま大地を抉り、深く突き刺さる。

彼は男が斧を地面から抜いている間に飛ぶように立って、斧の二倍程度の距離に立つ。

（遅い……あいつらに比べると……）

氷雨は少し距離を空けて、静かに男の戦力を分析していた。黒色の目を凝らし、男の筋肉の細かい部分まで鮮明に。

戦いによって出る興奮を一旦とどめ、客観的に男を注視すれば様々な事が得られた。

例えば、身体能力だ。

身体能力だけは、これまで自分が戦ったあの『飛斬』を操った剣士よりも、あの不意打ち上等の四人組よりも下だろう。

この男の腕の振りは、全て見切れたからだ。それ程に、この男は遅かった。

「次だあああああああああああああああああ！！」

（問題は――）

男は斧を抜いた後、斧を横に振った。路地の狭さを苦にもせず、

周りの壁も粉碎する強烈な横振りだ。

氷雨はそれをダッキングのようにくぐりながら避け、ある“重要な事実”に気づいた。

「まだまだあああああああああああああああああ！」

ベルは己の近くの氷雨へ、斧の性能が最もよく出る距離へ離れさせようと――蹴る。

蹴り自体は美しさのない蹴りであったが、太い筋肉がゆえの力強さがあつた。

（――巧さ！）

氷雨は相手から離れないために、痛みを我慢して両腕でその蹴りを防いだ。

そう、この男の最大の持ち味は、一流の武芸者のような身のこなしだった。

これまでの敵はいくら一般人より通常の身体能力が高くても、自分よりは僅かに低い。どんな優れた技スキルがあつても、戦いの技術自体は自分とは程遠かった。

例えば、武器に応じた距離感や攻め時、守り時を全く知らない。虚実というフエイントもなかったので、類稀な運動力スキルに任せ、技という便利なおもちゃに任せた強引な力技が多かったので、――勝てた。

だが、この男は違う。

技の使うタイミング。相手との勝負の駆け引き。それに自分の得

意な戦い方。

戦闘に必要な技巧を、この男は知っているのだ。

——厄介だった。

これまでにないほどに厄介だった。

「はっ！」

氷雨は敵に近づいたので、顔に拳を突き立てるようにショートアツパーをするが、顔を捻られて躲される。

さらに、斧の刃とは逆の柄の部分で殴られそうにもなる。

氷雨はそれを一步下がり、柄が通り過ぎ去ったのを見るとまた敵に向かって前進した。

「カイにい、力量<sup>レベル</sup>って、ぜったいだよね？」

ユウは目の前の一人の獣を見ていた。

拳という爪と、脚という牙で、戦う獣を。

その獣は一步も引かず、遙か高みの力量<sup>レベル</sup>差と“名持ち”という有利さを、劣勢とも魅せずには戦っている。

「うん、そうだけど……そうだと思うけど……」

カイトも見ていた。力量<sup>レベル</sup>差がないとも思えるほどの、“互角”の勝負を繰り広げる一匹の獣を。

本来なら、力量<sup>レベル</sup>差を埋めるのは、武器か防具か“名”だ。

だが氷雨はこの内のどれかで、戦っているのではない。

武器は最弱と云われる素手と、防具は駄剣すら防がない布製の薄い服。しかも“名”は持っていない。

圧倒的な力量差<sup>レベル</sup>を何で埋めているんだろう、とカイトは疑問に思っただ。

「じゃあ、あれはなんなの？」

ユウの言葉が強く胸を打った。

自分達はベルの力量<sup>レベル</sup>を知っていたから、反抗しなかった。だが、もし力量<sup>レベル</sup>が絶対ではないのなら、自分の耐え忍んだあの日々は何だったのだろう、と後悔に陥ったのだ。

「きっと、アニキだからだよ。ユウはあいつに勝てるか？」

でもそれは、勘違いだと少年はすぐに気づいた。

アニキだから戦える。アニキだから力量<sup>レベル</sup>が絶対ではない。アニキだから武器も防具も必要ない、と。

「うつん」

「オレもだよ。オレも、ベル様に勝てるとは思わない。でも、アニキなら……アニキなら……なんとなくだけど“勝てる”と思える。ユウはどうだ？」

「ふしぎだね！ わたしもそうおもっただよ」

彼方では、駆け引き自体は地味ながらも激しい戦闘が繰り広げられてる。

斧が煌き、拳が舞い、空気が切り裂かれる。  
それは誰が見ても泥臭い殺し合いではなく、武芸者と冒険者の同格の戦いだ。

「じゃあ、することはひとつだね！」

「だな！」

二人はこの戦いを見て、一つの結託をする。

「おにいちゃん！がんばって〜！！！」

「アニキ！負けんなよ〜！！！」

カイトとユウはその戦いを見守りながら、異常な存在である氷雨だけ、を応援したのだ。

氷雨の攻防は、初心者が見れば見るほど情けない戦いだった。避けて躲すばかりで、防御もなければ攻撃もあまりない幼稚な争いに見えるだろう。

だが、二人は違った。

二人は氷雨が攻撃を出しづらいのにもかわらず、二匹の獣を同等、いや氷雨が勝っていると思ったのだ。

カイトとユウの考えは、誰かが聞いたら嘲笑する考えだ。不利な方を勝っていると考え、有利なほうを劣っていると考えるなど、本来なら正気の沙汰ではない。

でも、氷雨だから、という理由だけで、子供達は納得したのだった。

（どうなってやがる！？）

ベルは、至近距離で攻めながらも攻めあぐねている状況に、目を見開いていた。

斧を薙いでも躲され、斧が届くかどうかぎりぎりの距離を狙い定めて攻撃しても、逆にその極限の距離を逆手に取られ斧は僅かに届かない。

彼の考えなら、あの二発目の『衝波』の時点で——もう終わってる。

あの衝撃は骨にまで届くのだ。力量<sup>レベル</sup>が低いのなら、筋肉も少ないならば、衝撃が骨まで貫通し、粉碎して、即死はないが戦えなくなるはずだ。

だが、だとしたら、目の前で起こっている状況はなんだ、とベルは思ったのだ。

己は有利なはずだ。力量<sup>レベル</sup>は高いし、名も持つてる。武器も防具も装備してる。素手で碌な装備をしていない相手より、“劣る点”はなに一つも見当たらない。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

ベルは迷いを断ち切るように叫んだ。

袈裟切りも、逆袈裟も、避けられる。

相手の掠り傷を増やしたと思ってても、決定打にはならない。

不利な点はないのに勝てないこの逆境を、打ち負かすように叫んだのだ。

喉を震わせる。

筋肉を震わせる。

斧を全力で振るう。

決死のベルの斧。

——決着は近い。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

空気に轟く剛声。

氷雨は一メートルの距離をベルからとって身構えるほどに、強烈で殺気の籠った声だった。俺は上位種族だ。選ばれた人間なんだ。と、劣勢を跳ね返すように叫んだのである。

「——っ！」

氷雨はそれに対抗し、体勢を低くしながら筋繊維がぼろぼろの両腕に軽く力を籠めた。

——痛い。

ただの筋肉痛だが、予想以上に痛い。

先程まで、戦いの興奮で痛くなかったのに、今となって強烈な激痛となって氷雨を襲う。それは多量の電流が両腕に奔ったかのような、痛みであった。

そんな氷雨に、ベルは斧を振るう。

『重斬』ではなく、普通の縦切りだ。

巨軀から生み出される力と、斧本来が持つ破壊力。技<sup>スキル</sup>ではなく、生身で上から迫るその圧力は、“本物”だった。

殺す気迫の入ったその攻撃は、これまでのどの技より、氷雨を圧巻させる。

「――！！」

彼は襲い来る斧を刹那見つめ、地面を蹴った。

数瞬の間合いを見切ったのである。

後ろに下がった氷雨と、上から下に落ちる斧の隙間。わずか一センチにも満たない隙間であった。斧によって切れた黒髪が数本、空中に漂う。前髪の一部であった。

斧が氷雨の顔の前を通り過ぎると、二人の目が黒く輝いた。

それは氷雨とベルの眼球にそれぞれに届く、お互いへの殺意。唯一の共感。絡み合う攻防の策略、である。

その時の、ぴりつと張り詰めた空気が、カイトとユウにまで届いた。

「うおりゃあああああああああ！！」

「はっ！」

そして、彼は走った。大いに叫ぶベルに向かって。

地面に刺さる鉄塊が、鏡のように氷雨を写る。ベルは氷雨を写している間に、斧を上あげた。『重斬』ではないがゆえに、地面と衝突しなかったのだ。さらにベルは、斧の柄を胸まで引いて、氷雨を横薙ぎに斬ろうとしていた。

だが、もう遅い。

氷雨はそれよりも速く、大地を蹴った。今度は壁を蹴った。さながら鳥のように、空中を自由に彼は動いていた。

最初の蹴りで上に高く飛び、次の壁蹴りでベルの方向へ向かったのだ。

「クソおおおおおおおおおおお！！！」

背後に回った氷雨に、刃は振るえない。

重たい斧は、体勢を切り返すのに時間がかかるのだ。だから男は、後ろに一步跳ぶことで、氷雨を押しつぶそうとしていたのだ。

「——！！！」

氷雨はくるつとその場で回る。そして、蹴る。その無防備な背中へ、回し蹴りを、であった。

ダメージにはならない。鎧の上だからだ。

もう一度、連続でその背中へ回し蹴りを放った。既に氷雨の体は二回転している。

「——！！！」

彼は、回し蹴りをもう一度。

男の体重を蹴りだけで、押し返そうとしているのだ。三度目の強烈な回し蹴りが、男の背中を次々と壮絶な速さで押した。

「——！！！」

三度目の回し蹴りで、体が少し浮いた。

いかに、重力が男の味方をしていようと、諦めずただひたむきに蹴り続ける氷雨に、天秤が少し傾いたのだ。

「重いんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお！！」

四度目。

氷雨の渾身の一撃が、遂に男を吹き飛ばした。

これまでこちらに傾いていた男の体が、顔から地面へと向けられたのだ。

今度はベルに、重力が牙をむいた。鎧で身を固めた男が重さに勝てるはずもなく、顔から地面へと叩きつけたからだ。

これで終われば、どれだけ楽だったろう、と氷雨は思う。

回し蹴りは、あくまで男を倒れさせたただけだ。決定打には程遠い。だから、氷雨は、無防備な右腕を――掴む。

「おい……おい……！！」

ベルは痛みだけでも、自らの右腕が本来とは曲がらない方向に曲がつてるのが分かる。

腕が背中側に引つ張られ、捻りあげられている。氷雨は体全体を使い、“ハンマーロック”によく似た関節技を使おうとしていたのだ。

「負けを認めるから！ もう手はださねえから！！ だから……」

両手を使い、右腕を背中側へ“極まる”方向に曲げ、てこの原理で折れるまで曲げるのだ。

みしししつ、と関節の音がした。肘か肩かもしくはその両方が、出所は分らない。これは、関節が引きちぎれようと、外部の圧力により引き離れようと、している音だ。

左手をバンバンと地面に叩き、必死に悲鳴をあげた。  
だが、氷雨は“極める”のを止めない。

[illegible]

そして、ボキッと音が鳴り、男の関節は――折れた。

「次は左も“極める”からな」

氷雨は斧を遠くに投げ飛ばした後、ベルを目の前で正座して座らせている。

男はもう、抵抗する気にもなれなかった。右腕はだらんと動かず、強い痛みが絶え間なく奔っている。

それに氷雨の発言で。次の恐怖も脳裏に浮かんだからだ。

「分かってるよ。それで……俺をどうするつもりだ？」

ベルは黙ったまま、冷徹に自分の今後を聞いた。

男は先程の、あの情けない悲鳴が耳に残っている。止めてくれ、止めてくれ、と叫んでいた悲鳴が。感じたことのない醜態だった。一生の恥だ。

もし、男が生きてこの場から帰れるなら、この戦いは忘れること

がないだろう。

「どうするって、とりあえず殺す気はねえよ」

「えっ！」

この発言に、ベルではなくカイトが驚いた。

氷雨はどれだけベルが悲鳴をあげても、攻撃を止めなかった、敵には容赦のない人物だと知ったのだ。

そんな彼だから、てつきり敵を殺すと思ったのである。

「そんなに俺がこいつを殺さないことが意外か？」

「い、いや、そんなわけじゃないけど……」

カイトはうつろたえながらも、氷雨の軽口に返した。

「まあ、いい。今日の俺は気分がいいんだ。で、お前には命を助けてあげる代わりに、やって欲しいことがある」

一方の氷雨は愉快だとばかりに、頬が緩みきっている。

見る限りは安全そうな青年だが、近くで見ると——怖い。灰色のマントで隠してはいるが、下の服には血が滲んでおり、マントは刀傷ばかりで痛々しい。いわゆる歴戦の兵だ。つわもの

「やって欲しいことって——なんだ？」

ベルに、氷雨の提案を断る勇氣はなかった。

目の前の男には情けがない。もし断りなんてすれば、きっと死ぬより非道な結末を迎えるなど、用意に想像がついたからだ。

どんな提案をされても、適当にこの場をはぐらかして逃げればいいと思ったのだ。

「——俺のことを広めてほしいんだ」

「……はっ！？ いやっ、なんでもない。続きを話してくれ」

ベルは声が出てしまった。

否定をしないと思っていたはずなのに、素っ頓狂な声が出てしまった。

それほどまでに、氷雨の要求は虚をついていたのだ。

「なに、俺が低力量<sup>レベル</sup>ってことを、広めてくれればそれでいいんだよ。このエータルには、氷雨っていう低力量<sup>レベル</sup>で強い奴がいるってなあ」

これが、氷雨がつくづく考えていた姉の探し方——であった。

氷雨は自身に、情報を集める手段も、情報を使いこなして姉を見つける脳も、無いことをよく知っている。

だから、自分では見つけれない。故に情報の発信を選んだのだ。

自分に情報は扱えなくとも、頭のいい姉ならば自分という情報を得たら、上手く使いこなすだろうと考えた。

氷雨は、他力本願な考えだが、これが最善の方法だと思っている。この世界にもしも姉がいるなら、きっと自分を探す、と知っているがゆえの考えであった。

（姉ちゃんは……俺の“姉”だからな）

それは、雪が氷雨の“姉”だからだ。

自分の為なら、なりふりかまわず他人を利用する。  
それが、当然自分にも及ぶ、と。

「で、返事は、はいかそうですかのどっちなんだ？ 速く答えろ。  
腕がもう一本――亡くなるぞ？」

「はい……ぐっ……分かりました」

男は悔しそうな声を上げながらも、氷雨の意見に従った。  
氷雨は最後にうんうんと、満足そうに頷いている。

「ふう、じゃあ用は終わりだ。カイト、ユウ、行くぞ。飯を食わし  
てやる」

「おう！」

「うん！」

彼は、そして二人を呼んだ。

この場にはもう、何の用もないからだ。

そして、細い路地を通ってる途中で、気がついたようにベルに振  
り返った。

「あ、そうそう。もし、広めてなかったら、――殺すからな？」

瞬間のことだ。

ベルは身の毛がよだつ程の、寒気を感じた。

それは、氷雨が消えても、消えることのない寒さだった。

そして、知ったのだ。

彼が、敗者を自分を、殺さないのは――利用するため、と。

氷雨は、どこまでも慈悲のない男なのであった。

## 第十四話 VS名持ち（後書き）

今回は名持ちとVS名持ちの二つを纏めてみました、  
もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただければ、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## 第十五話 とあるエータルでの一日

次の日の朝。

氷雨が冒険者になって、五日目の朝である。

朝なので気温は低く、日光は木で作られた窓で閉ざされていた。部屋の薄い壁の向こう側では鳥がさえずり、早朝から商人達の活気のいい声が聞こえている。

きつと窓を開ければ、いい町の情景が広がっているのだろう。

「うおおおおお……………！！」

だが、そんな本来なら、爽やかな朝を迎えるはずだった氷雨は、固いベットの上で悶えていた。体の体制は横向きで、両手をプルプルと震わしながら、ただ一心に両手の激痛から耐える。

もし、氷雨に目も見張るような大怪我を煩っていたなら、その激痛のあまりに叫ぶのは分かる。

「…………アニキ、大丈夫か？」

「…………おにいちゃん、だいじょうぶ？」

だが、そんな大怪我もないのに、氷雨は苦しんでいた。

そんな彼の情けない姿は、同じ部屋の隣のベットで仲良く寝ていたカイトとユウが起き、カイトがジト目で注目するほどの悲鳴である。

「いや…………全然…………大丈夫じゃない…………」

「じゃあ、なにがだいじょうぶじゃないの？」

半信半疑で氷雨を演技ではないかと勘ぐっているカイトとは逆に、ユウは純粹に心から氷雨を心配していた。

ユウは子供だ。齡は六以下で、精神的にも肉体的にも幼い。人の気持ちも分からず、疑うこともできない。

だからだろう。

ユウはその純粹さゆえに、氷雨を氣遣い、左腕を――触ってしまったのだ。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

彼のうずきの原因は、昨日ベルが放った『衝波』だ。

そして、『衝波』の特徴である衝撃を、両腕に受けてしまったために起きた筋肉の断裂。つまり、――筋肉痛が激痛の起因となっている。

もし、動かさなくても叫ぶほどの筋肉痛が起こっている箇所に、人の手が触れれば想像しなくても結果は分かる。

あの痺れるような痛みが、両腕全体に広がっているのだ。それも際限などなく。

「え！？ おにいちゃん！？」

「あ、そういうことが。アニキ、ドンマイ！」

ユウは見ず知らずの内に、氷雨にとって地獄となる行動を、自然にしていたのだ。

カイトは昨日の戦いの一部始終を見ていたので、氷雨が何故大声を出したのが理解できた。あれは痛い、と。

「お、おにいちちゃん！ ごめんね！ きんにくつつ？ だとは、おもわなかったんだよ！」

夜とは勝手が違ったメインストリートを、三人は歩いていった。空には太陽が今日も燦燦と日差しを注いでおり、露天は熱気で満ち溢れている。

獣人やドワーフなど様々な人種がいたが、その中には鎧を着込んだ者もいた。分厚い鉄に体を守られ、刃物で威嚇する冒険者たちだろう。

「……もう、いいから。とりあえず、“ギルド”行くぞ」

氷雨は片腕をぶらんぶらんと振って、ユウに大丈夫と意思表示していた。

朝と比べると、痛みはマシにはなっている。だが、あくまで頂点を朝と考えたら、だ。やっぱり何かに接すると痛いし、強い風が吹くだけで叫びたくなる。

しかし、それを不屈の精神だけで屈してるだけだ。

理由は、氷雨が苦しんでる理由を理解できないユウを困らせないためだ。仮に、困らせたら、氷雨に近づき体を擦って怪我の安否を確かめようと、体にさわる。

しかも、その時に限って、腕である。

彼はそんな更なる災禍から身を守るため、筋肉痛を断腸の思いで、耐え続けているのである。

それは氷雨も自分の身を案じてくれる子供に、強く言うことなどできないからだ。むさい男には無類の強さを誇る彼も、世間知らずなお子様には弱いのであった。

「アニキ、痩せ我慢が上手いな！ オレなら絶叫してるぜ！」

「カイト……少し黙れ」

氷雨の右側にいるカイトは、軽口で彼に喋りかけた。

現在のカイトは黒い靴も履き、薄い布製の服の上から、氷雨と同じような灰色のマントを羽織っている。昨日、あの後、氷雨が買い与えた物であった。

それに顔についた泥も綺麗さっぱり無くなっており、男らしい、いや、わんぱく小僧そのままだ。

「ねえねえ、おにいちゃん！ これからわたしたち、どこいくの？」

その声の主はユウだ。

氷雨を真似した格好はカイトと同じだが、砂で汚れた髪は黒色ではなく深い藍色。氷雨も分からなかったが、少年ではなく少女で、肩で揃えたショートカットはじゃじゃ馬娘そのものだろう。

ちなみに、氷雨の天敵である。

「違いよ。今日行くのはギルドだよ」

「ギルドって、あのギルドなのか？」

「ギルドって……ばっけんしゃになるとこでしょ？ だれがなるの？」

氷雨のギルドという単語に、カイトは目を輝かせ、ユウは疑問の色を瞳に宿したまま彼を見上げる。

「お前等が冒険者になりに行くんだよ。ついでの用事もあるしな」

「えっ！？ オレが！？」

「ああ、迷宮ダンジョンに行くんだろ？ なら冒険者じゃないと、あそこは入れねえからな」

氷雨にはその経験がある。

あの日、通行証を持っていないばかりに、門前払いを喰らったのだ。その経験を活かして、氷雨はギルドに出向いてるのである。

「おにいちゃん、それってわたしもなれるの？」

「さあ、知らねえ。丁度ついたし、聞いたほうが早いだろうが？」

「……アニキ、行き当たりばったりだな」

「けっ、ほっとけ。それより……ついたぞ」

冒険者ギルドの扉は、肉厚で取っ手がない。頑丈さを優先して作られているのだ。

カイトは、ギルドの中から聞こえてくる男達の蛮声に少し怖気づく。しかし、人を気遣わない氷雨が、少年の繊細な心の動きを分けるはずもない。

ボタンー！！

腕が筋肉痛のため、足で鍵のついてない扉を開けたのだ。

反動のついたドアは、反対側の壁に大きな音を立てて激突する。その派手な登場には、中で酒に吞まれてた冒険者たちも注目し、目を丸くした。

「お、おい、アニキ！ 本気かよ！」

「さっすが、おにいちゃん！ かつこいい〜！！！」

氷雨の横を、アルコール臭に顔をしかめたカイトとユウが歩き、その動向を一瞬も冒険者は見逃さない。

「生意気な小僧め！」

「ガキ二人つれてるぜ、あいつ！ ここは子供の遊び場じゃねえんだよ！」

「いや、武器を持ってないのだから、単なる馬鹿じゃないのか？」

「あははっ！！ 違いねえ！」

多くの罵声を浴びながらも、氷雨は歩みを止めなかった。

「こいつらの迷宮ダンジョンの通行証をくれ。二人分だ」

「…… あっ、はい、通行証ですね。もちろん新規……ですよね？」

「ああ、分かってるじゃねえか」

向かった先はカウンターだった。

そこに座ってたのは数日前と同じ、アッシュブロンドの短髪の受付嬢だ。印象はお互いに強かったため、よく覚えていた。

「しょ、少々、お待ちください。すぐにご用意いたしますので……」

受付嬢に数日前の焦りはなかった。

あの氷雨の件があつてから、新規の入る時期以外にも、新規の登録者に迅速に対応できるよう準備していたのだ。

だが、そんな受付嬢にも驚きはあつた。

新規登録者が――幼児なのだ。

これまでの最年少は十二歳だったので、大幅に記録更新である。いや、幼児のような歳で

「では、こちらに生体情報として血を垂らしてください。ところで、ナイフはお持ちでしょうか？」

受付嬢は石を二つ机の上に置いてから、氷雨に“しか”しない質問をした。

「アニキ、オレ一本だけなら持つてるぜ！」

「わたしはもってないよ！」

「じゃあ、一本だけ頼む」

「ええ、かしこまりました」

彼女は氷雨におどどとナイフを渡した。前回のナイフと同じナイフである。

カイトは自分の指を傷つけるのに軽く呼吸を置いてから、少しだけ切る。

ユウもナイフを怖がっていたが、ここで泣かれると氷雨は厄介と思っただろう。筋肉痛を我慢しながら、ユウの手を刃物に驚いて目を瞑っている間に切った。  
すると、

「お、お、お、おにいちゃ……ん……手が……手が……」

ユウが手を見て泣きそうになっていた。

目に涙を浮かべ、瞳をうるうるさせるとさせる。

痛みは殆ど無かった。薄皮一枚だけを綺麗に氷雨が切ったことにより、痛みは少なかったのだが、手から“血”が出るといふ現状に、ユウは泣きそうになったのだ。

「ユウ、ほら、泣くんじゃねえ。急に切ったのは悪かったって」

彼はユウの方を向き、泣き出さないよう説得しようとするが、黒真珠のような目に浮かべる涙は大きくなるばかり。

そして両手を前に差し出し、一言。

「……だっこ……」

「はあ……ぐっ、すいません、許可証を頼む」

氷雨は呆然とする受付嬢に登録を急ぐよう急かしてから、ユウを泣き止ますため、抱っこした。そして体を軽く上下をしながら、あやしている。親子にも兄妹にも見えなくはない。

だが、この時、氷雨は必死に耐えていただろう。――激痛を。

「う、う……うっ……」

「アニキ、なんかごめんな。ユウが」

「い、いや、大丈夫だ……瘦せ我慢も根性の内だから……」

彼女は子供らしく、氷雨の肩に顔を擦りつけながら静かに泣いていた。

カイトはそれに兄として、痙攣してる両腕を我慢している彼に謝罪した。

受付嬢が、時計のような機械をカウンターの上に置くまでの数分間。氷雨は地獄のような苦しみを味わっていた。それは、祖父の拳よりも格段に痛いのであった。

「では、こちらが通行証となっております。子供なのでサイズが合わないかもしれませんが、持ってさえいれれば迷宮ダンジョンに入れるので問題ありません。何か聞きたいことはございますか？」

「ユウ、とりあえず降りろ。また今度抱っこしてやるから——」

「ヒック、エッグ、うん……わかった。こんどはじゃ、だめ……だよ。ここからでたら、だよ」

氷雨はユウを下ろし、カウンターの上に銀貨を二枚払って、通行証を二つ受け取った。

「はいはい。分かったよ。——それで……結晶石の換金はどこになるんだ？」

「少しなら、こちらでできますよ。大量なら手続きが必要ですが…

…。ご存知の通り、冒険者には一定期間内に、力量<sup>レベル</sup>に応じた量の結晶石の換金が必要となっています。もし遅ければ、一度目は三月の間迷宮<sup>ダンジョン</sup>に入れなくなります。二度目からは冒険者の権利剥奪か、10万ギルの罰金となっています。——お気をつけくださいませ」

受付嬢はとつてつけたような挨拶を、氷雨に述べた。

これが——このギルドのシステムである。

最新技術満載の腕時計や、便利な機能が沢山あるギルドへの入会金が安いのは、結晶石の利益のみで十分元が取れるからだ。

どんな凄腕の冒険者であろうと、税金などとして引かれる四割の数字は変わらない。それこそ、力量<sup>レベル</sup>が高い一流の冒険者ほど、多くの金を搾り取れる。

しかも、迷宮<sup>ダンジョン</sup>を牛耳っているのはギルドだ。

つまり冒険者からは抗議の声が挙げたくとも、稼ぎがなくなるのは嫌なので、挙げられないのだった。

「これだけ頼む。量は少ないから大丈夫だろ？」

「ぶはっ！ 少ねえ！」

「駆け出し冒険者か！？ いや、子連れ冒険者だな！！」

「いやいや、駄目駄目冒険者だろ！！ それにしても、よくあんなので冒険者になろうと思ったな！！」

氷雨が巾着から出した結晶石が、小指の爪ほどの大きさもなく、数も十個に満たなかった。この結晶石は、氷雨がルウなどを斃して手に入れた結晶石である。

つまり、自分の力で怪物<sup>モンスター</sup>を討伐した唯一の成果なのだ。

だが、ごつい冒険者はこの有様を見て笑った。  
大いに笑った。

こんな結晶石、冒険者なら拾わない者も多い、とても価値が低い俗に云う“屑”結晶だからだ。

「ええ、ではお待ちください。ついでにその『デバイス』をお貸しください。現在の力量と比較して、後どれぐらいの量で期間が伸びるかお伝えしますので」

「ああ、分かった」

数十人いる冒険者達は、奥の受付嬢が帰ってくるまで、じっと三人のことを見ていた。

そして、戻ってくると、

「す、すみません！ 遅れてしまいました！ ええっと、貴方の現在の力量では、三月は収めなくて大丈夫ですね！ 今後とも当ギルドを便利にご活用ください」

受付嬢は、氷雨に数枚の銅貨を渡した。一人の冒険者が、一日程度しか生きられない程の銅貨であった。氷雨はそれを結晶石が入っていた別の巾着に入れる。

冒険者達に想像していたよりも氷雨の力量が低いことが知られると、一気に吹き出し、大声で笑う。

「あいつ、一体どれだけ低いんだよ！ あれだけの量で基準量を満たすなんて……最弱だろ？」

「お、オレ見たぞ！ 力量は5だ！ 最弱記録更新じゃないか？」

「だな！ 弱つええー冒険者だな。あいつと俺達を同類と思われたくないぜ！」

三人はそんな冒険者の嘲笑の中、ギルドから出て行つた。

カイトが去り際に言つた、アニキは本当は強い、は聞こえずじまいである。

少年の心の中には、あんな飲んだくれに言い返さない氷雨に対して、苦い思いばかりが募っていたのだった。

「アニキい、なんで言い返さなかったんだよ？」

ギルドを出てから数分後、メインストリートを歩いていたら時のことだ。

カイトは先ほどの氷雨の態度について、聞いてみた。声質はふてぶてしく、馴れ馴れしいものである。

「なんでって、言いかえしたところで俺に何の得があるんだよ？」

「得って、さ。そう言われると何も無いけど……それでもあの“名”を持っているベル様に勝ったんだぜ？ もうちょっと堂々とするとかさ、俺は強い、って必要以上に示すとかさ、色々あるじゃん。アニキにそういう誇示欲？ そんなの無いの？」

「誇示欲なんて俺にあるわけねえだろ。あつたとしても“戦闘欲”ぐらいだろうが」

苦笑いをした氷雨はカイトの横でユウを抱っこしながら、カイトに返事した。

ユウはあれからもう一回彼に抱っこをせがんだ。それを氷雨は“約束”だと素直に従った。氷雨にも、その程度の常識はあるらしい。

「おにいちゃん……」

それから、ユウは離れようとしないのであった。氷雨のマントの端をぎゅっと掴み、口を真一文字に結びながら、一向に氷雨をはなさなかったのだ。

だから氷雨とカイトはユウが自力で歩くのを諦め、人ごみに紛れていたのであった。

「戦闘欲って、アニキはそんなに戦いたいのか？」

「ああ、当然だろ。食欲、睡眠欲、戦闘欲が、人間の三大欲求だろ？」

「アニキ、それ本当か……？ いや、似たようなの聞いたことあるけどさ……」

人と人の間をすり抜けながら、三人は歩いていた。

目指す場所は、あの宿だ。今日は氷雨の調子が悪いから迷宮に潜るのとは不可能なので、早々と帰ってしっかりと体を休めることを選んでのである。

カイトはメインストリートを歩きながら、周りを興味津津に見渡していた。

例えば、数メートル先に見える出店では、焼いた肉の香ばしい匂

いが食欲をそそる。その隣の出店では、果物の甘い匂いが空腹を進めた。この出店は、料理を出しているなどこの他に、貴金属や武具などを売っている出店さえある。

「うっわ！」

感激の声が漏れるほど、カイトはこの光景に歓迎していた。

この町の裏で貧しい生活しかしてなかった彼だからこそ、この眩しい様子を目をキラキラさせながら見ていたのだ。

「あつ、すいません……」

と、そんな時であった。

ユウを持った氷雨に、カイトと同じぐらいの子供がぶつかったのは。おそらく、その子供は少女だろう。深く黒い外套で全身を覆っているため分からなかったが、声から少女だと分かりえたのである。その少女は氷雨にぶつかったのを謝りながら、また、人ごみの中へ消えていった。

「おにいちゃん……だいじょうぶ？」

「……ああ」

ユウは氷雨を気遣ってか労わりの言葉をかけるが、氷雨の返事は曖昧なものであった。

（まあ、人が沢山いるし……ぶつかるのは当たり前……だよな？）

カイトは先ほどの少女の行動に何の疑問を持たなかった。数百人の者が歩くこのメインストリート。無論、こんな場所では

犯罪などの少ない。目立った場所で犯行がばれると、次の日から“色々”と目を付けられるからだ。

だから、こういった場所では、陰湿な犯行がよく行われるのであった。

(……っ！！)

だが、カイトは町中に歩きだして数分後思い出した。

こんな場所で行われる一つに、窃盗があつたのだ。普通なら貧相な格好をしている氷雨など、狙うに値しない獲物だろうが、

「アニキ、実はさ、オレたちがこの町のストリートチルドレンの奴らに嫌われてるんだ。あいつらの大切な金に、オレが手をつけたおかげで、さ」

カイトやユウがいるとなれば話は別だろう。だから、カイトは氷雨に最初から説明し始めた。

「で、それがどうかしたのか？」

「うん。それでさ、奴らのすりの常套手段の一つにさ、わざと体をあてて財布を盗むつてのがあるんだけど……アニキは何か盗られなかったか？」

この方法は、カイトやユウも仕込まれた技術の一つであつた。親も、身内もない、ストリートチルドレンたちが生き残るのに編み出したのである。

そんな技術の一つに先ほどの少女の行動がとても酷似していたから、カイトは氷雨に訪ねたのだ。

「よく分かったな、その通り盗られたぞ」

「ええっ！？ アニキ本当かよ！！」

氷雨はその問いに、少しも動揺もなかった。ユウも「わたしもむねのあたりさわられた！」と元気に返事をしている。

「アニキ、なんで金を盗られて、そんなに冷静なんだよ！」

少年は欠伸をしながら歩いている彼に、大きく怒鳴った。

だが、氷雨は全く動じなかった。ピクリ、とも眉を動かさない。代わりにカイトの大きな声に反応したユウが、氷雨の胸元をあさる。何が盗られたか、確かめるためだろう。

「だいじょうぶだよ、カイにい。とられたのは“おかねのはいったきんちやく”じゃなくて“なにもはいつてないきんちやく”だから！」

「そういうことだ」

ユウの言ったことに、氷雨は深く頷いた。

先ほどの少女との邂逅。実は、少女の少しだけ感じられた“悪意”に反応した氷雨は、反射的に少女の手を何も入っていない巾着へと誘導していた。

少女もそんな長い間相手の懷をあされないので、不意に掴んだ巾着を手にも、この場所から逃げたのだろう。

それが氷雨の意図したことは知らずに――。

「なんだ。そういうことかよ……心配して損したじゃないか？」

カイトが安堵の声を漏らす。

そこからは特に何もなく、宿へと帰れた。

途中に恐喝にあっている者や、ひったくりにあっている者などがいたが、氷雨たち三人は特に気にもとめなかった。

流石不法都市だと、慣れていたようだ。

そして、次の日。

三人はやっと、——<sup>ダンジョン</sup>迷宮へ潜っていたのであった。

## 第十五話 とあるエータルでの一日（後書き）

今回の話は、天敵に少し付け足す形となりました。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## 第十六話　そして、一週間

カイトとユウのギルド登録の翌日。

暗く閉ざされた迷宮<sup>ダンジョン</sup>、三人はその石床を踏みしめながら歩いていった。

光は花。壁は石。

何度ここに訪れても変わらない光景が、そこにはあった。

「アニキ、迷宮<sup>ダンジョン</sup>って……ここまで怪物<sup>モンスター</sup>が出ないのか？」

今、彼らが居るのは、まだ1階である。

カイトは氷雨の後を追いつながら、想像していた迷宮<sup>ダンジョン</sup>とは勝手が違う様子に戸惑っていた。

少年の中ではこの場所を、冥府と変わらない場所だと、地獄に最も近い場所だと認識していたのだ。

だが、想像は現実とは異なっていた。怪物<sup>モンスター</sup>と全然出くわさないのだ。

この1階にいる怪物は二種類。スライムとルー<sup>ベル</sup>だけ。両方とも力量<sup>ベル</sup>1だ。わらわらと蛆虫のように湧き、殺しても殺しても旨み<sup>レ</sup>が無くきりが無い、と冒険者から嫌われている種類で、どの階にも出現する怪物<sup>モンスター</sup>の代表格でもあった。

「はあ、いつもこんなもんだよ。だからお前達を雇って、もっと地下に行きたかったんだよ」

「へえー！　そうなんだ！　“じじつはしょーせつよりきなり”って、このことなんだね！」

「まあ、そんなとこだな」

「やったー！あたってー！」

ユウは最近覚えた言葉を発した。

数ヶ月前からこれを教える機会をずっと狙っていたが、ストリートチルドレンのチームからの脱退や、ベルの場所代などでこたごたしていたので、そうそう使うチャンスは訪れなかった言葉だ。

なので、やっと使えた喜びから、ユウはぴょんぴょん跳ねながら歡喜を表していた。

「おにいちゃん！ わたしってすごい？」

「さあな、まだ子供だしな」

「むうー！ えいっ！」

ユウは子供扱いする氷雨に、ぽかっとお腹を叩いた。

服の下に幼少から鍛えられた腹筋がある氷雨にとっては、ユウの拳など痛くも痒くも無い。むしろ気持ちいいマッサージのような感じだ。

ところで、ご機嫌にユウと喋る氷雨の本日の調子は、最近の中で一番よかった。

昨日の筋肉痛は嘘のように消え、肉体の調子もここ数日で最高だ。それは、戦いの前に関節は外さず、出来た傷も全て無くなったからであった。

そんな風に、氷雨とユウの話に花が咲いていたが、カイトが一石を投ずる。

「……いや、そんなわけないじゃん！ アニキ、これはおかしいよ！ 普通だったら1階を通過するなら、ルーやスライムの一匹や二匹は遭遇するって！」

ダンジョン

迷宮の中で、反響する大声を出したため、氷雨とユウの二人は後ろにいたカイトに振り返った。

ユウはその拍子に、殴っていた手を止める。

カイトは背後を怪物が狙っていると、ずっと後ろを見ながら警戒しているのだ。

凄しい緊張感が少年にはあった。

初めての冒険が、カイトを臆病にさせた。危険と隣り合わせの、死と隣り合わせの冒険者になったとカイトは氷雨と違い自覚していたのだ。

「そうなのか？」

「そうだよ！ ったく、アニキは冒険者になって何年なんだよ？ このぐらいの情報、オレのようなガキでも知ってるぜ！」

首を傾げた彼に、カイトは酷評を述べた。

だからカイトは、冒険者の素質としては氷雨より向いているのだろつ。

事前に情報をよく集め、それを活用する頭を持っている。戦い以外では常に気の抜けた氷雨とは違い、迷宮に一步踏み入れた瞬間から、罠と敵を慎重に注意していた。

武力は及第点だが、その用心深さは冒険者に必須のモノだ。

——冒険者は、決して死んではならない。これは“当たり前”だその言葉通り、冒険者は常に周りを用心し、常に緊張の糸を垂ら

せておかなければ、との教訓がギルドの標語として、示されている。死ぬ者が最も多い職業、ならではの標語だった。

「なんか生意気だな」

「い、いひゃいつて、あふいき！」

言ってることはカイトが正しく、自分は気の緩みが多いと氷雨は知ってる。だからといって、年下の戯言に怒らないほど、氷雨は人でもない。

彼はカイトの目の位置までしゃがんで、頬をこねこねと引っ張っていたのだ。

「カイにい、きたよ！ これでふつーだよね！ ほら！」

そんな時、彼女は遠くの目の前を指差した。  
彼女だけ、物音が聞こえたようだ。

「なんだ？」

「やっぱり……！？」

目を凝らし、暗闇の先を見た。

その先には、半透明なゲル状の——スライムがいた。氷雨が好敵手だと思っていて、唯一逃げ出した最恐の怪物である。  
モンスター

「おっ……！」

氷雨は喜びの声を上げた。

夢にまで出てきたスライムに仕返しするチャンスが、やっと回っ

てきたのだ。

戦闘準備を即座に開始した。

片手の指をわきめきと動かし、全身の筋を程よく伸ばす。スライムに関する情報も頭の中で確認し、最適の行動を考え始めた。

「——スライム程度ならオレに任せてくれ！」

だが、そんな彼の復讐が実現することはない。

氷雨が動くよりも先にカイトが走り出し、持っていたナイフで縦に一閃したからだ。

スライムは形を保持する力がなくなり、ぐにと地面に広がった。そして煙となって消える。カイトの手によって、死んだのである。

——ピコーン、力量が6になりました。

そして、少年の右手についた『デバイス』から、音が鳴った。スライムを斃したことにより、力量アップをしたのだ。

魂の昇華とも云われる力量アップ。

この時、カイトは少しだけ強くなったのだった。

「アニキ、見てくれた……」

「けっ、いい気になるなよ」

カイトは褒められようとスライムを討伐したのだが、氷雨にとっては大きなお世話だ。

むすつとしたしかめっ面のまま、彼は落ちた結晶石の横を通り過ぎた。折角のスライムを横取りされて、どこまでも機嫌が悪かったのである。

「あーあ、おこらせちゃった〜！」

ユウは慌てるカイトを面白そうにからかって、氷雨の後を追った。彼女の足取りは軽く、スキップまでしている。

その際、彼女が結晶石を拾うのは忘れなかった。

「オレが、オレが、何したって言うんだよお〜〜！！！」

少年は遠く過ぎていった彼の背中を見つめ、叫びながら追いかけた。

氷雨の機嫌を損ねた理由が、いまいち分からないカイトなのだった。

## 6 階。

これまでの階に出現した怪物は、氷雨がほぼ全て斃してきた。ギルドで手に入れた情報と、カイトが持っていた肉声による情報。

この二つの情報が合わさった結果、氷雨は楽勝とまでは行かなかったが、掠り傷程度の怪我で遭遇した全ての怪物を斃せた。

——ちなみに、スライムはまだである。

三人が歩いていたエリアは、先が見通せず暗い。どうやら、この階の構造は壁がないようだ。

迷宮は階層ごとに、構成がガラツと変わる。壁や床の素材から、出る怪物の種類まで、千差万別であるのだ。

そんな6階の景色は、1階となんら変わらなかった。  
だが、1階と比べると簡単に息が切れる。この迷宮は下に伸びて  
いるため、下に行けば行くほど基本的に空気が薄くなり、体力が無  
くなりやすいのである。

「おにいちゃん、カイにい、疲れた……」

だからユウは腰を大きく曲げながら、深呼吸ばかりしていた。未  
発達な身体に、地下型の迷宮はつらいのであった。

「じゃあ、カイト。おぶってやれ。お前は兄だろ？」

「ええ……!? アニキ、やだよお！ オレだってしんどいんだよ  
？」

そこで氷雨はカイトにユウを背負うよう頼むが、一蹴された。カ  
イトも心身的にまだ未熟なので、自分のことだけで精一杯なのだ。  
この時、雇うのを失敗したな、と氷雨は心の中で思っていた。

「つかれた、つかれた、つかれた……!!」

「俺は……できねえよな。だって、あれ見ろよ」

駄々をこねる子供二人は、氷雨が指差すほうを見つめた。  
遠い先は闇。

並みの夜目では見えないので、カイトとユウも疑惑の色を氷雨に  
向けた。

「アニキ、なに言ってるんだ？」

「おにいちゃん、なにもいないよ？」

しかしそれは、すぐに間違いだったと気づく。

キーーーー、ガッシャン！

氷雨の指差すほうから機械音が、いや歯車の回る独特の鉄と鉄が擦れる嫌な音が聞こえたのだ。甲高く、それでいて不快な音が三人の耳に深く残る。

足音も特徴があつた。

一歩動くたびに金属がぶつかるような高い大きな音を響かせる。まるで自分達が“来たぞ”と、自己顕示欲に強いかのようであつた。

やがて、現れた姿は、白い鋼で包まれたボデイ。二足歩行で基本的なモデルとしては、人と大きく変わらない。腕にあたる部分には四本の指があるし、関節も人とはほぼ同じ場所にある。

だが、胸が大きく発達しており、“そこ”だけは一枚の鋼で覆われていた。

人にあたる関節部分から見えるのは、沢山のコード。

赤や青、緑色など沢山の線が見えている。

それ以外の箇所は、全て鋼で守られていた。

そんな怪物モンスターが持っている武器は、一本の剣。

この剣はバスタードソードと呼ばれていて、長さは1.2メートルほど。幅は狭く、両手でも片手でも扱える剣だ。

「アニキ……あれ多分、“メンシュ・アイゼン”だよ！」

カイトが言った。

氷雨もメンシュ・アイゼンという名の怪物は、強く脳内に残っている。モンスター

ダンジョン 迷宮の中でもオークと二強と云われる人型怪物で、もしオークが生物を強調して創られたなら、メンシュは機械を強調して創られたとされている。

メンシュの後に付けられている名は、すなわち装甲の金属の名だ。アイゼンの意味は——鉄。  
メンシュの中でも最下位に位置する怪物であつた。モンスター

だがメンシュの中では最弱でも、ダンジョン 迷宮の中ではそれなりに強い。  
同じ力量なら間違ひなく苦戦をし、レベル パーティーを組んでいても負ける可能性がある怪物だ。モンスター

「おにいちゃん……」

ユウは氷雨を心配した。

彼女も噂として聞いてたが、メンシュに関するのは悲惨な話ばかりだ。

レベル 力量が高い場合は何の問題も無い。しかし、近い場合やそれ以下  
の場合は、死ぬ可能性がギルドの統計で六割を超えている危険な怪物だ。モンスター  
物でもあつたからだ。

「これって……俺の力モだよな」

「えっ!？」

「おにいちゃん!？」

でも、氷雨の捕らえ方は常人と違った。

メンシュの弱点は人と変わらない。心臓、頭、関節など、ただし、関節以外の重要な装甲には、金属の鎧が邪魔をする。

そこが、“普通の冒険者”には苦手なのだ。

「ギルドで最初に見た時から、思ってたんだよ。お前は俺のいい“練習台”だつて」

氷雨はメンシュ・アイゼンを、舌なめずりをしながら見ていた。彼が、“人の弱点”を熟知しているからだ。それはギルドよりも。どの冒険者よりも。

「アニキ、それ……どういう意味なんだ？」

「簡単な話さ。あいつの装備は、ベルやその他冒険者と変わんねえ。だから力量の低いあいつは、いい“踏み台”になると、な」

「あつ!？ でも……」

カイトは、氷雨の言葉の意味に気がついた。

「おにいちゃん、わたし、いみわかんない。むずかしいよあー!」

「はあ、——簡単に言うと、そうだな。俺があいつに勝つんだよ。分かったか？」

「うん! そうなんだー! へえー」

ユウに氷雨はにつこりと笑った。

メンシュ・アイゼンは律儀にも、まだ襲ってこなかった。否、三人を敵視すらしていなかった。

メンシュ・アイゼンの目は、近くの高い温度のみに反応する。ヘビのピットセンサーに近かった。

そして、この怪物は他のとは違い、自らが襲うことは——無い。モンスター

だが、自らが襲うことは無いが、襲われたら抵抗する。

これまでに死んでいった者も、メンシュ・アイゼンが持つ希少なドロップアイテムを求めて戦ったのだ。

「——さあ、戦<sup>や</sup>ろうぜ」

氷雨はそれだけ言うと、一気に大地を駆けた。

キリキリッ！

嫌な音がメンシュ・アイゼンからし、剣を両手で持って“それは構えている。

そして、彼が近づくと、——長い剣で突いた。

氷雨は化勁、つまり手で剣の側面を触り、逸らすようにして左に剣を屈いだのだ。

ダンッ！

剣を手で往なすと、氷雨は距離を詰める。

そのまま一歩大きく踏み込んだ勢いで、メンシュ・アイゼンが剣を掴んでいた手の部分を肘で上から下へ。

カランカラン！

彼による、重力を上手く利用した肘鉄に、メンシュ・アイゼンの握力は適わなかった。剣が手から離れたのだ。

この怪物は自身の<sup>モンスター</sup>特徴である怪力を使おうと、氷雨を包容力で潰そうとした。

「——遅いな。誰よりも」

だが、その大きく広げた腕の速さは、これまで彼が会った敵の中で最も遅い。

それはあのベルでさえも超えるほど、だ。

氷雨はその機械で創られた右手を取り、——飛んだ。

メンシュ・アイゼンではなく、——氷雨が飛んだのだ。

彼は相手の右腕に絡みつくように飛び、上腕部を自分の両脚で挟んで固定する。

同時に両手で掴んだ小手返しのように横に捻って、身体を大きく捻る。

氷雨は飛びついた慣性と自身の体重、それに小手返しによって、メンシュ・アイゼンを頭から落とすように投げ、そのまま腕を逸らせるように腕挫<sup>つでひしぎじゅうじがため</sup>十字固に似たのを極めたのだ。

投げと関節の複合技である。

技名は、『竜巻』

技をかける方が、派手に身体を回すことから付けられた名であった。

ガッシャン！

メンシュ・アイゼンは頭を強く打ち、そのまま肩を関節技によって大破させられる。

頭は凹み、肩からはコードが沢山飛び出た。

そして、霧となってメンシュ・アイゼンは——死んだ。

——ピコーン、力量が<sup>レベル</sup>8になりました。

関節技をかけていたので、仰向けに寝る体勢のままの力量<sup>レベル</sup>アップだったが、氷雨はやはり大して関心を向けなかった。

（久々に使ったから、決まってよかった……）

それよりも関心を向けたのは安堵感。

『竜巻』は氷雨が使える中でも強力無比な技だが、その分ではめなほど隙が多い欠陥品だ。だから、これを使うのは二年ぶりなのだ。

「アニキ、今のかつけえ〜！ オレにも教えてくれ〜！」

「おにいちゃん、今のすつごお〜い！！」

だから、既に結晶石やドロップアイテムの回収が終わってる子供二人から、感激の目を向けられると、なんだか申し訳ないような気持ちになる。

これはまだ、氷雨の中では“不完全な技”なのだ。

——まだまだ大技すぎる、と。

「——さて、帰るぞ。今日は、この程度で十分だろ。ベルからは金を奪ってたし……」

「おう！」

「うん！」

氷雨はこの日はこれで帰った。

まだまだ、己の未熟さが見えた日だった。

例えば、技の選択肢であつたり、大群との戦いで二人の守り方、などだ。

次の日も氷雨潜っていた。

子供達には、“ある情報収集”を頼んだから、一人で迷宮ダンジョンに出向いたのである。

その探索の帰り道で、今日遭遇したメンシュ種の一つに出遭った。

その名は、メンシュ・ブロンズ。

銅のメンシュだ。

メンシュ・アイゼンとの違いはスピード。装甲が薄い分、ブロンズの方が早いのだ。

——そして、プロローグへと戻る。

## 第十七話 エピローグ

彼がメンシュ・ブロンズを斃して力量アップしたすぐ後のことだった。

すると、これまでとは異なりもう一回『デバイス』が鳴ったのだ。それは、氷雨が初めて技を手に入れた時でもあった。

——ピコーン、『力量読み』を獲得しました。

彼にとっては聞きなれない名称である。

だが、冒険者にとっては“これ”がないと、死活問題になる。何故なら、相手の強さの基準となる力量が、無制限に“視れる”からだ。もし敵の戦力を読み間違えたら、己の死に直結するからである。

そして、この技は他の全ての技と違い、特異な点がいくつかあった。

まず、武器の種類に左右されたりしない。これは剣だろうが、弓だろうが、条件さえ満たせば誰にでも使えるのである。

次に、力量が10を超えれば、誰にでも扱えたのだ。氷雨がこれまで戦ってきた冒険者達も、この技を使って彼の強さを下に視たのだ。

（でも、使わねえだろうな）

一般の冒険者ならこれ以上ないぐらい便利なものだが、“強さを力量以外の基準で測っている彼には無縁のものだった。

そんな風に氷雨はメンシュ・ブロンズの結晶石や、ドロップアイ

テムである大剣を拾いながら考えていると、あの三人組の一人が駆け寄ってきた。

「お前……いや、こんな呼び方じゃあ、俺等の窮地を救ってくれたのに申し訳がたたねえな！俺はレン！是非、名前を教えてください！」

槍を持った男。レンである。

兜をとったレンの肌は若干焼けてはいて、身長は180と氷雨よりも若干高くモデルのような八頭身。髪は短い茶髪でツンツンに立っていた。顔は綺麗には、整ってはいない。だが、太いその眉毛も含めて、男らしい顔立ちだ。

声は大きく、細い中に詰まった筋肉も、燃え滾ったような目も、その全てが炎のように――熱い。

「……氷雨だ」

「そうか！氷雨か！これからよろしくな！」

「あ……ああ」

レンは戸惑う氷雨の右手を強引に握り、尊敬するような眼差しで見つめた。

そんな青年の武器は槍だ。現在は背中にかかっており、穂先は幅広く火を模した複雑な模様となっており、色は赤い。

鎧は革で作られており、関節以外のほぼ全身を覆っていた。

「それにしても氷雨は凄いなあ……！！あいつは俺達が手も足も出なかった異常だ！それにあんな力量で勝つなんて……！憧れるぜ……！！」

「そうだな……」

氷雨は相槌だけを打ちながら、マシンガンのようなレンの話に答えていると、それを止めるように一人のがやってきた。

走らず、慌てず、ゆっくりと歩んできたその男は、先程氷雨がメンシュ・ブロンズに立ち向かうのを止めた者だった。

「レン、君はただでさえ暑苦しいんだ。それよりすまなかったな、力量が低いっただけで君の実力を下に視て……。お恥ずかしい限りだよ。ボクはアキラだ。もし、差支えがなければこれからも宜しく頼むよ」

アキラは強く握るレンとは違い、優しく氷雨の手を握った。

氷雨もそれに握り返す。彼にとってはレンよりも、好感がまだ持てる男だ。

「ああ、よろしく」

アキラは、長い金属で出来た棍棒を持った男だった。装備はレンとよく似ている。ただし、兜はなしだ。

背は氷雨よりも低く、体の線は細い。特徴としては透き通った白髪よりも、眼鏡に目が行く。こちらはレンとは違い、女性のように目鼻が整っていた。

文武両道と眉目秀麗、どちらの言葉も似合いそうな男だった。

「おい！ アキラ！ 俺が氷雨と喋ってたんだぞ！」

「ふん、君のような猪突猛進の男のせいで、彼は困ってたんだ。それを分からずしてどの口が言う？ 先程のメンシュだって、君が戦

うと言わなければ、彼に火の粉が飛ぶこともなかった！」

「だからって、しょうがねえじゃんかよ！ お前も知ってるだろ？俺が“あいつ”を早く助けたいってことは！ その為には金が必要って！！」

「ああ、知ってるさ！ 僕も君が“あの子”を助けたいと、頑張っているのは分かる。それに僕だって“あの子”を助けたいさ。だからって、命を無駄にするのは違うと僕は言いたいんだ！」

氷雨は、急激に発展したレンとアキラの会話をずっと聞いていた。お互いに強い眼差しを向けた言い争いは、次第に発展していく。冷静と思っていたアキラの語尾も、どんどん強くなっていった。

そんな口喧嘩を、彼は半分も聞いてはいない。

仲がいいから、すぐに治まると彼は思っていたのだ。仲が悪かったら口喧嘩をすつとばして殴りあいになるとか、口喧嘩の内容も下劣な相手を罵る言葉ばかりになる。

だが、この二人は違う。

この二人はあくまで価値観の相違で、争っているだけなのだ。だから、口喧嘩の内容も考え方の違いだ。

氷雨は詳しい事情は知らないが、大体の理由は分かった。レンは誰かを救うために金が必要で、そのために沢山の金を稼ぐよう、危険を冒している。アキラはそんな命を犠牲にして、金を稼ぐとするレンを非難していた。金より命のほうが大事だと。

「こらっ！ 喧嘩しちゃ駄目でしょう！」

そんな二人の言い合いを、止める者がやっと現れた。

女性であつた。

腰まであろう癖のある黒髪を、一つのゴムで結い上げながら縛っている女性だ。

「で、でもよ……」

「マミさん、し、しかし……」

「でももしかしても関係ないっ！ 争いは絶対駄目って、約束したでしょう！」

その威圧感のある女性は綺麗だった。

長いまつげの下で茶色の猫目が映えており、唇はワインのように深く赤い。アジア系の綺麗な顔立ちだった。チャームポイントは、口元にあるほくらだろう。

それに身長は高く、スタイルは完璧。特に氷雨の姉とは違い、胸部は大きかった。

見る限りは非の打ち所がない女性だった。

持っている武器は木製の簡易な弓。背中にある矢筒には三本の矢しか残っていない。今日の激戦でいくつか失ったのであろう。

装備は金属製であるが、ほぼ全身を隠している男性二人に比べると、胸と腰しか隠していないので薄い。

遠距離武器ならではの、軽装備だった。

「ごめんね。見苦しい姿を見せて……」

「い、いや、大丈夫だ。じゃあ、俺はこれで……」

氷雨は口元を隠して笑う彼女の登場にしめたと思い、ここから立

ち去ろうと軽く手を振った。

しかし、首もとの襟を掴まれ、無理やり振り向かされた。

「ちょっと待って！ まだ、私の紹介が終わってないでしょう？  
名前はマミ。これからよろしくね！」

「お、おう……」

マミは優雅に氷雨に自己紹介をしたが、彼の顔は若干引きつっている。

早く彼は帰りたいのだ。

彼がメンシュ・ブロンズから手に入れたドロップアイテムは、大剣。持ちにくく鞘も無いので、肩に背負う羽目となる。これは高く売れると思うので、捨てたりはしないが非常に重い。早く帰ってこの武器を部屋に置きたかったのだ。

「それと――聞きたいことがあるんだが、氷雨ってもしかして、“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤーじゃないのか？」

「!？」

氷雨は、アキラの質問に心臓がドクンと高鳴った。

ゲームプレイヤーと聞くのは、必ず同じゲームプレイヤーだ。それ以外の人間では、ゲームプレイヤーなんて言葉知らないだろうし、氷雨も実験として街中の人にゲームプレイヤーと尋ねてみてが、結果は不発だった。

なので、この摩訶不思議な世界で、“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤーは、あの広場にいた“数十人”しか氷雨は会ったことがなかったのだ。

(どうやって答える?)

彼は自分に問いかけた。

この場で自分がそうだ、と答えても特に問題点はない。同族意識から仲間意識が生まれ、いい関係が築けそうでもある。元の世界に帰る方法も、一緒に考えてくれそうだ。

それに立場的には現在、敵を斃した氷雨のほうが上だ。一方的に利用されるのはあり得ないだろう。

考えれば考えるほど、利点ばかりであった。

「……いや、“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤー？  
なんだそれ？ 聞いたこともねえぞ」

「へえ——そうか」

「質問はほかに無さそうだな。じゃあ俺は帰るわ」

でも、彼は教えないことを選んだ。

それはまだ、この世界を楽しみたかったからだ。

強大な怪物も、最低な冒険者も、敵になりそうな相手はまだ残っている。この世界の生活は——まだ始まったばかりなのだ。

「じゃあ——また、また会おう」

「ああ、じゃあな」

アキラは焦りながら去っていく氷雨の背中を、細い目で睨んだ。  
彼は氷雨が自分の問いに即答しなかったことから、彼をゲームプレイヤーだと確信したのだ。もし、本当に知らないなら即刻に慌てもせず、知らないと答えるからであった。

「氷雨、じゃあな〜!!」

「氷雨君、また会いましょう!」

レンとマミも、一回も振り返らない氷雨に別れを告げた。

疑惑を向けているアキラとは異なって、レンとマミは氷雨に好印象しか残っていなかった。

（あーあ、ばれたか。俺は——嘘が下手だなあ）

だが結果的に嘘をついたとしても、氷雨はアキラにゲームプレイヤーだと気づかれたのは気づいていた。

最後にアキラの顔を見たとき、表情が一変して鋭くなっていたからだ。そんな彼のアキラの評価は高かった。やはり、あの秀才のような雰囲気からして——意外とやるな、と。

「アキラ、どうして氷雨にあんな質問したんだよ？ あんな“強い奴”が俺達と同じわけないだろ？」

「レン、なんだっていいだろう。単なる確認だ。情報は一つでも多く必要だからな」

アキラは誰にも疑いを向けないレンに、真実を話さなかった。

彼は親友として、レンの長所を変えなくなかったのだ。そんなレンの長所は、——あの熱さだからだ。頭は回らないが、困ってる人

がいたら迷わず手を差し伸べる。その性格に、アキラも助かったことがあったのだ。

「ねえ、なんの話をしてるの？　もしかして男どおしの会話かな？」

「ち、違いよ、マミ！　だからそんなに顔を近づけるなって！」

マミは、男二人で話しているのを不思議に思ったのか、不本意にレンの顔に近づけた。

その顔は怪しい魅力に満ちていた。天然なので男を騙すことはできないのが、口元にあるほくろが彼女の魅力を最大限に引き出しているのだ。

その魅力は、レンを真っ赤にさせるほど、だ。ついでにマミも、レンの顔に近づいたので赤くなった。

「マミ！　レン！　いつまでもイチャイチャしてないで、そろそろ僕達も帰るぞ！」

「お、おう」

「う、うん」

アキラは、親友二人を溜息をつきながら、行動を即した。イチャイチャと指摘された二人は、完熟トマトのように顔を真っ赤にする。

彼が考えるに、この二人は早く付き合っしまえばいいと思う。相思相愛だからだ。二人とも鈍感なので気づいてはいないが、端から見れば瞬時に気づく。

ところで、とアキラは帰る道を辿りながら、レンに聞きたいことがあった。

「レン、君は“あの子”を本当に助けるのか？　こう言っちゃあ聞こえは悪いが、あんな境遇の奴なんてざらにいる。それでも“あの子だけ”をまだ助けたいと思うのか？」

だから、アキラは一回レンに確認をしてみた。

あの、“銀髪の女性”である奴隷を、救うのは事実なのか、と。非合法の奴隷なんて、この世界には数え切れないほどいる。その種類も様々だ。エルフ、ドワーフ、人間、それも老若男女問わず様々な値段で売られている。

それら全てを救うなんて、奴隷商法の根本から壊さなければいけない。

そんなの不可能に近い。

だから、再確認したのだ。――本当にあの子を助けるのか、と。

「おう！　だってあいつは何も言わないけど、助けを求めてるんだぜ！　だったら、助けなくちゃならない！　例え、それが数多くいる奴隷の一人という氷山の一角でも、あいつを助けちゃならない理由にはならないんだ！」

でも、レンは言った。

偽善とも云えるその考えを。

レン自身も、これが自己満足とは分かっている。この世界に来た時ではなく、“ダンジョン・セルボニス”のゲームをプレイしていた時に知り合った“彼女”を救う、と。

「フン、君らしいな」

アキラも始めから、答えが分かっていた質問だ。

あの“レン”が、“彼女”を奴隷から開放しないなんて、ありえないと思っていたのだ。

でも、あえて聞いた。中途半端な覚悟は実を結ばないからだ。

「俺らしいだろう？」

レンとアキラはお互いに拳をぶつけ、笑いあった。

その姿に嫉妬し、別の女に興味を向けるレンに嫉妬し、その後ちよつとした騒動が起こったが、それは別の話だ。

——これが“始まり”だった。

氷雨が冒険者になって早一週間、色々なことが起こった。様々な敵と戦い、色々な人物と知り合い、不可解な出来事が数多く起こった。

ここから、彼の“本当の冒険”が始まるのだ。

彼の現在の装備、古びた灰色のマント。持ち物、売却予定の装飾品や武器多数。

所持金、84070ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数26。モンスター 力量11。レベル

獲得技、スキル 『力量読み』。レベル

仲間、カイトとユウ。

## 第十七話 エピソード（後書き）

ここで第一章は終わりです。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## 第零話 プロローグ

太陽の日差しが、惜しげもなく降り注がれるメインストリートには、沢山の人々で賑わっていた。

その界限には、果物や干し肉などを売っているような露天が多数あるような町だった。

そう、ここ——無法都市エータルの表の昼間は、とても明るかったのである。

そんな町中の無数の人間の中に、一人の男がいる。

——灰色の男だ。

身を古びた灰色のマントに包み、その隙間からは下級の町人が着るような粗い目の布の服が見える。その干からびた風貌から一風変わった空気を醸し出すが、冒険者と云う際立つて異色なりわいの生業なりわいの者がこの町には溢れるていので、さほど注目もされてなかった。

ただ彼の事を近くから見た幾人かの冒険者にはとても——濃く見えた。

腰に武器はなく、背中にもない。防具を装着している様子もない。身なりだけでは成長したストリートチルドレンかと思える。

だが、服からはみ出た四肢が、常人の“それ”とは違っていた。細かな傷が多数ついており、筋肉で皮膚が隆起していたのだ。“

それ”は筋肉自慢の冒険者に比べれば細いが、戦うには十分なほどの量だと感じた。太すぎず、細すぎず、まるで戦闘に特化した肉だと思えば納得できる。

瞬時に戦意を失い、恐れを抱くほどの“それ”だった。

そんな風に、一部の人間を黙らせる者の名は——南雲氷雨。なぐもひさめ

ついこの間までは、武芸を嗜んだだけの地味な青年だった。学校では勉強でもスポーツでも殆ど目立たず、友達も数人。どこにもいる——とは云いがたいが、とにかく印象が残らないような学生だった。

それが十七日前、世界初のVRMMORPGである“ダンジョン・セルボニス”をログアウトした時、わけの分からな異世界で目覚めてしまった。

その後、沢山の紆余曲折があった後、現在氷雨は冒険者になり、このメインストリートを歩いているのだ。

そんな彼は、数多くの迷宮探索で結晶石を沢山手に入れたので、目的地は“闇の換金所”だった。

九日前、三ヶ月は結晶石を納めなくていいと、ギルドの受付員から言われた。なので、本来なら不正である“闇の換金所”を悠々と利用しているのだ。

ちなみに、カイトとユウの分の結晶石はついこの前、二人の力量<sup>レベル</sup>が低い内に納品してる。

（あつちい……）

氷雨が人ごみの中を暑苦しそうに頂垂れていると、少し先に丸く開いた空間があった。

その空間“だけ”、避けるように人がいないのだ。丸く開いた場所には、には二人の男女だけがいる。

「おらああ！ どういうつもりだああ！！」

男は鎧で隠した肉たるまのように肥満と筋肉で強制に大きくしたような体と、ドスの効いた低い濁声で怒鳴っている。

その相手は、簡易なエプロンドレスの少女。可愛らしく幼さが残った氷雨と同じ程度の女性に、詰め寄っていたのだ。

「えっ……いや……あの……！ 申し訳ございませんー！」

少女はただ、頭を下げていた

一心不乱に頭を下げ、冒険者崩れ風の男に謝っている。  
他に術が無いからである。

「謝つてすむ問題じゃあねえんだよ！ オレの体に当たったのはいい。それは許す。でもな！ あんたのせいで武器が欠けちまったんだ！ 武器は冒険者の生命線だ。どうしてくれるんだよー！」

男は背中にかけていた剥き出しでぼろぼろの槍を、女の眼前に出していた。確かに男が指差している箇所は、ほんの少しだけ欠けている。

争いの原因は分らない。

だが、後ろで目を光らせている“騎士”が手を出さないことを見ると、冒険者崩れ風の男が正論のようだ。

“騎士”とは、貴族の中でも実力者がなれる職業で、警察のような組織のことでもある。つまり、この町の“法”なのだ。

法律などが意味をなさないこの町では、基本的に“強者”が上だ。その“強者”の頂点に位置する人種、それが“騎士”だ。彼等は自らを“法”と称し、楯突いた者は肅清として全て殺すことができる。

これが、この町の“法”なのだ。

だから——理不尽を我で通し、わがままを我で通せる。

しかし、なんでも好き勝手出来る、というわけではない。

“法”を施行するには、大義名分が必要だ。大義名分とは、庶民が反逆を行わないようにと、作られたものだ。昔、あまりに騎士が好き勝手に行動した為に、起きた庶民による反乱。その抑止力として大義名分という正論が必要になったのだ。

つまり、——民衆を説得できる大義名分があれば、いつでも“その”権力を行使できるのだった。

「申し訳ございません！　どうか……どうか……」

「だから！　そうじゃねえんだよ！　こっちとしてはな誠意を見せてほしいんだよ。分かるか？」

「は、はい……」

「じゃあ、払え！　ほんの10000ギルだ。高くはねえだろ？」

「で……でも……」

「どっちなんだよ！　払えるか払えないか？　払えないならお前を売っちまうぞ……！」

「払え………ません」

男はニヤついた顔で、少女を見下ろしていた。

少女は少し顔を上げて誰かに助けを求めるが、庶民はもとより騎士でさえも野次馬根性で面白がって見ているだけ。

絶体絶命のピンチだった

（いい獲物だ……！）

そんな光景を見て、氷雨は、いや彼の仲の獣は、貌は愉悦に浸りきっている。

首を突っ込む気満々なのだ。

だが、決して勘違いをしてはいけない。

彼は少女を救うわけではなく、戦いに心を惹かれたのだ。

準備体操のため、体中の骨を鳴らす。体の筋も伸ばし始めた。

氷雨はあのベルという斧使いを斃すと、ぱったりと対人戦に遭遇しないようになった。だからこれまでの九日間怪物退治ばかりだ。モンスターそれも彼にとってはそれ程強くない。

——故に餓えていた。

心の内に潜む獣は、上質な戦闘に餓えていた。

あんな冒険者崩れで獣が満足するかどうかは別だが、確かにこの時——氷雨は戦いたかったのだ。

「——止めるよ！ この外道っ！！」

しかし、——氷雨は結局戦えない。

彼が準備体操をしている間に、男が少女の腕を掴もうとする凄くいいタイミングで、氷雨にとっての冒険者にとっても“邪魔者”が現れたのだ。

「お前！ 彼女をどうするつもりなんだよっ！」

その男の名は、レン。

奇しくも武器は男と同じ槍で、鎧は軽装。街中のため、がちりとは身を固めていないようだ。

氷雨が前回出遭ったときと同様、——熱い男だった。

ただ、今回の熱さは前回とは違う。

怒りで、男に対する憤怒の感情で、心を燃やしているのだ。

「どうするって？ こいつを売るんだよ！ こいつが！ オレの槍を！ 駄目にしたんだ！！！！ 慰謝料は貰って当然だろうが！！」

冒険者崩れの男は、さも当たり前とばかりに——吼えた。

だが、正義感に溢れたレンが、そんな男にとっての正論で納得するわけがない。

男の正論が、レンにとっての正論ではないからだ。

「そんないたいけな少女を“奴隷”にするのが当然だっ！ ふざけるな！ お前はたんに金が欲しいだけだろうがっ！ こ、このっ

……………」

「レン、悪口が見つからないなら、無理に言わなくていいんだよ？」

啖呵が途中で止まるレンに、その後ろから出てきたアキラが突っ込みを入れた。

アキラも棍棒を携帯しており、服も前回と比べると軽装だ。

「…………こ、この外道めっ！！」

レンは心が強かった。

いくらアキラに凶星を指摘されたからだといって、途中で言葉を止めるような男ではない。

どれだけ恥ずかしくても、最後まで言い切ったのだ。

「だからなんなんだよ！ これはこいつとオレの問題だ！ お前に何か口答えされる覚えはねえんだよ！」

男は頭が悪くはない。

ここでレンの挑発に触発されて、激情するのではなく、ここは耐えて少女を早く奴隷商人に売ったほうが得策だと考えたのだ。

レンに勝てる勝てないの問題ではない。

どちらの方がより合理的で、より自分にとって得かを考えた結果、こういう答えが出たのである。

「く、くっそお〜」

彼はこの男の反応に、低く唸るばかり。レンが唯一考えていた策が、失敗したからだ。

しかし、だからといって迷宮ダンジョンならまだしも、街中で急に殴ることは出来ない。

後ろで騎士の目が光ってるからだ。

騎士に捕まったら、その後の人生を左右される。

迂闊な行動はできないのだ。

「はん、他に言うことがねえな……」

「君はその槍を直して欲しいんだろ？ ならこれで十分だ」

胸をはり、堂々とレンに屈辱の言葉を浴びさせようとした時、アキラが止めた。

彼は槍の材質や少女が欠けさせた量ならこの位が妥当と、銀貨を一枚男に投げる。

「どういつつもりだ？ 折角、大金が手に入るんだ！ こんな、はした金で足りるわけねえだろうが！！」

「フツ、拾ったな？」

男はその銀貨を拾いアキラに見せ付けながら、激昂した。  
だが、彼はおもしろそうに笑っている。

咄嗟に考えた“作戦”が、成功したからの、笑みだった。子供が悪戯を成功させた時の“それ”に近い。

「ああ、拾ったが……いやそうじゃねえ！ どういつつもりなんだ！！」

「——拾った、ということとは、その子が傷つけた武器の慰謝料を受け取ったと考える。大人しくその子を開放するんだ。それにその程度の粗悪な武器、銀貨一枚でも多いぐらいだ」

おおーと、観衆はアキラの取って付けたような作戦に感心した。  
どんな後付であっても、どんないい加減な考えでも、この町では民衆を納得させたほうが、正義なのだ。

そこに何が正しくて、何が間違ってるといった、道徳的理論はない。

——多数派が正しいのだ。

それを証拠に騎士は何も言ってこなかった。

悪知恵は、アキラのほうが働いたのだ。

（不味い。不味いぞ。このままじゃ、最初から欠けていた槍を使った“猿芝居”が、台無しになっちまう。ということはヤバイぞ！）

冒険者崩れの男は、アキラの理論に焦る。

自分の所属している“闇ギルド”への滞納金が、今月分まだ払えていないのだ。迷宮<sup>ダンジョン</sup>で手に入れた報酬は、一時の気の迷いで酒と女に消えた。

今月は残り三日。

迷宮<sup>ダンジョン</sup>では滞納金の全ては稼げないし、装備を売ったら生活が出来なくなる。

だから、こんな凶行に男は及んだのだった。

「フン！ そんな屁理屈が通用するかああああああああああああああああああ！！」

男はアキラに、欠けた槍で突こうとした。

そんな男の判断はもう正常ではなかった。

もともと、道中で多少肩がぶつかったただけで、あんないい加減なことを言っただ。もともと正常ではなかったのかもしれない。

「アキラっ！」

だが、その攻撃をレンが持っていた槍で弾いた。

そのまま、“防衛”<sup>スキル</sup>として、技を放つ。

——槍技<sup>スキル</sup>『疾槍』。

ただの早い突きだ。

「ぐばあっ！」

向かった先は男の左肩。

だが、当たったのは刃の部分ではなく、裏の棒の部分だ。

レンの攻撃は死ぬことのないが、武器を持たなくなった。  
肩の骨を砕いたのである。そのまま地面に横がり、男はのびていた。

「レン、恩に着るよ……」

「おうよー!!」

これで一件落着だった。

男は倒され、少女も売られることはない。  
だが、問題は“他”に残っている。

「——あ、あのっ!!」

エプロンドレスの可愛らしい少女が、レンに話しかけたのだ。  
誰も助けてくれないようなピンチを、王子様のように助けてくれたレンに、特別な感情を抱かないわけがない。

その少女の茶色の目は、——恋する乙女のようにキラキラと光っている。

「よかったな! 助かって!」

「はううう……」

そして、最後に、レンの少年のような瞳に少女は心をやられた。  
止めをさされたのだ。

その背後で、鈍感なレンに代わって、今までと同じような展開に向かってアキラが一言。

「はあ、やっぱりこうなったか……。マミさんがもう少しでここに

来るといつのに……」

アキラは未来を想像していた。

レンがマミに、理不尽に殴られる未来を……。

ちなみに氷雨は、この時に目の前で起こった事実からやっと回復し、目的地である“闇の換金所”へ向かっていた。

心の中ではとても、レンのことを羨ましく思っていたらしい。

その日の夕方、氷雨が宿へ帰るとベットのの上に二人の子供がいた。カイトとユウだ。

服装は氷雨と同じような服の上に灰色のマントと、数日前と変わりはしないが、顔の血色はよくなっている。

ストリートチルドレン時代とは違い、栄養価の高い食事が多く取れるからだろう。

なので、カイトもユウも子供らしい丸い体つきとなっていた。

そんな二人に向かって、帰ってくるや早々、氷雨は驚愕の一言を述べた。

「——おい、“美人の奴隷”はどこに売ってるんだ？」

「はっ、本気……なのか!？」

「えっ……!？」

今日の遠くから見たレンたちの一幕を見て、彼が考え付いたこと

だった。

氷雨の表情は真剣で、子供たち二人を見つめる。  
下劣なセリフとは正反対の、真面目な顔つきだった。

「ああ、本気だ。で、売ってるのか？ “美人の奴隷”は」

氷雨は“美人の奴隷”を必ず強調する。  
どうやらこれが一番大切なようだ。

「売ってると思うけど……」

「おにいちゃん！ ほんとうにほんとうなの？ ほんとうに“美人の奴隷”をかうの？」

カイトの肯定の言葉を遮るように、ユウが大声を出した。  
だが、氷雨は毅然として態度は変えない。  
当然のように彼は答えた。

「ああ、本当だ。——じゃあ、これから行こうぜ」

氷雨の懐はたっぷりと潤っている。  
度重なる不正行為によって、南国が訪れているのだ。  
買うならお金のある今しかないと、考えているのだ。

「うーん、分かったよ。でもさ、一日待ってくれよ。奴隷の情報は、  
入れ替えが激しいんだ」

「そうなのか？」

この業界にあまり詳しくない氷雨は、確認のように聞いた。

「うん。そうだよ」

「おにいちゃん、わるいものでもたべたのかな？」

カイトとユウは、氷雨を疑惑の目で見つめていた。

二人はまだ子供であるが、もと裏の世界の住人として、内容は詳しく知らないのだが、大人の男が美人な娼婦を好きなのは知っている。

氷雨が娼婦へ行ったことは——まだ一度もない。  
だから、この急激な彼の要求についていけなかったのである。

「じゃあ、ユウ。オレはちょっと行ってくるな」

「うん！　いつてらっしゃい！」

「気をつけるよ？」

そう言つて、氷雨は金貨を一枚カイトに投げた。おそらく、いい奴隷の居場所の情報代だろう。

「分かつてるよ！」

時は黄昏時。

氷雨は怪物でもないのに、モンスター興奮している。子供達二人は、氷雨の変貌に驚きとどまっていた。

——氷雨はやはり変わっていた。

## 第一話 歡樂街

——不法都市エータル。

暗く、陰鬱で、真つ暗闇の希望もない町だったが、唯一東南だけには——夢があつた。

そこは夜がない場所だと、町中の者から言われていた。この町で唯一、夜間営業が“騎士”から黙認されているエリアだからだ。

いわゆる——歡樂街。

夜でも明かりが差し、魅力的な女性がたくさんいて、常世に疲れた冒険者が羽を休める場所であつた。

「すっげえ!!」

現在、カイトはたった一人で、そんな禁断のエリアにいた。

少年の目の前では、怪しい外灯で蛍のように人を集め、妖艶な女性で店に誘っていた。子供である彼には、初めて目の当たりにした欲望うごめく場所だ。

決して子供であるカイトが、居て、大丈夫な場所ではない。もし歡樂街の表通りへと出れば、たちまち身ぐるみを剥がされるだろう。

「……つと、仕事しなくちゃな! アニキからの久しぶりの依頼だしっ!!」

だが、彼がいたのは幸いにも裏道であつた。

それもネズミが闊歩<sup>かつぽ</sup>し、ゴミが溢れる裏道。これから女を抱き、美味しい酒を飲もうとしている冒険者が入るような場所ではない。

無論、そこにはカイト以外の人間はいなかった。

カイトはそんなところから、表の華やかな世界を見ていたが、す

ぐに用事を思い出し、行動に移した。

年端もいかぬ少年が、慣れたように闇に紛れるのは驚嘆の二文字だろう。

「……さ、てと……」

彼が向かったのは、一軒の酒場だ。

それも税のかかるギルドとは違い、少しばかり安く、法を守っていないエータルならではの酒場である。カイトはまずそんな酒場に、店の裏口から入った。

そこはキッチンであつた。

明かりが全くなく、もう使われていないキッチンである。クモの巢まで張っており、長年使われていない鍋やお玉が、悲しげに放置されていた。

（昔は料理屋だったのかな？）

カイトが予測する。

売れなくなった店が、借金のため売り払い、別の用途に使われるのはよくあることだ。中を改装したり、立て替えたりするのが、容易に行えないこの世界ならではの“当たり前”であつた。

この歓楽街にある遊郭ゆっかくも、そのほとんどがもとあつた店や家、宿屋などを使つていた。

「おい！ 姉ちゃん！！ こっちにも酒頼む！！」

「はいはい！！」

「ちょっとこっちでサービスしてくれよ！ な？ な？」

「それは隣の店に行ってくださいな」

最初、カイトは物陰に隠れながら進んでいた。すると、数十センチ進んだあたりで、遠くの方から彼の耳に、野太い声と艶やかな声がかつきりと聞こえた。と、同時にアルコール臭もした。

その瞬間、より一層、見つかったらと思うと、気を引き締めることになるのだった。

カイトは抜き足、差し足、忍び足、とキッチンをまた歩く。

「っ！！」

そして、暗いキッチンから、酒場の中の様子を遠目から覗き見ると、鼻血が出るかと思った。

透けるほど薄い一枚の布を身につけた女性が、筋骨隆々な冒険者たちの給仕を務めていたのである。酒を出し、簡単なつまみを出し、話をするといった仕事だ。

「ユウガオちゃん！ ちょっとこっちで話を聞いてくれよ？」

「いいわよー！ ちょっと待ってねー！」

酒を煽るように飲む野太い冒険者が近くの女性に声をかける。するとそんな従業員は嫌な顔一つせず、隣の席に座り、話し始めた。

「ウスクモちゃん！ オレにエール酒を頼む！！」

「はい！」

同じパーティーの冒険者と呑んでいた男は、切れた酒を近くの女性に頼んだ。別の木の器に入っていたエール酒を、女性は間髪も入

れずすぐに入れる。

（時間との戦いだな……）

カイトは様々な者の話し声が聞こえる暗いキッチンで、じっと身を潜めた。

これが、彼の情報の得方であった。

金も、コネも、力も無いカイトは“普通”の方法ではなかなか情報は手に入らない。いい宿、いい食堂など。これらは町をすみからすみまで歩いたら、まだ、手に入るが、高値な情報であるホットなニュースは手に入らない。

だが、そういうのを手に入れないければ、ストリートチルドレンを抜けたカイトは生活できなかった。

だから——裏技、ともいえる方法を作ったのである。

それは“盗み聞き”。ばれれば即死物の危ない方法だが、生きるためにはしかたがない、とカイトは危険を顧みず、この方法をずっと続けていた。

今なら氷雨からお金を渡されたので、普通に情報を買うことができるが、それは彼は使わなかった。

恐いのだ。

金を持っているのを、どこかのゴロツキかハイエナに聞かれ、目を付けられるのを。この方法なら、バレさえしなければ目を付けられることはない。

そして、カイトは、これが見つかった回数は——零。

小動物並みの危機感知能力は、脱帽に値するものであった。

彼はそんな風に、注意のネットを張り巡らせていてから、数十分

が経った。

「なあ、知っているか？ 最近下位の名無しの迷宮に、凄く強い怪物<sup>モンスター</sup>がいるらしいぞ！」

や、

「そうそう最近さあ！ 人をこけにしたようなふざけた“名”があるらしいぞ！」

など、様々な情報は手に入ったが、念願の情報は聞けなかった。そうカイトの考案したこの方法は利点が多いのだが難点として、聞きたい情報が聞けないのである。

（もうちょつと粘るか……）

少し、月は落ちた。

だが、カイトはもう少しここに残ることにした。残れば残るほどリスクは高まるのだが、彼はそれをとった。

アニキと親しみを込めて呼んでいる氷雨の期待に応えられないのが、嫌だったようだ。

それは貰った金貨を使わず、情報を手に入れて、氷雨に褒められたいとの胸中もあったのだろう。

「……オレさあ、今日いいアイテムを手に入れたんだよ……それも高く売れたアイテムなんだよな……」

雑談によるノイズが入り混じった多数人の会話。その中に、ふと、注目するような会話があった。なのでカイトはそつと、耳を済ませた。

「へえ、そうなんだ……。どのくらい手に入ったの？」

囁くように応えた妖美な女性は、腕首や太ももに宝石をあしらったアクセサリーをつけていた。白く透き通るような肌に、赤や青など色鮮やかな宝石はとても似合っている。

いや、彼女だけではない。どの女性も自分を引き立てるため、邪魔にならない程度につけていた。

「内緒だったらいいぜ？」

「ええ。誰にも言わないわ。だ・か・ら、おしえて？」

その女性は足を組み替えた。

それだけで、クラッと脳髓に響くよう刺激が、そこにはある。それだけではない。熱い吐息。滴る汗。少し透ける服、など溢れんばかりの魅力があった。

「……70万ギルだ」

酒の酔いに騙され、女の色香に騙され、場の明るい雰囲気にも騙され、男は女の耳元で喋った。

「……っ！」

「凄いだろ？ 俺のような中堅どころじゃ、絶対に手に入らない金だ——」

男が語るそれは、真実だった。

冒険者は金を生活費だけではなく、装備にも使う。それは武器の

殆どが消耗品だからである。使えば使うほど切れ味は落ち、鎧は欠ける。それにより強い新たな武器も欲しいだろう。

だから冒険者は、高い給料の割に儲からないのであった。

「——で、だ。そこで、だ。この後、仕事の後どうだい？　一緒にフラッとどこかへ行かないか？」

そして囁くように、男は誘った。

甘美な魔力がある言葉を。

詳しくは語っていない。だが、女には意味がよく分かった。

「……………遠慮しとくわ」

しかし女は断った。

「……………なんでだ？　美味しい話だと思うぜ」

「そうね。でも、私はそんな気無いし、今日はいいわ」

「そうかい……………。悪かったな……………」

男は簡単に諦め、それ以上無理強いはしなかった。

もし彼女たちに何かあれば、すぐにこのオーナーの直属の兵士が飛んでやってくる。ここは“そういう”場所ではない。ただ魅力的な女性と会話をし、酒を飲む場所なのだ。“そういう”ことがしたければ、隣の店に行けばよかった。

「でも、代わりといってはなんだけど、いい情報をあげるわ」

「いい情報？」

「ええ。とってもいい情報だね。その程度のお金があれば——とびつきの美女が買えるのよ」

男は眼を見開いた。

奴隷は——高い。

この町でいい物は、おそらく豪邸よりも上回るだろう。それに比べれば、70万ギルなどはした金である。

「ウソだろ……。どうせ美味そうに太った女だろ……」

男は興味がなさそうな目で、女を見た。

「いえ、本当に美女よ。私なんか足元にも及ばないくらい……そうね。一応そこは信用していいわ。あの“ユビキタス商会”だし」

「本当かよ！……いや、待てよ。確かユビキタス商会って、奴隷商売やってなかったよな？ 大通りにある俺の知っている店は、奴隷なんて売ってなかったぞ？」

「で、しょうね……」

「は？ どういうことだ？」

女の知ったような感じに、男は疑問を持った。

「そこじゃあ無いのよ。そこじゃなくて、南東の表に果物屋があったでしょ？ ほら、あの珍しい無花果が売っている店よ……」

「ああ」

「その裏にある店で、とても安くいい奴隷が売ってるのよ。これ内緒よ？ 私知ってる秘密だから……」

禁断の情報を、女は男へ教えた。

その瞬間、キッチンで物音が聞こえた。

それを不思議に思った客がいない女性従業員は、長年使われていないキッチンに足を踏み入れるが、そこには誰もいなかった。ただ、扉が開いていただけ。女性はそれを疑問に思っていた。

「内緒か……。分かったよ。じゃあ、お代はここに置いといていいよな？ ちょっと用事が出来たんでな！」

「ふふつ、忙しい人ね。じゃ、また来てね」

「一生来ないかもしれないな」

口がにやけた男は硬貨を何枚か机の上に置いて、店から出て行った。

女は急に態度が変わった男に向かって、ほっとしたようなため息を一つ。そして、それから女は先ほどの男のことを忘れるように仕事に励んだ。

そして黎明が来て、仕事が終わる、店から出て、自分の住んでいる家へと帰ろうとしたころ――声が鳴った。

「――ユウガオさん！ ユビキタス商会のエータル支部奴隷部門の宣伝ありがとうございます！ あなたの奴隷契約は、あと200万ギルで終わりですね！！ それまで、これまでと同じように、妹さんのため存分と働いてください！！」

人を挑発したような変に甲高い声だった。  
それに、

「……はい」

「素直はいいことですねっ！！」

女は歯を噛みしめながら、首を縦に振ることしかできないのだった。

## 第一話 歡樂街（後書き）

第二章の第一話は変わりました、前回には無い話になっております。もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0765y/>

---

戦人の迷宮探索（改訂版）

2011年11月13日00時16分発行